
K N A V E ~ 青女月の少年

益次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K N A V E ー 青女月の少年

【Nコード】

N 0 4 8 4 R

【作者名】

益次郎

【あらすじ】

九州・熊本県の小さな湖で起きた連続通り魔事件。捜査一課の青木は極秘の捜査を進めていくうちに人とは違う種族の秘密を知ることとなる。

一方、県内の高校に通う馬原のまわりでもその種族は人知れず動いているのであった。

人とその種族が交わした密約とは……？

署内にて

「セミも減ったなあ」

男はぽつりとつぶやいた。

誰に語りかけるでもない、男は一人で水面を見つめていた。

まだ暑い9月の初旬、その静かに流れる透き通った湧き水は心なしか残暑を和らげてくれているようだった。

湖沿いの丸太の柵に腰掛け、男はどれだけの時間をそこですごしただろうか。ふうつと深いため息をつき、蒸し暑さで湿ったあごの下をぬぐった。陽は傾いてきている。

もつなにもかもうでもよくなった。このまま家にも帰らずどこか遠くへ行けたらどんなにいいだろうか。

ゆらゆらと手を振るように揺れる水草を眺めていると、思い出したくもないあの光景が甦る。知りたくなかった、信じられないあの光景が。忘れてしまいたい。男はそれを振り払うかのように頭を振った。

いつそこの冷たい水に飛び込んで頭を冷やすか、そんなことも考えた。

西の空には薄黒い厚い雲が広がってきている。夕立がきそうだ。

男は重い腰を上げた。現実の世界に戻るのだ。

柵から軽く飛び降り、振り返った男の目に飛び込んできたのは一人の男の子だった。

酷く泣いている。泣きたい気持ちなら男も一緒だった。

普段なら気にも留めなかっただろう。だがその日は違った。

「どうしたんだい」

少年は声をかけた。返事はない。男の子は泣いている。

「おうちはどこ？ おかあさんは？」

男の子は首を振る。母親は近くにいないようだ。

男は困った。声をかけてしまった手前、このままほったらかしに

して帰るわけにもいかない。男がいるこの場所は湖の端で決して人通りが多い方ではないのだ。

（近くに交番があったな）

ふと男の子の足元に目をやった。

…血だ。

泣いている理由がわかった。湖にある公園で転びでもしてケガをしたのだろう。

膝から血が出ている。

トクン……。

男はその膝をつたう赤い液体を見ている。

赤い、赤い、あかい……。

（なんだ……）

少しずつ、少しずつ、鼓動が速くなるのを感じた。

男がいまだ感じた事のない渴き気付くまでそう時間はかからなかった。

そして男は——喉を鳴らした。

「青木さん」

熊本東警察署捜査一課の刑事、青木陽一はおぼつかない手つきでパソコンに向かっていた。

「青木さん」

集中して仕事をしてる時に限って邪魔が入る。なんでこうも間が悪い奴がいるんだろう。青木は不思議でしょうがない。ほんの5分前にやっとパソコンにむかってやる気になったばかりなのに。神様が慣れないデスクワークなんかするなと言っててる様だ。

「青木さん、署長が呼んでるそうですよ」

俺を呼ぶあいつのせいでこの書類の提出は遅れる。遅れるのはあいつのせいだ、俺は仕事をする気になつていたというのに。青木は面倒くさそうに自分を呼ぶ方に体を向けた。

「うるせえな、聞こえてるよ。何回も呼ぶんじゃ……なんだと？」

青木は思わず聞き返した。

「すぐ署長室に行けって、課長が」

後輩の木下が半ばニヤつきながら青木を見ている。

「なんでだよ。この前の事件の報告書なら今やってるとこだよ」

「僕は知りませんよ。直接言ってくださいよ」

青木は先日市内で起きた殺人事件の報告書を作っている途中だった。彼は一つの事件が片付くとブスンと充電が切れてしまい、次の動きまで時間がかかってしまう困った性質の持ち主なのだ。だから早く書類を出せと課長から尻を叩かれていたのは確かだが、何も署長に呼ばれることはないだろう。一体何事だ。

「また何かやつたんですか？」

青木が椅子から腰をあげかけているところにまた木下が声をかける。

「また、とはなんだこの野郎。何もしてねえよ。酒も全然飲んでねえ」

木下が冗談ですよ、と笑う。

立ち上がってちらつと課長のデスクに目をやった。

内川課長はコピーヒート片手に青木を見ていた。行け、と言わんばかりにドアの方を指さしている。その目は真剣そのものだつた。

青木はただ事ではない予感がした。しかし本人に心当たりはない。だからそんなビクつく必要もないだろう、堂々として行つてやろう、青木は自分に言い聞かせた。

「報告書は僕やつときます」

木下がパソコンを指さす。すると内川が、

「木下あ、お前も」

青木はぎょつとしている木下の襟首をつかんで道連れができた

笑いながら捜査一課を後にした。

「課長、何事です？」

二人が出て行ったドアを見ながら他の同僚の刑事が問いかけた。

「さあな……」

首をかしげる刑事をよそに内川は、言葉を濁しながらカップのコーヒを一気に飲み干した。

「なんで僕まで一緒なんだろう」

足取りの重い木下が言う。

「なんで悪い方にしか考えねえんだよ。事件解決のご褒美かもしれないだろうが」

青木は励ますように言った。だが本人はそんなことこれっぽっちも思っていない。

青木は2年前、かなり酒に溺れていた時期があった。刑事という仕事のストレス、家庭でのいざこざで精神的に参ってしまい酒という秘薬から逃れられなくなっていた。

そして酔った拳句の喧嘩や二日酔いで捜査など、決して大事には至らなかったものの度々トラブルを起こして署長から直接注意を受けていた。

そんな自分に嫌気がさし、刑事を辞めようとまで思っていた青木を救ったのが捜査一課課長の内川だった。

ある日、内川は嫁と子供も出て行った青木の家に乗り込み、昼間から酒を飲んでいびきをかいて寝ていた青木を叩き起こし、そして

——何も言わず顔を思い切り殴りつけたのだ。

もともと7年前、捜査一課にやってきた青木の刑事としての才能を内川は買っていた。ここで刑事を辞めさせるのは惜しい、眼を覚まさせたい、そういう気持ちで内川をそういう行動に出させたのだろう。

その内川の鉄拳制裁によって青木も改心し、それ以来酒を断っている。

もともとけんかつ早い青木も内川には頭が上がらない。そういうこともあつて署長室にはいい思い出はないのだ。

「最近は何木さんもまじめに勤務してるんですけどねえ」

また木下が皮肉った。この男はひとこと多いのだ。

「まったくだ」

さすがの青木も苦笑いした。

2階の西側の捜査一課から1階中央の署長室の前まで二人はやってきた。木下が青木に目をやると青木はあごで扉を示す。お前がノックしろということらしい。

「ずるいなあ」

木下がふうと深呼吸して扉を叩く。

「捜査一課の木下と青木です」

青木は思わず笑いそうになってしまった。お調子者の木下が妙に緊張しているのがやけにおかしかった。

「どうぞ」

署長の低い声が部屋の中から聞こえた。

「失礼します」

今度は青木が扉を開き、先に署長室へと入って行った。

後から入った木下が静かに扉を閉めた。

「急に呼びだしてすまなかったね」

署長室に入つてすぐ正面に梅田署長は座っていた。

ふと応接用のソファ―に男が一人座っているのに気付いた。署の人間ではなさそうだ。白髪混じりでスーツを着たその男は青木達には目もくれずどかっとソファ―に腰掛けてタバコを吸っている。

「どういったご用件でしょうか」

白髪の男のその態度がきになりつつもそれを抑えながら青木は尋ねた。

「二人とも忙しいだろうから単刀直入に言おう。ここ最近江津湖周辺で変質者が出没しているのをしっているかね」

江津湖とは熊本市内にある湖のことである。湧水が流れ、市民の憩いの場となっている。青木は初耳だった。

「二人にその件の捜査を頼みたい」

「え？」

青木と木下が同時に聞き返した。まさか署長自らそんなことを言うてくるとは思わなかったからだ。白髪の男がタバコの火をもみ消した。

その態度が不快だったが気にも留めないそぶりだ

「捜査一課が出張る様な事件なのでしょうが、それは」

青木は梅田に聞く。白髪の男が鼻で笑った様な気がしたがそちらには目もくれない。

梅田はテーブルの上に赤いファイルを静かに置いた。

「うむ。詳しくは捜査資料を読んでもらいたい。変質者出没自体は珍しい話でもないかもしれんが……」

一瞬の間があった。次の言葉を言い淀んでいるようだ。

「……大事になる前に君たちに捜査してもらいたいんだよ」

まるでその変質者とやらが重大事件を引き起こすかのような言い方だった。

ふたりは了解しました、と一礼した。梅田は続ける。

「それとこの件は公にしたくないのだ。マスコミにも知られたくない」

カチリとライター音がする。男がタバコに火を点けた。青木は意地でもその男を見たくなかった。マスコミは駄目でもこの男なら構わないのか。

「そこで……容疑者とおぼしき人物が浮かんできたらすぐに報告してほしい。いいかね、決して君たちだけで踏み込みすぎないよう頼む」

梅田の顔が一瞬険しくなった。普段あまり感情を表に出さない男なのだ。青木が注意を受けた時も穏やか過ぎてこっちが拍子抜けしたほどだった。

（なにかあるな）

青木はそう感じたが何も聞き返さず、わかりました、とだけ答えた。木下は棒の様に突っ立っているだけだ。

よろしく頼むと梅田が言うとファイルを手に取り、二人は署長室を後にした。結局、白髪の男が何者かは語られなかった。

「どうします？」

ずっと黙ったままだった木下が口を開いた。

「上からの命令だ。従うしかねえだろ」

青木は事件の捜査よりもあの白髪の男の方が気になっていた。熊本県警本部や本庁の人間なら紹介のひとつくらいあってもおかしくない。この事件の関係者ならなおさらだ。少なくとも署長室で偉そうにタバコを吸えるくらい的人物だ、ということか…。

「とりあえず現場に行ってみるか。今何時だ」

やがて昼飯ですよと木下が腹をさすりながら言う。

捜査一課に戻ると内川と目が合った。内川はコクリと頷いた。署長からあらかじめこの件について聞いていたのか。

「外で食うぞ」

そう言うつと青木は木下を連れ、江津湖へと向かった。二人の出で行った扉を内川はしばらく見つめていた。

教室にて

「啓介、おい啓介」

馬原啓介は飛び起きた。3限目の古文の授業中、机に突っ伏して眠っていたらしい。いつの間にか休み時間になっていた。

「山じいのやつ、ずっとお前にらんでたぜ」

クラスメイトの岩崎が笑いながら言う。山じいとは古文の老教師の山中の事だ。生徒から陰でそう呼ばれている。

「油断したなあ。まだ頭が夏休みだな」

啓介も笑った。

馬原啓介は今年の春、熊本県立坪井高校に入学した、どこにでもいるごく普通の高校生である。決して不良でもクラスを中心になるわけでもない、どちらかといえば大人しい部類に入るのかもしれない。かといっていじめの対象となるわけでもない、いたって目立たない存在なのだ。

啓介自身、クラスの人気者になったり、いわゆる不良と呼ばれる連中とつるんだりも当然ない。ただただ、これからの人生も静かに平穩に暮らしていきたいと本能的にそう動いているのだ。

「最近ボーっとしてるな。ゲームのしすぎだろ」

岩崎が言う。眼鏡をかけていかにも真面目そうな岩崎は啓介にとって、入学してはじめてできた友達だった。傍からみれば岩崎は俗に言う、オタクである。

そんなことは啓介にとってどうでもよかった。友は友である。逆にゲームやアニメの知識が豊富な岩崎を尊敬すらしていた。

「かもなあ……」

啓介は気のない素振りで答えた。実際そんなことはなかったのだ。夏休みが明け、一週間が過ぎたが何も身に入らないのが本当のところなのだ。

「おふたりさん」

啓介の後ろから声がした。

「お、もっちゃん。その顔は何か仕入れてきたな」

岩崎が親しげに答えた。

隣のクラス、一年A組の坂本がニヤニヤしながらやってきた。小柄でいつもニヤけた顔をしている。岩崎とは中学校が同じで、岩崎は彼の事をもっちゃんと呼ぶ。啓介が岩崎と親しくなると、クラスこそ違うが自然とこの坂本とも仲良くなっていた。

「今日はどんなゴシップだい、坂本君」

啓介は坂本君と呼ぶ。

この坂本は、何より校内の噂話が好きなのだ。どこから拾ってくるのか、3年のあの女生徒は尻が軽いだの、あの先生はカツラだとか、あのヤンキーは実は中学時代はいじめられっ子だったとか本当かどうか怪しい話ばかり持つてくるのだ。実際岩崎によると中学時代にこの噂好きが災いして、恐い先輩連中に囲まれてしまった事もあるらしい。それでも懲りないのがこの男の性格なのだろう。

「へへ、今日は二つも入ったぜ」

得意げに坂本が答えた。啓介は坂本の事を嫌いではないが彼のゴシップネタはいつも話半分に聞いていた。その手の話があまり好きではないのだ。

平穩に暮らしたい啓介にとって曖昧な情報を口にする事でいらないトラブルに巻き込まれたりするのはまっぴらなのだ。

だから坂本から入ってきた噂話を他の友人に話す事もまずなかった。

「C組に転校生きただろ。やばいよ、アイツ」

坂本がニヤつく。

確かに来た。二学期のはじめに。クラスの子はイケメン転校生が来たと騒いでいるのは記憶に新しい。高校で転校生も珍しいと思っただが、啓介のその時の感想はそれだけだった。

岩崎が呆れた顔で言った。

「二、三年の女子でも話題らしいな、イケメン転校生。何だよ、ヤ

ンキーにシメられでもしたか」

「おいしいね。まだシメられてないよ。今日明日がヤマだね」

何がヤマなんだ、啓介はそう思ったが口には出さなかった。

女子に人気な転校生が気に食わない、だから不良連中が適当に因縁つけて呼び出す。バカバカしい。啓介は大きく伸びをした。どうでもいいのだ。

「転校生、何て言ったかな。珍しい名前だったな。確か……瓜生つりぎゅうだったかな。アイツもアイツで変なんだよ」

坂本のニヤけた顔が急に曇った。あまりの顔芸に啓介は吹き出しそうになった。

「休み時間とか昼休み、放課後まで校舎中をうろついてるらしいんだ。なにか物色してるみたいにさ。二、三年のクラスまでだぜ。おかしいだろ？」

ふうん、と啓介は生返事をする。

なるほど、それで上級生が躍起になっているのかと啓介は納得した。自分たちのテリトリーに、ついこの間転校してきた下級生がまるで女子を物色するかの如くうろついてるのが気に食わないのだろう。しかもそれが顔がかっこいいときてる。

くだらない。たった一、二年早く産まれた人間がえらそうに威張り散らすのが学校という場所なのだ、と啓介は思っている。不良と呼ばれる人種は自分がいかに強いのか、悪い人間かというのを鼓舞したがるのだ。

そういう人種を啓介は見下していた。もちろんそんな連中に刃向かう腕力も度胸もないので内心では、だ。

「それはご愁傷さまだな。転入早々目をつけられたわけか。

入学すぐに一年も何人かやられてたな。大人しくしてた方が身のためだよ。で、もうひとつは？」

岩崎が言う。

三人の中では岩崎が一番喧嘩に縁遠いタイプなのだ。

「こっちはすごいぜ。誰にも言うなよ」

坂本の決まり文句だ。誰にも言うなよという人間に限って自らいろんな所で言いふらしているものだ。

「うちのクラス、A組の大久保沙耶って知ってるか」

啓介はドキツとした。岩崎は知らんよと言ったが啓介は違った。知ってるのである。知ってるも何も彼女は――。

その時、始業のベルが鳴った。続きは昼休みにと三人は解散した。その後の授業に啓介は今まで以上に身が入らなかった。色々な事が頭をよぎっている。

（自分しか知らないと思っていた事がもう広まっているのか。俺が見たあの光景はやはりそういう事なのか）

啓介は知っているのだ、その噂を。いや噂を知っているというより見てしまったのだ。

できれば坂本の口からその話を聞く前に逃げ出したかったが、昼休みに入っただけでその噂好きな男は鼻歌交じりで弁当片手にやってきたのだ。

三人が教室の隅で昼食をとっていると必然的に話題は例の噂の話になっていった。

「それで、その大久保だっけ。そいつがどうしたんだよ」

岩崎は興味津々だ。

坂本は箸を置き、声のトーンを少し落としてニヤついた顔をいっそう崩した。

その顔を啓介は初めて憎たらしく感じた。

「そうそう、その大久保。どうも生物の竹本と付き合ってるって話よ。禁断の恋ってやつよ」

「まじかよ」

興奮した岩崎の口から米粒が飛んだ。

この年代の男子にとってこの手の話はたまらなくおいしいのだ。それが嘘でも事実でもどうでもよく、その噂自体が楽しいものなのだろう。

（やっぱり。ばれてしまってる）

啓介は予感が当たったことに絶望した。

「しつ。誰にも言うなよ。学校にバレでもしたらえらい騒ぎだぜ」
そんなこと言ってもこのおしゃべりな男が知ってしまったのだ。
広まるのも時間の問題だろう。

その後も坂本と岩崎は教師とその生徒の禁断の恋についてああでもない、こうでもないと妄想話を繰り返した。女の体に触った事もないであろう二人のその幼稚な話を啓介は投げやりな相槌を打ちながら聞いていた。

放課後

その日の放課後、馬原啓介は教室にいた。

教室にはまだ数人の生徒が残っている。それぞれが椅子や机に腰掛け、楽しそうに談笑している。どこにでもある放課後の風景である。

そんな中、ひとり啓介は教室の窓辺にもたれかかりぼーっとグラウンドを眺めていた。

サッカー部や陸上部など部活動の生徒が声を出し、体を動かしたりしてグラウンドには活気が溢れている。

特に何かを見るわけでもなく、啓介はその場所で一人の女子生徒の事を考えていた。

昼休みに山崎と坂本が話していた噂の大久保沙耶の事である。その時は彼女の事を知らないふりをした。なぜなら知っていると言口にするれば、あのおしゃべりの坂本が根掘り葉掘り彼女の事を聞いてくるに決まっている、啓介はそう考えて知らん顔を決め込んでいたのだ。

実のところ啓介と沙耶は小学校、中学校と一緒だった。

啓介のクラスに沙耶が転入してきたのは小学三年の時だった。

家が近所だったこともあり二人はよく遊んだ。

当たり前のように登下校を共にし、お互いの家に遊びに行ったりもした。

そんな事もあり啓介の方は少なからず好意を持っていた。どちらかといえば啓介と一緒に沙耶もクラスでは目立たない地味なタイプである。

啓介はそんな彼女の見せる笑顔が好きだった。

といっても恋愛だとかそういうものではなく、まだ小学生の幼い、幼稚な感情でしかなかった。

だがその仲の良かった二人も年を重ねるにつれ、少しずつ距離が離れていく。

思春期に入り男女というものを意識し出し、心も体も大人になつてくるとそれも仕方のない事なのかもしれない。

中学に入ると特に啓介は、沙耶を意識するあまり挨拶すら交わさなくなっていた。もともと積極的な性格でない啓介は好意を寄せる女性に対して、必要以上に奥手になってしまうのだろう。

時折彼女の方から声をかけてくれたりしていたが、啓介はついそっけない態度とってしまふ。そうなるとう当然彼女の方もなかなか声をかけにくくなる。

そうして偶然同じ高校へ入学したのだが、二人は会話を交わす機会は全くといっていいほど無くなっていた。

「帰るか……」

一人で呆けてるのがバカバカしくなったのか、啓介は我に返った様に体を起こした。

気付けば教室に残っているのは啓介一人だけだった。

慌てて自分の机からカバンを取り、教室を出る。

ふと喉の渇きに気付いて廊下の片隅に設置してある、長方形の冷水器へと足を向けた。暑さのせいかな最近喉の渇きが激しい。

その冷水器の手前まで来ると啓介は固まった。渴いたはずの喉がごくつと小さく鳴る。

その視線の先には啓介の長い長い片思いの相手、大久保沙耶がいた。

すぐ隣のクラスだからそこにいても少しも不思議ではない。だがついさっきまで思いを巡らせていた相手がすぐそこに現れた事で、啓介は妙に照れくさくなってしまった。

そんな啓介にも気付かず、沙耶は肩まで伸びた黒い髪を指先で抑えながら水を口にしていた。

3口、4口とその横顔を少し離れた場所で啓介は見つめていた。

(このまま通り過ぎるか……どうする)

考える間もなく、

「啓ちゃん」

いつの間にか沙耶の微笑んだ柔らかな視線は啓介の方を向いていた。

放課後 / 2

不意を突かれた啓介は固まってしまった。

彼女から呼ばれたのはいつ以来だろう。小学校の時から沙耶は啓介の事を啓ちゃんと呼んでいる。

「まだ残ってたんだ。今から帰り？」

「ん……ああ」

啓介はそう答えたが次の言葉が出ない。

沙耶はこつちを見ている。

淡い水色の制服がよく似合う。この高校の夏服は男女ともブラウスが水色なのだ。

なんで沙耶と面と向かうところまで緊張するのだろう、啓介は思う。話したい事もたくさんあるのに。

あの噂、教師との恋愛――。

啓介は坂本からあの噂を聞く以前から、沙耶と生物教師の竹本の関係を怪しく思っていた。

夏休みも残り一週間の時に、たまたま二人が肩を並べて歩いているところを家の近所で見てしまったのだ。

あの光景、竹本の隣で、啓介の好きなあの笑顔を見させている沙耶――。

それが啓介の脳裏から離れないでいた。

噂が事実なのか確かめたい。本人の口から。

「水、いいよ」

「え、ああ……」

はっと啓介は我に返った。

沙耶は冷水器から少し離れた。

「じゃ……」

「さ、沙耶」

背中を見せた沙耶がまた振り返る。

「久しぶりに……その、帰ろうか。一緒に……」

啓介は思い切って言葉を絞り出した。少し冗談めかしく言っただけではあった。

沙耶は視線を啓介から離さない。

久しぶりに正面からまともに見る沙耶は少し大人びたように思えた。

啓介はたまらず窓の外に目をやった。

校門が見える。そこにあの話題の転校生が歩いている姿が目に入った。

そのすぐ後ろには三、四人の不良グループ。

彼らに促されるように校外へ出ていく。

「ごめん啓ちゃん。今日は行くところがあるんだ」

転校生に気を取られていた啓介は沙耶を見た。

「ああ、それなら別にいいんだ」

「珍しいね、一緒に帰ろうなんて。中一の時以来かな。また誘ってよ。今度一緒に帰る」

「お、おう。また今度な」

それじゃ、と沙耶は手を振り廊下から姿を消した。

一人残された啓介はまた今度と言われたうれしさと、積極的だった自分が恥ずかしくなり階段を駆け降りた。

校内の自転車置き場まで来た啓介はふとさっきの転校生を思い出した。

「あの転校生……どうなっただろう」

校門を出る転校生の後ろにいたのは確か一・二年の不良連中だったはずだ。

啓介は自転車をゆっくり漕ぎ出した。

「でもあの転校生、全然普通にしてたなあ」

校舎の三階から表情はちらつとしか見えなかったが転校生は涼しい顔をしている様にも見えた。

あれがもし自分だったら震えてただろうな、などと啓介は余計な事を考えた。なぜかあの転校生の事が気になっていた。

「大体あいつらは集団で来るから卑怯なんだよ。黙って周りで見てても目つきで威嚇してくるし。やり返そうもんならすぐ袋叩きだし。ほんと卑怯だ」

別に啓介は今まで不良に囲まれた事も無ければ、喧嘩して人を殴った事もない。ただワルぶってる奴らはイメージでそうなんだと思っていた。

「転校生……確か瓜生だったかな」

転校早々気の毒に、などと一人ぶつぶつ言いながら家路を急いだ。帰り道の途中、沙耶とのやり取りを思い出した。

久しぶりに会話を交わしたというのに転校生の事を気にかけている自分がやけにおかしかった。

「行くところ……かあ。竹本のどこがいいんだよ」

今頃竹本といえるのだろう、啓介は勘ぐった。

竹本に対して嫉妬と、生徒に手を出すという行為に対する怒りが入り混じった何とも言えない感情だった。

啓介のペダルを漕ぐ速度が緩んだ。

沙耶の事を考え出したら気分が落ちてきたのだ。

「いつものところに行くか……」

家へと向かっていた自転車はその行き先を変えた。

通学路の途中に江津湖がある。啓介の家から自転車なら五分ほどの距離だ。

啓介は昔から江津湖に行つてぼーっとするのが好きで、ただ座って湖を眺める、それが彼なりのストレス発散法だった。

いつも行く江津湖の端、そこは人気も余り無く、繁った木々が日除けとなってくれる絶好の場所なのだ。

路面電車の走る大通りから一本脇に入る。しばらく行くと左側に湖の入り口があった。入り口といっても自転車や徒歩でしか入れない小道だ。

江津湖は大きく上江津湖と下江津湖に分けられる。そこは上江津湖の入り口と言える場所だ。

啓介はその入り口で自転車を止めた。
やがて六時となるうとしていた。が、まだまだ陽は高い。
湖の中央に向かって続くその小道の先に誰かいるのが見えた。

「先客がいるなあ」

いつも啓介が陣取っている場所に男が3人見える。

一人は背はあまり高くないがガツチリとした体格、もう一人はひよろつとした男。どちらも半袖の白いワイシャツ姿である。

そしてもう一人、こちらは誰がどう見ても——制服の警官だ。

「何してんだろ。こんな所で」

よく見るとそのガツチリした背の低い男はヤクザの様に啓介の目に写った。

「何かトラぶってるな」

興味本位でしばらく見ているとヤクザ風の男と目があつた。しかもこつちを指さしている。

それにならってひよろつと男と警官がこつちを見る。

思わず啓介は辺りを見回した。

誰もいない。いるのは自分だけだ。

三人はまだこつちを見て何か話している。

ひよろつとした男がこつちに向かって歩き出した。

啓介は慌てた。

ガキがこつち見てやがるとかなんとか警官に因縁でもつけたのか。ひよろつとした男がこつちに向かって何か言っているが啓介の耳には入らない。

トラブルに巻き込まれたらたまらないと、啓介は自転車を反転させ急いでペダルを漕いだ。

あの男はこつちに何を言っていたのだろう。追っては来ていない様だ。

少し気にはなったが構わず啓介は家に向かって急いで自転車を走

らせた。

別にやましい事などないのに慌てている自分がおかしかった。

普段はまわりに無関心な啓介が沙耶、転校生、そして湖の三人とやけに気になる事だらけの一日だった。

赤いファイル

「どうするんです？」

ハンドルを握った木下が情けない声で言った。

「署長命令なんだ。行くしかねエだろうよ」

助手席の青木は不機嫌そのものだった。

熊本東警察署を出た青木と木下は近くのうどん屋で昼食をとった後、車を江津湖へと走らせていた。

青木は署長から受け取った赤いファイルを見ている。

「行くつて言つても……何するんです？」

木下は不服そうだ。

それはその赤いファイルのせいだった。

署長室で話を聞いた時は事件の捜査を頼まれたものと二人は思っていた。だがファイルに束ねられた数枚の書類を読んでいくと想像したものとは違っていたのだ。

八月の間に江津湖では四件、同一人物のものとされる案件が報告されている。

それぞれが大なり小なり傷害事件と言つていい案件である。

問題はその被害者と思われる４人の身元が消されている事だ。

氏名、住所、連絡先の欄が黒く塗りつぶされていたのだ。

これでは被害者に直接会つてその時の様子を聞く事もできない。

それぞれ目撃情報などは記されているが、書類に記載されている情報と、被害にあつた人物に直接話を聞くのでは得られるものが違つてくるかもしれない。

ましてや署長直々に捜査を命じられたのだから確實、且つ迅速に犯人までたどり着きたい、青木はそう考える。

ここまで情報を制限する理由も分らないし、どう捜査して行くか木下が不服に感じるのも頷けた。

出没する時間も場所もバラバラだし、青木も木下も本当に同一犯なのかとまで疑っている。

「まさか毎日朝から晩まで江津湖に寝泊まりじゃないでしょうね」
「それもいいかもな。お前と二十四時間ずっと一緒ってのはご免だな」

青木は笑った。

被害者の身元を隠す、その意味を青木は考えている。

署長の梅田はマスコミに知られたくないと言っていた。マスコミ対策なのか。

だが極秘に捜査を依頼しながらその捜査官にまで隠す必要はないはずだ。大事になる前に犯人を捕まえないならなおさらだ。

ならば捜査官にも接触して欲しくない理由でもあるのか……。
（俺たちにも知られたくない理由……。いや、あるいは被害者側にも知られたくない何かがあるのか……）

ふと署長室にいたあのタバコの男の顔が浮かんだ。

（あいつが何か関係あるのか）

よくよく考えてみると極秘の捜査の話をするのになぜか署長室に見ず知らずの男がいたのだ。今回の件には何か裏がある、そう邪推しても不思議ではない。

そうなると捜査一課長の内川も気になる。

署長から課長の方にも青木と木下に捜査をさせる事は断りがいつているはずだ。

一課を出る青木を見る内川の目。どこか強く押し殺した様なあの表情。あれは何かを知っているのではないだろうか。

青木はうつむと唸った。

助手席の背もたれに寄りかかって外を見る。

強い日差しが街を照りつけている。

何か、何かが起ころうとしているのか。それとももう起こっているのか。それにもう片足を突っ込んでいるのか。

青木は窓の外に流れる街を見てため息をついた。

木下はそんな事は気にも留めずハンドルをきる。車は大きく左折した。

すると青々と茂った木々と太陽の光をきらきらと反射する水面が見えてきた。

「とりあえずボート小屋の方でいいですか」

「そうだな。一件目はあの辺りだ」

車はゆっくりと駐車場へと入っていった。

赤いファイル / 2

かの戦国武将加藤清正が形成したと言われるこの江津湖は熊本市中心部、市街地に囲まれていながら緑豊かな自然を残している。

その湧き出る美しい水は“水の都熊本”の象徴とも言える。

青木達の車はいくつかある駐車場の一つ、ボート小屋のある駐車場へと入っていった。

車から降りるとまだまだ暑い日差しが青木の目を照りつけた。

熊本特有の蒸し暑さである。

「とりあえず一件目から行ってみるか」

そう言うとき青木は例の赤いファイルを手提げ鞆に入れ歩き出した。湖の周りにはぐるりと遊歩道が整備されていて、ボート小屋を通り過ぎると小さな橋がかかっている。

湖の真ん中に中の島と言われる小島があつてこの島に架けられた橋を渡る事によってこちら側から対岸へ、対岸からこちらへと行き来できるようになっている。

この中の島を中心とすると北にボート小屋、南には芝の広場が広がっていて別の駐車場がある。西に行くとこちらは上流で湖の幅は狭くなつていき、路面電車の走る道路へ出る。逆に東に行くと湖は広くなり下流の加勢川へとその水は注がれていく。

中の島は公園になつていて今日も子供たちが暑い中遊びまわっていた。

「昔は僕もここで水遊びしたもんですよ。江津湖でやってた花火大会にも毎年来てたなあ」

木下が子供達を見ながら懐かしそうに言った。

「お前と花火なんか見たがる物好きな女がいたのか。気の毒になあ」

「僕だって結構モテルんですよ。そりゃあ今はいませんけど……」

そのうちとびっきりの――」

「ここだ」

木下がしゃべるのを遮って、中の島の脇にある木でできたベンチを青木が指す。

一件目の現場である。

八月二日午後五時頃四十代の女性は犬の散歩で湖にやってきた。ほぼ毎日散歩にやって来てこのベンチに腰掛け、少しの間休憩するのが日課らしい。

その日もここに座って水面を行く鴨を眺めていると後ろから声を掛けられた。

女性は振り向くと一人こちらに向かって立っている。黒いパーカのフードをかぶり白いマスク、男か女か判別は出来なかったらしい。ただ真夏の夕方にはあまりふさわしくない格好だと感じたようだ。

女性は突然腕を掴まれチクリと小さな痛みを感じた。

掴んだ相手の親指には付け爪の様なものがあり、それが女性の手首に浅く刺さっている。

悲鳴を上げる間もなく、黒いパーカーは東へと走り去っていった。一体何が起こったのか分らず、女性はしばらくポカンとしていたらしい。手首から流れる一筋の赤い線を見て我に返りこの女性は交番へと駆け込んだ。

二件目は九日に二十代後半の女性が会社帰りに、三件目は二十五日に四十代女性がランニング途中に同じように黒いパーカーに襲われている。一件目同様、腕を掴まれ爪を刺されているのだ。犯行時間は午後七時と六時。場所は二件ともこの中の島から三百メートルほど離れた遊歩道上である。

「共通するのは黒いパーカーと白いマスク。そして付け爪。性的暴行が目的じゃあないみたいですよねえ」

木下が辺りを見回す。

「車の量が多いですけど道路からこっちをじっくり目を凝らさないと何をしてるか分らないでしょうね。人がいるな、程度にしか見え

ない」

「確かに。だが大胆だよ。時間的にまだ暗くなってるわけじゃないし、誰が見てるか分らんしな。格好も真夏にしては目立つ」

「でも青木さん、ランニングする人によっては厚着しますよ。ダイエットとか」

青木がなるほどなあ、と頷く。

「そうだ木下、交番行って警官連れてこい。報告書はあいつらが作ったんだ。何か聞けるかも知れん」

江津湖の東側、路面電車の通りに江津交番がある。四件ともこの警官が対応していた。

「へへ。そう来ると思ってちゃんと手配しましたよ。こっちに着いたら電話するから一人来てくれて言ってます」

「なんだ、えらく手際がいいじゃねえか」

得意げに木下が携帯を取り出し電話をかけた。

赤いファイル / 3

木下が交番へ電話すると二人は四件目の犯行現場へと向かった。そこで警官と落ち合う手筈らしい。

正直、三件目まではたいした事案じゃない様に青木は感じていた。もちろん事件に大きいも小さいもなく、どういった理由があるうが他人を傷つけた行為を許せるはずもない。

ここ最近は何特別な理由もなく、ただただ人を殺すという青木には全く理解できない事件も多い。

署長がエスカレーターする前に手を打ちたいと言った理由がこの四件目で分った。

四件目は三件目のすぐ翌日、二十六日に起きた。

塾帰りの自転車に乗った中学生が東に、路面電車の通りに向かって走っていた。

時間は午後九時過ぎ。江津湖の東側はあまり人気も無く、道も多少狭くなっている。湖自体もその大きさは小川程度のものになっている。

小さな自転車のライトを照らしながら走る中学生。その前に突然人が横切る。

当然驚いた学生はブレーキをかける。何事もなかったように通り過ぎる影。学生もほっとする。

だが突然、その影はすれ違いざま後ろからはがいじめに抑えつけてきた。

学生の体は宙に浮き、自転車から引き離された。声を出そうにも出せない。口にはタオルが押し付けられてる。

腕にチクリという痛みを感じたかと思うとその影はその痛みを感じた場所に噛みついてきた。

学生は無我夢中で暴れた。

それもそうだろう、暗闇で突然襲われたのだ。

必死にその影を振り払い走りだした所にガシャンという自転車が倒れる音を聞いた警官がやってきた。

続く不審者出没事件の事もあり、巡回を強化していたようだ。

警官が学生に駆け寄るとその影はすでにそこには無かった。

青木がこの連続通り魔とも言える事件が分らなくなったのはこの四件目の被害者が男の子だったという事だ。

三件目までは被害者はみな女性で、いわばなんらかの性的欲求を満たすための犯罪と言えなくもない。確かに年齢は五十代から三十代と幅広いが趣味嗜好はいろいろあるだろう。

だがここにきて男を襲っている事でその目的も、果たして本当に同一人物なのかも疑問符が付いてくる。

しかも今回は傷を負わせるだけでなく噛みつきまでしている。前の三件とは様子が違っているのだ。

青木と木下は鉄筋コンクリートで出来た公衆トイレの前で立ち止まった。

「このあたりですね」

木下があごにつたってきた汗を拭いながら言った。

「この陰に隠れて獲物を狙ってたわけか」

青木はトイレの入り口を覗き込む。

「でもなんで男だったんでしょうね。中学生でも力はそれなりにあるでしょうに。リスクが有りすぎる気がするなあ」

「こんな事する奴の気持なんか分らんさ。たまたま通りがかったのが男だったのかもしれない」

わかりませんねえ、と木下が足元の小石を蹴った。

「失礼します」

二人が振り向くと若い警官が立っていた。

大野と名乗ったその巡査が四件目の中学生が襲われている所に駆け付けたいらしい。

「どうも、忙しいのにごめんね。捜査一課の木下とこちらが青木です。いきなりだけど二十六日の夜、君が駆け付けた時にはもう誰もいなかったんだよね」

木下が尋ねた。

「はい。私が来た時には誰も。男の子が座り込んでました。幸い噛まれた傷も深くはなかったです。それで無線で連絡してすぐ辺りを搜索したんですが怪しいものは特には」

ちらりと若い警官は青木を見た。かなり緊張している様子である。無理もない。木下の横で青木が腕を組んでむすつとにらんでいるのだ。

「どこの中学かわかるかな。名前とか交番に記録残ってるかな。僕ら署に書類忘れちゃって。暑さでうっかりしちゃってね」

木下は制限されている情報を直接現場から探ろうとしていた。

「それが……」

大野巡査は口ごもった。

「口止めされたか」

青木が低い声で聞く。

巡査は答えない。

「答えるよ。口外すれば一生巡査止まりだとも言われたか、おい」
「止ましようよ青木さん」

詰め寄る青木を木下が抑える。

「情報を漏らすなと言われてるんだね。声に出さなくていいから首を振って答えて欲しい。いいかい？」

巡査は頷く。

木下は辺りを見回した。青木もつられて視線をやる。

青木は納得した。我々に捜査を命令した以上、交番勤務の警官に接触するのは当然である。

直接現場に行った連中に情報規制をしているくらいだから彼らも監視されているのかも知れない。

実際そうだとするとそこまでする理由はなんだ。

青木は腹が立ってきた。

「二つだけ答えてくれ。情報を漏らすなという指示があったのか」
大野巡査は小さく頷く。

「それは……警察庁から……だね。熊本県警じゃなく」

若い巡査は一瞬目を大きく開いた、ように青木には写った。そしてゆっくり、目の前の人間にしか分らないほど小さく小さくあごを下に動かした。

赤いファイル / 4

青木はイライラしていた。

犯人を早く捕まえると言っておきながら、正確には犯人を特定するのだが、降りてくる情報は全て中途半端なのだ。

しかも交番勤務の警官にまでかん口令を引いている。

一体何をしたいのか見当もつかない。

木下の問いにも驚いた。

警察庁？

なぜここにきて警察庁が出てくるのだ。こんな九州の片田舎で起きた小さな不審者出没事件で、である。

青木はふと思った。

木下はなぜ警察庁から指示がきたと考えた？

警官が言葉を濁したからといってすぐ警察庁と結びつけた？

木下は警官に当時の状況を詳しく聞いている。

もちろんその辺の話は報告書にもあることだからかん口令はひかれていない部分だ。

「その中学生の話だと犯人は付け爪をしていたそうだね」

「はい。痛みが走った左手を見たらすごく鋭い尖った爪が刺さっていたそうです。傷口も見ましたがそこまで深くはありませんでした。ですが多少の血は出ていました」

大野巡査はさっきとは違って饒舌に話し始めた。口止めされた事への追及が止んでほっとしたのだろう。

青木はまだ腕を組んでその様子を睨んでいる。

「服装とかは分らなかったわけだね。相手は男だったという確信はあったのかな彼は」

木下は続ける。聞き込みは青木よりも物腰の柔らかい木下の方が向いている。見た目がイカツイ青木はどうしても一般市民は警戒してしまうのだ。青木の方も別に威嚇するつもりも無いのだが。

「はつきりと確信は持てない様でしたがおそらくは。物凄い力だった。その子も中学三年生で小柄な方でもありませんでしたからね。それを抱えあげたんですから」

「女でも力が強い奴がいるだろうがよ。曖昧な報告書書くんじゃないよ」

青木が強い口調で横から入ってきた。若い警官は固まってしまった。

木下は構わず続ける。

「前の三件も犯人は男と確信が持てるわけではないんだね。フードを深めにかぶっていたわけだから」

「そうですね。ただ三件目の女性は襲われた時犯人の足を踏みつけたらしいんです。その時一瞬、唸ったそうなんです。その声が男っぽかったと……」

それだけなんだよねえ、と木下が息を吐く。

「ありがとう。また何かあったら話を聞きにいくから。とりあえずこの辺の巡回はしっかりお願いします」

そう木下に言われて大野巡査は一礼して交番へと戻ろうとした。

「そういえば……」

数歩歩いた所で大野巡査は振り返った。

湖面を眺めていた青木が視線をやる。

「事件と関係あるのかわかりませんが……」

「どんな情報でも構わないよ」

木下が一度仕舞った手帳を取り出した。

「今月の三日だったかな。夕方小学生が泣きながら交番に来たんですよ。どうしたのって聞いても泣いていて埒があかなかったんです。よく見たら膝から血を流していて……。ふと外に目をやったら雨の中に高校生が立ってたんです。ちょうど夕立がきていて。僕が外に出て話を聞こうとしたら走って行ってしまつて」

「それでその子供は？」

「まあとりあえず傷を処置してなんとか家を聞き出して親御さんに

迎えに来てもらいました。あのお兄ちゃん知ってるのって聞いた知らない、と」

「ふうむ。関係……あるのかなあ」

木下がチラリと青木を見た。

青木は我関せずで今度は木を眺めている。

「まあ一応聞いとくよ。高校生ってすぐ分ったって事は制服だったんだね。どこの高校か分る？」

「男の制服なんてどこも似たようなもんですから」

うーんと首をひねっていた大野巡査がはつとした。

「あの子。ちょうどあそこにいる子と同じ制服ですよ」

大野巡査が指さす方を青木と木下が目をやった。

確かに江津湖の入り口の方に自転車に乗った高校生がいる。

薄い水色のシャツを着ている。

「あのシャツの色は確か……坪井高校だったかな。ちょっと聞いてみますか」

木下がおおい、と手を振りながら歩み寄って行った。

青木は内心、たいして関係性も薄いどうでもいい情報じゃねえかと思いつながらその光景を見ていた。

「おおい君い、ちよつといいかな……。その制服って——」

青木がそこまで言いかけると、水色シャツの高校生は知らん顔で自転車を走らせ行ってしまった。

間の抜けた沈黙が三人に起こった。

木下はまだ今まで高校生がいた場所を見ている。それを見て青木が吹き出しそうになった。

「最近の高校生は難しいですねえ」

木下が振り返りながら照れくさそうに言った。

赤いファイル / 5

大野巡査を帰した後、青木と木下の二人は江津湖をぶらついていった。

「一応何か新しい情報入ったら連絡くれって言ってみましたけれどでよかったですかねえ」

パキッと缶コーヒーを開けながら木下が言った。

「いいんじゃないか。これ以上は出ねえだろ、あいつ叩いても」

青木は不機嫌である。

「あの口止めの件、気になってるんでしょ青木さん」

「上は俺らにどうして欲しいんだ？ そこだよ、おれが考えてんのは」

青木がぐいつとコーヒーを口に含む。

「そういえばもう一つ気になるな」

「なんですか、もう一つって」

青木の鋭い目が木下を激しく睨みつけた。

「てめえのことだよ木下。なんであいつを口止めしたのが警察庁だと思っただ？ あそこですぐそれを思いつくっておかしくねえか。何か知ってんのか」

「ああ。あ、あれですか。知ってるっていか何というか……」

今度は木下が口ごもっている。青木は今にも殴りかかってきそうな雰囲気である。

「分りました。今から話すのはあくまでも噂ですよ、青木さん。口裂け女とかトイレの花子さんとか都市伝説レベルの話です」

「おい、分ってんだろ？ おれはその手の……」

青木の表情がいつそう険しくなった。

「分ってますよ。そっち方面じゃあないです。僕もあんな目にあうのは二度と御免ですからね」

慌てて木下が二、三步後ずさりした。

青木はその厳つい風貌に似合わず、怪談などホラー系の話が大きな苦手なのだ。

映画はもちろん人からその手の話を聞くのも極端に嫌う。

以前木下が青木の相棒になってすぐの頃、車の中で容疑者を張り込んでいた事があった。

夜の車の中で眠気に襲われた木下はそれを覚まそうと急に怖い話を始めた。

と、突然青木は何も言わず木下に殴りかかった。頭、腹とされるがままに殴られたのだ。そして何が起こったのか理解できないまま木下は車から放り出された。

後日、同僚の刑事に聞くと青木に怖い話は絶対にしてはいけないという暗黙のルールがあるのだという。痛い目を見たのは木下だけではなかった。

それ以来、木下はどんなに減らず口を叩いても怖い話だけはしていない。それがどんな些細な恐怖話でも、だ。

「もう殴らねえから心配するな。で、何だその噂ってのは」

「僕が警察学校時代の話ですよ。同期の何人かで飯食ってる時に聞いたんです。何らかの理由がある場合警察庁、つまり国家公安委員会から事件隠蔽のお達しが警察上層部に来る事があるらしいって」

国家公安委員会とは警察を管理する、いわゆるお目付け役である。

「なんだそりゃ。なんで公安がそんな事言ってくるんだよ。」

それに何らかの理由って何だよ」

「僕に分るわけ無いですよ。言っただしよ、噂だつて。で、そこから現場に口止めが来て事件そのものが無かった事にされるらしい。」

もちろんマスコミなんかにや絶対漏らさない」

木下がしーっと口元に人差し指を立てた。

確かに事件が四つも同じ湖沿いで起きたのだから、多少噂がたつてもおかしくはない。

新聞にタレこむ奴がいて記事になってもいいはずだ。

だが今日江津湖に来てみても何も変わらない、平和そのものの光

景がそこにはあった。

不審者注意の看板ひとつ見当たらない。

そこまで完璧に情報規制をする事ができるのだろうか。

「警察学校でくだらねえ話してやがる」

「でも今回の件、その噂と似てると思いませんか。実際あの警官は警察庁から口止めされてる。まあこの噂を聞いた時は身内がよつぽどの事件起こした時にそれを隠蔽するためじゃねえのって笑ってましたけどね」

身内、つまり警察内部の人間が事件を起こした時にそういった指示がくるという事だろう。

青木は理解できない。警察だろうが何だろうが事件を起こせば法に裁かれるのが道理だろう。

普段は荒っぽい性質だが正義感は強い男なのだ。

それほどの事件だというのかこの案件は。

「益々わからねえな」

「同感です」

それから二人はしばらく湖の周りの聞き込みをした後、帰路にいった。もちろんこれといった情報も得られぬまま。

青木の脳裏には公安による口止めと、なぜかあの走り去った高校生がずっと残っていた。

転校生

喉が渴く。

どうも夏休みが明けてから喉の渴きがえらく気になってしょうがない。

馬原啓介は朝、登校するなり廊下の冷水器に向かった。

「ペットボトルでも買ってくればよかったかな」

そんな事を考えていると大久保沙耶がいた。彼女も水を飲みに来ていた。

啓介の心臓が昂ぶる。

「おはよう、啓ちゃん」

昨日の放課後、久しぶりに言葉を交わした沙耶はまるで毎日しているかのように啓介に話しかけてきた。

「お、ああ……おはよう」

啓介はぎこちない。

昨日の今日でそんなに馴れ馴れしくできるならとくに啓介の方から話しかけている。それができないから何年も片思いのままなのだ。

そこで朝の予鈴が鳴った。

「じゃあね」

沙耶が手を振ってA組の教室へ戻って行った。

啓介はどうリアクションしたものの、その場に立ちつくしている。この内気な男は女子に対して免疫がなく、緊張してしまうのだ。ただでさえクラスの女子ともほとんど口をきかないのに好きな女子の前ではなおさらである。

「ああ、水を飲みに来たんだった」

冷水器のペダルを踏み、出てきた水を飲もうとした所でまた啓介は固まった。

前からあの転校生が歩いてくる。

昨日の放課後、一、二年の不良連中に連れて行かれていたあの転校生である。

その時初めて啓介はその転校生の顔をはっきりと近くで見た。前髪を垂らし、黒髪には少し赤みが混じっていて、長いまつ毛に二重の目、通った鼻筋、どこか日本人離れた顔立ちだ。

背も高く、百八十センチ近くはあるだろうか。肩幅もあり、ガツチリというよりすらりとした体格である。

なるほど女子が騒ぐはずだ、と啓介は思った。

テレビで見るアイドルなんかよりずっと爽やかで男前である。

啓介はなぜ世の中にはこんなにも不公平な事があるのだろうかと内心嘆いていた。自分とはまるで正反対な男だ。

それにしても、である。

昨日の放課後に啓介が窓から見かけた時、彼は少なくとも四人の不良に連れていかれていたはずだ。

どこに行ったかは知らないが、連れて行かれた先にも何人かいた可能性もある。

なのになんだ、あの爽やかさは。

何をされたかは知らないが、まるで何事もないようじゃないか。自分だったら恐ろしくて今日は学校に来なかったかも知れない。

彼は殴られもせず、昨日を切りぬけたのだろうか。

そんな事を考えているうちに、転校生は啓介の目の前を通り過ぎようとしていた。

その瞬間、

「やあ」

啓介は動揺した。

初対面のその転校生が自分に声を掛けてきたのだ。

まさかの挨拶に不意を突かれた啓介は思わず軽く会釈をするだけで精いっぱいだった。

そのまま転校生はC組の教室へと入って行った。

B組の担任に教室に入れと促されるまで、啓介は転校生が通って

行つた方向をぽかんと眺めていた。

それは沙耶に朝から声を掛けられた事など忘れてしまつてくらの出来事だった。

転校生 / 2

啓介はあの転校生が気になって一限目の授業中、上の空だった。昨日の放課後、どうやって彼はあの状況から脱出したのだろうか。啓介自身、ああいった不良連中に囲まれた経験はもちろんない。人を殴った経験すら記憶にないのだ。

彼、確か瓜生とか言ったか。

多勢に無勢、平謝りで許してもらったのか。はたまたまるで漫画やドラマの様にバツタバツタと不良どもを一人で片付けてしまったのか。

啓介には全く関係ない事だが、昨日彼が連れて行かれる様子を見てしまっただけに気になってしょうがないのだ。

沙耶と数年ぶりに会話したうれしさよりも転校生の事の方が気になっていて自分がおかしくもあつた。

そこで啓介はハツとして教室を見回した。

授業は淡々と続いている。

いない、のだ。

確か昨日、瓜生を連れていく数人の不良の中にこのクラスの後藤がいた。後藤は学校の不良グループのメンバーの一人だ。もちろん啓介は一緒のクラスながら口もきいたことが無い。

その後藤がいない。

シメられたはずの瓜生が普通の顔で学校に来て、シメたはずの後藤が来ていない。これはどういう事だ。

ただ単に不良だからサボったという事も考えられるが、どうだろう。

啓介は名探偵よろしくこの他愛もないミステリーに一人頭を悩ませていると、一限目の授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

休み時間になり啓介はまた廊下の冷水器に向かった。

喉の渴きのせいもあるが、また沙耶がいるかもという淡い期待もあつた。

「馬原君」

後ろから声を掛けられ振り向くとその期待は外れた。坂本がいつものニヤけ顔で立っていたのだ。

「水臭いじゃないかあ」

啓介は何の話をしているのか分らず面喰った。

「昨日の放課後見たよ。知り合いだったんだね、彼女と。というか小中と学校一緒だったんじゃないか」

「何の話だよ」

「昨日話しただろ。彼女だよ、大久保沙耶。生物の竹本と……」

「ああ、彼女ね。それがどうしたって？」

坂本の言葉を遮るように啓介は聞き返した。

「昨日は全然知らん顔してたからさ。まさか幼馴染とは思わなかったよ。放課後楽しそうに話してたし」

（どこをどう見たら昨日の様子が楽しそうに見えるんだよ）

そう思いながら冷水器の水を口に含んだ。

「彼女の出身校調べたら馬原君も一緒のがっこうだからさ、驚いたただだよ。まあ、昔から知ってる子が先生と付き合ってるんだからねえ」

（何が言いたいんだ、こいつは）

正直なところ、啓介はこの坂本が苦手だった。本当か嘘か分からない様な噂話を持って来てはそのニヤついた顔でヘラヘラしている。

同じクラスの岩崎と友達じゃ無ければお付き合いは遠慮したいところだ。

今回、沙耶の件で余計にこのニヤけ顔が気分を悪くさせる。

過去にこの軽い口が祟って上級生に囲まれたと聞いたが、その時もっと痛めつけてもらえばよかったのに、啓介はそんな事を考えていた。

「彼女が誰と付き合おうと関係ないね」

「ごめんごめん、そんなつもりで言ったんじゃないよ。ただ昨日何も教えてくれなかったからね。どんな子が聞きたかったのに。僕は同じクラスだけどそう親しくもないし」

チャイムが鳴った。

「ああ、そういえばもう一つ。昨日言ってた転校生の話もあったんだ。あとから岩ちゃんにも聞かせたいからそっちに行くよ——」
すれ違いざま、最後にぼそと囁くと坂本はA組の教室の方へと歩いて行った。

啓介はしばらく坂本の背中を見ていた。いや見ていたというよりも睨むと言った方がいいかもしれない。

啓介に聞こえるか聞こえないかの声で坂本の発した言葉が啓介の体を熱くさせた。体中の血が、血の流れが急激に早くなるのを感じていた。

（僕にははつきりと聞こえた。確かにあいつはこう言った。

“啓ちゃん”と）

坂本は聞いていたのだろう、昨日の沙耶と啓介の会話を。

という事は啓介と一緒にかえろうかと誘ったのも当然聞いたつだろう。それを知つてのあの“啓ちゃん”なのだ。

啓介はそれを聞かれた恥ずかしさと、どこかに隠れて盗み聞きしていた坂本に対する怒りが込み上げてきた。

もし啓介が腕っ節に自身があつたならさっきの場で殴りかかっていただろう。

ただこの臆病で内気な啓介はこの怒りをぐっと腹の底に抑え込むしかないのだ。

次の休み時間も、その次も坂本は現れなかった。

啓介は水を飲みに行こうかとも思ったが、坂本と顔を合わせたくなかったのじつと教室で椅子に腰掛けたまま動かなかった。

時々岩崎が話しかけに来たがほとんど頭には入ってこなかった。

（あの男の事だ、啓ちゃんなんだと岩崎と一緒に僕をから

かおうって腹だろう)

四限目に入ると、どこか別の場所で昼食を済ませようかとも考えたが、自分のいない所で自分の話をされて笑われる事を考えるとそれもまた不快だ。

こうなればあのニヤけ顔に付き合ってやるしかないのだろうと開き直るしかない。

そう考えている間に、結局三人で昼休みを過ごすことになってしまった。

転校生 / 3

「すごいぜ、アイツ」

坂本はB組の教室に入って来るなり一人興奮していた。

岩崎は中学からの付き合いなのでふうんと言ったきりだった。

一方の啓介は坂本の方を見なければ返事もしない。

「昨日話しただろ、瓜生ってC組の転校生。先輩連中に目を付けられてるって。昨日の放課後それが決行されたってさ」

弁当を食べていた啓介の箸が止まる。

「それで、シメられたって？」

「食いついてきたね、馬原君」

おかずを頬張りながら坂本がニヤリと笑う。

その表情が今日は特に啓介にとって不快に感じた。しかも今度は啓ちゃんじゃなく馬原君ときた。

「昨日は一年と二年のヤンキー五人が瓜生を呼び出したらしいんだ。まあ三年の指示だろうね。お前らでしっかりシメとけてなもんだろ。五対一さ」

啓介は思う。あのヤンキー、いわゆる不良と呼ばれる生き物は徒党を組んでやってくる。卑怯この上ない。

啓介みたいな真面目で大人しい部類の生き物はあやうて見た目で威圧してくる奴が、しかも複数でやって来るならそれだけで委縮してしまうのだ。

文句があるなら一人でやりやあい、そう思うのだ。

「学校近くの公園に連れて行かれた転校生。そこで五人のヤンキーに囲まれたわけだ」

まるで弁士だ。坂本は続ける。

「まあ五人でやるならそれはリンチになってしまふからね。

とりあえず四人は周りを囲んで、二年の出田が瓜生に因縁をつけたらしい。そこで――」

啓介はいつの間にか聞き入っていた。

出田と言えば二年の不良の中でもリーダー格である。入学してすぐに啓介のクラスの後藤もこの出田にシメられたと聞いた。喧嘩も強いのだろう。

「――五人とも返り討ちにあつたつてさ。あんなやさしい顔してあの瓜生、相当やるぜ」

「へえ、やるねえ。まあいつも学校で威張ってる連中だ。いい気味だね」

岩崎がケラケラと笑う。

「このクラスの後藤、あいつもその中の一人さ。今日学校来てないだろ。逆にやられちゃったからね」

坂本も一緒になって笑った。

ざまあないね、と岩崎が手を叩く。実は岩崎はその後藤に散々おたく、おたくと小馬鹿にされていたのだから喜ぶのは無理もない。

瓜生が普通に登校して、後藤が休んでる事を不思議に思っていた啓介はスツキリした。と同時にあの瓜生という男にひどく興味を持った。

それは強さをひけらかさないそのさまに対して、憧れにも似た感情だった。

「五人とも学校に来てないらしい。そりゃそうだよな、逆にやられたんだ。恥ずかしくて学校なんか来れたもんじゃない。だけど今日はどうなるかな」

坂本が話すのを止めて廊下を見た。啓介と岩崎もそれにつられて視線をやる。

教室の窓からちょうど廊下に行く瓜生が見えた。昨日の今日だが構わずまた校内をうろつくつもりなのだろう。

「ちよいと失礼」

そういつと坂本は弁当を食べるのもやめて教室を出て行った。

「まるで探偵かパパラッチだね」

岩崎が呆れた様子で言った。

啓介も実のところ坂本と一緒にになって瓜生の後を付けて行きたい気持だった。

昼食も終えて、岩崎と啓介が最近出たゲームの話をしているとや
つと坂本が戻ってきた。

「収穫はあったかい」

岩崎が尋ねた。

坂本はまだ途中だった弁当をかきこみながら、

「どうかしてるぜあいつ。昨日の今日なのに二、三年の校舎にふら
つと行くんだぜ。涼しい顔して教室覗いたりしてさ。そして三年の
教室の所で大山さんの登場だ。騒然となったね、廊下は。放課後、
昨日の公園に来て呼び出したよ。忙しくなるぜ今日は」

なんでお前がいそがしくなるんだよ、と岩崎が突っ込み坂本と笑
っている。

大山とは三年の不良のリーダー、いわゆる昔で言うこの学校の番
長である。

「それで？瓜生の方は」

「お、気になるかい馬原君。それが瓜生はなんと大山さんを無視し
てさっさと行っちゃったんだよ。その時の三年連中の顔といったら
……。見せてやりたかったなあ」

坂本は一人上機嫌である。

昨日返り討ちにしたとはいえ、不良連中に目を付けられているの
は明らかなのに平気で上級生の校舎をうろつく。瓜生とい男は無神
経なのか、それとも挑発するための行動なのだろうか。しかし啓介
には瓜生が好戦的なタイプにはとても見えなかった。

ならばなぜ彼は学校中をウロウロするのだろう。転校してきて新
しい学校に興味があるのか。しかし今となればそれは不良たちに目
をつけられるというリスクがあったのだ。少し大げさかもしれない
が今日もまた瓜生はそのリスクを冒してまで校内を探索している。

瓜生の目的を知りたい。ただ単に散策しているだけかもしれない。

それでもいいから知りたいのだ。

啓介の中の好奇心がそう繰り返していた。

その日の放課後、啓介は廊下の窓から外を眺めていた。ただ今日は昨日とは違ってただぼうつとしているわけではなかった。

目的はもちろん瓜生である。

啓介は男色家なわけではない。そんなわけではないがどうもあの瓜生が気になって仕方がないのだ。

どこか彼には言葉では言い表せない何かがあるような気がしてならないのである。

その瓜生が今日の放課後、三年の不良たちに呼び出されている。だから啓介はこうして窓から瓜生の姿が見えるのを待っているのだ。

今日の最後に授業が終わって二十分程経つが瓜生も、三年の不良たちの姿も現れていない。

「啓ちゃん」

驚いた啓介は振り返った。そこには大久保沙耶がいた。

突然声をかけられ、しかもそれが沙耶だったので啓介は狼狽した。「何してるの啓ちゃん。ボーっとして」

「別に……。今から帰り？」

「そうだよ。あ、そうだ。啓ちゃんの携帯の番号知らなかったよね。ついでにアドレスも一緒に教えといてよ」

思いもよらない言葉に啓介は戸惑った。小学校以来会話もしていなかった沙耶の方からこんな事を言ってくるとは。

ドキドキしながら連絡先の交換をしながらも、啓介は窓の外を気にしていた。ちらりちらりと正門の方を意識している。

「啓ちゃんまだ帰らないの？」

携帯電話を触りながら沙耶が聞く。

「ああ……。もうちょっと、な」

「そう。それじゃまた明日」

そういうと沙耶は通学カバン片手に階段を降りて行った。

沙耶があっさり帰っていったので淡い期待を抱いていた啓介は拍子抜けしてしまった。

（一緒に帰ろうって誘った方がよかったかな）

昨日断られてすぐまた今日も誘う勇氣など啓介は持ち合わせていない。それに今日は別の目的がある。

沙耶と話している間も瓜生達の姿はなかった。

「馬原……君」

また驚いて啓介は振り向く。今日はやけに驚かされる日だ。

振り向いて啓介はさらに驚く。

そこには瓜生が立っていた。

「馬原啓介君だよね」

瓜生が自分の名前を知っていることにさらに驚く。

「瓜生……君」

まるで確認するかのように啓介もまた瓜生の名を呼んだ。

「はじめまして、だね。瓜生健です。よろしく」

そういうと瓜生はニコリと爽やかな笑顔を見せた。

（これは女の子はイチコロだな）

啓介は内心、感心しながらどうもとだけ答えた。

「転校してきて何日か経つけどなかなか友達ができなくてね。」

ちようど帰ろうと思ったら君の姿が見えたから思い切って声を掛けてみたんだよ」

「し、C組に友達になれそうなのはいいのかい。僕は別のクラスだぜ」

「関係無いよ。学校は一緒だろ。高校生になるとなかなかよそ者を受け入れにくいのかなあ、心理的に」

確かに小学生などと比べるとそうなのかもしれない。小学生の方がクラスに溶け込むのは早い気がする。沙耶が越して来た時もそう

だった。

「それになんか怖い先輩たちにも目を付けられちゃったみたいで不安なんだよ。今から帰るなら一緒にどうだい」

不安？本当だろうか。

坂本の話では五人を返り討ちにしたという。さらに今日も三年生を堂々と無視したらしい。そんな男の言うセリフとはおもえなかった。

それに自分の様な普通の、喧嘩の経験などない、頼りないひ弱な人間と一緒にいた所でその不安が解消されるとは思えない。

さあ、帰ろうと半ば強引に瓜生に促され、二人は歩き出した。

歩きながら啓介はこの不思議な男に疑問をぶつけてみた。

「瓜生君、君はなんで僕の名前を……」

「ボクはこの学校全員の名前を覚えてるよ。趣味なんだ」

質問を言い終わる前に瓜生は答えた。

「趣味？」

「そう、趣味。人の名前を覚えるのがね。名前は面白い。ひとそれぞれいろんな名字、名前がある。それをその人の顔と一致させて覚えるんだ」

「全員つて……千二百人くらいいるよね、全学年。それを全部？」

「もちろん。先生、用務員、事務も含めるとそうだなあ、千三百二十三人だね。なかなか大変だったよ」

啓介はぼかんと楽しそうに話す瓜生を見ていた。

やはりこの転校生は今までであったことのない、何か不思議な物を持っている。

「だから君は毎日校内を……」

そう言いかけた所で瓜生が立ち止まった。

ちょうど靴箱の当たりにさしかかったところである。

そこには五人の不良たちがいた。二、三年の生徒である。

啓介はハツとした。瓜生は三年の通称大山番長に呼び出されていたのだった。瓜生に突然話しかけられてその事をすっかり忘れてい

たのである。

傍から見ればついてない男だ。今からシメられようかという人物と香気に一緒に帰ろうとしていたのである。

「大山さんが早く来いってさ」

睨みながら一人が言う。

どうやらこの五人は瓜生を逃げないように公園に連れて行く役の様だ。

啓介は他人のことながら青くなって瓜生を見た。

瓜生の表情は変わらない。涼しい顔をしている。

「今日はこの学校で初めて友達が出来た記念すべき日だ。そんな日にあんたたちと遊んでる暇はボクにはないよ。行く気が無いから昼間も知らん顔したのに。わざわざお迎えはいらないよ、境先輩」

境と呼ばれたその不良は驚いた様子だ。まさか自分の名前を呼ばれるとは思わなかったのだろう。

「境先輩だけじゃない。敬称略させてもらうけど小山、福島、田中、本田、あんたたちもだよ。ボクは帰る、そう大山に伝えといてくれ」

啓介はそこにいる不良たち同様驚いた。本当にこの男は全校生徒の名前を覚えているのだ。

「ゴ、ゴチャゴチャうるせえんだよ。いいから来い」

思いもよらず名前を呼ばれた五人は明らかに焦りが見えて、一気に瓜生を取り囲んだ。もちろん隣にいる啓介も一緒に。

五人は瓜生を睨みつけるだけでは飽き足らず、啓介にまですごんでくる。

啓介は初めての経験に足の震えが止まらなかった。

靴箱のまわりには下校の生徒たちがざわざわと集まりだしていた。「ふうむ。目立つっちゃうなあここじゃ……」

瓜生が呟いた。

「馬原君申し訳ない。少し寄り道をするね。ちよつと付き合ってくれ」

そう言うつと瓜生は啓介の腕をつかみ、

「行こう」

それだけを口にすると取り囲んだ五人を横目に促すとずんずん歩き始めた。

慌てて不良たちも瓜生の後について行く。

「ちよ、ちよつと瓜生くん……」

まるで鼠の鳴き声のような細かい啓介の声にも瓜生はお構いなしである。

啓介はどうする事もできず、ただただ瓜生に引つ張られ五人の不良たちとともに学校をあとにした。

転校生 / 5

その公園は正門を出てしばらく裏路地を歩くと現れた。

あたりは車一台がやっと通る程の道幅で、古い住宅街の裏手にあるので人通りも少ない。不良連中にとつては格好の場所なのだろう。

啓介は何度も道すがら何度も脱出を試みたが、隣では涼しい顔した瓜生が啓介の腕をつかんだまま離さないし、5人の不良たちが周りを取り囲んでいるからその願いは叶わなかった。

不安げに何度も瓜生の顔を見るが、

「大丈夫だよ。大丈夫」

そう繰り返すだけだった。

ちよつと転校生に興味を持ったおかげで今日はとんでもない日になった、そう啓介は嘆いた。

そうこうするうちに一行は公園に着いた。

その光景を見てさらに啓介は絶望する。

公園にはすでに三年の大山がいてその他に十人もの不良たちが待ち構えていたのである。

その中に昨日返り討ちにあつた後藤もいた。おそらく昨日の他の四人もこの中にいるのだろう。

啓介と瓜生を連行して来た五人と合わせて総勢十五人にもなる。

一人相手に大層な人数である。

「連れてきました」

靴箱で瓜生に境と呼ばれた男が大山に報告する。大山はコクリ、と頷くだけだ。

「うりゅー……」

大山がそう言葉を発しようとするやいなや、

「えらくギャラリーが多いな、今日は」

瓜生が口を開いた。

「用があるのは誰だい。いち、に……今日は十五人か。やあ、昨日

はすまなかつたね。学校を休んでたみたいだから心配したよ」

そう言つて手を上げた。

後藤をはじめとする昨日呼び出した五人が戸惑っている。

「調子にのるなよ、瓜生。今日用があるのはおれだよ」

大山がすこむ。瓜生は顔色一つ変えない。

「いつも思う事だが君たちは高校生にもなつて一人じゃ何もできないのかい。大山、君もだ。用があるなら自分で呼びに来ればいい。そんな子分なんか使わずにだ。結局学校じゃ悪ぶっていても誰かとつるまないと何にもできないんだ君たちは」

子分と言われて他の連中も殺気立ち始めた。横の啓介はこれ以上刺激するなと泣きそうな顔をしている。

だが瓜生は構わず続ける。

「昨日は五人で敵わなかつたから今日は三倍の十五人か。明日はどうする。四十人くらい集めるかい」

「う、瓜生君……」

挑発し続ける瓜生を啓介が諫めようとするが一向に止める気はない。

「ボクは本来、暴力は好まない平和的な人間なのだ。なぜなら暴力は何も解決しない。今日のこの人数を見ればそれは明らかだ。昨日の暴力は正当防衛のつもりだったが今日、そのせいでまた別の暴力を生もうとしている。君たちのせいで」

「言いたい事はそれだけか瓜生」

ずつと黙つて聞いていた大山が口を開く。周りの不良たちは今にも襲いかかつてきそうな勢いだ。

「言いたいことは山ほどあるさ。聞いてくれるかい」

そこへ一人の茶髪の不良が歩み寄り、啓介の隣まで近づいた。

「ごちゃごちゃうるせえんだよ」

うつと唸り、息が出来なくなつた啓介はその場にうずくまつた。茶髪のその不良に腹を殴られたのだ。

突然の外部からの衝撃に啓介の体は、一瞬呼吸をするという仕事

を忘れてしまった。

産まれて初めて親以外の人間に殴られた衝撃と驚きで啓介の頭は真っ白になった。

なんとか息を吸い込み呼吸を整えようとするが咳とともに痛みが腹部を襲って体に力が入らない。

殴った茶髪がその様子を見て笑っている。

「お前が能書きたれてる間にお友達が大変だぜ、瓜生さんよ」

ニヤニヤと逆に挑発してくる大山、それに合わせて取り巻きの不良たちが笑い声をあげた。

「大丈夫かい、馬原君」

瓜生に抱きかかえられる様にしてなんとか啓介は立ち上がった。

ゴホゴホっと二、三度咳込む。

ふらつきながら瓜生の顔に目をやった啓介は思わずゾツとした。

「イラつくなあ……」

そう呟いた瓜生は冷え切った、まるで汚物でも見るかのような目つきに変わっていた。さっきまでそこにいた涼しげで爽やかな男の面影はそこになかった。

その表情を見て特に動揺したのは後藤をはじめとする、前日に瓜生に返り討ちにあつた五人だった。

それは一瞬だった。

まず瓜生の正面にいた大山が腹を抑えてその場に倒れこむ。そして啓介の隣にいた茶髪の男が低いうめき声とともに膝から崩れ落ちた。

啓介は何が起きたのか分らなかった。

やっと呼吸も落ち着いたところに目の前にいた二人の不良があった。という間に地面に転がり込んでいるのだ。

足元にいるふたりはうつうつと苦しんでいる。

啓介がやられたように大山と茶髪は一発つつ腹部を殴られたようだ。

不意をつかれたとはいえ一瞬にして不良二人は瓜生に対して戦意を失ってしまったのだ。

取り巻きの不良たちも突然の出来事にあっけにとられている。

ふう、とひと息吐くと瓜生は辺りを見回した。

「君たちのリーダーは見ての通りおねえだ。どうする？ 次は誰だい。出来ればこれ以上無駄な暴力は避けたいんだが」

そう瓜生にすこまれた取り巻きたちはピクリとも動かず、いや動けずにいると言った方がいいだろう。

「ふむ、昨日の五人よりは利口みたいだね。じゃあボク達は失礼するでしょう。じゃあまた明日学校で」

そついうと表情が一瞬にしてあの爽やかな瓜生に戻った。

「さあ馬原君、行くとしよう」

くるりと踵を返し、来た時と同じようにして啓介の腕をつかんでさつさと公園を出て行った。

啓介もあの場にいた不良たちと同様、しばらくの間放心したままだった。

「ひどいめに遭ったね」

学校に戻りながら瓜生が啓介に言った。まるで人ごとである。さつきまで腕をつかんでいた手はようやくほどかれていた。

「初めて人に殴られたよ。なんで関係無い僕まで」

「全くだ。馬原君は関係ないじゃないか。それを殴るなんてひどい連中だよ」

啓介はあつけにとられた。元々この男が腕を掴んだまま離さなかったから啓介まで殴られる羽目になったのだ。

そして急に啓介の顔を見て、

「なに、初めてだつて？ 殴られるのが？」

啓介も驚いて思わず頷いた。

「そうか、初めてか！ それはめでたい。何事も初めての経験というものはいい事だ。どうだい、初めて殴られた感想は。痛かった？ そうだろう、誰でも殴られれば痛いものだ。当たり前的事だよ。

いやあいい経験をしたね、馬原君」

この男はどこまで本気なのだろうか、啓介は困惑した。

ついさつき恐ろしい顔つきで不良どもを殴ったかと思えば、今度人は人がとばかりで殴られた事をめでたいと言って喜んでいる。

こうめでたいめでたいと言われると啓介も怒る気にもなれない。

「瓜生君、君は昨日もあの調子で五人とやり合ったのかい？」

「ああ、昨日の事かい。昨日の連中は今日より凶暴だったなあ。公園に着くなりボクの胸ぐらを掴んできたんだ。今日もいたあの後藤だったかな。ボクは恐かったから、五人に囲まれれば誰だつてそうだろう？ だからつい、こうドンと……」

瓜生が腹を殴る仕草をした。恐かったなどと、どの口が言うのだろうか。

「それで引き下がってくれたなら他の四人も痛い思いせずに済んだ

のに。殴るボクだって手が痛いんだ。分るかい馬原君」

「僕は人を殴った事も無いから分らないよ。でも痛い目みたから後藤君たち今日は大人しかつたんだろうね。君は強いなあ。うらやましいよ」

「うらやましい？」

「だってそうじゃないか。あんな大人数相手にひるまず向かつていったんだ。しかもあの大山さんを一発でやつつけたし」

「彼はまたボクに絡んでくるよ」

瓜生はがっかりした表情で来た道を振り返った。

「また絡んでくるって？ 今日あれだけやられてまだ君に喧嘩を売りに来るって事かい？」

「そういう生き物なんだよ、不良ってやつは。馬原君、強いってどういう事だと思う？」

ずいっと瓜生は啓介の顔を覗き込む。突然の問いに啓介はしばらく考え込んだ。

「君はボクの事を強いと言った。でも今日、君をあそこに引つ張っていったのは一人では心細かったからだ。それはボクの弱さでもある。その弱さから悪いけど君の腕を離さなかった。君は自分の事を弱いと思ってるね」

「僕は喧嘩なんかした事無いし、それにあんな大勢に囲まれたらすぐ逃げ出してしまふよ。僕は弱いからね」

「確かに喧嘩に関して君は弱いかもしれない。でも自分のそういう弱さを君は分っている。それは逆に言うとき強いつて言えないかい？」

まるでとんだ。啓介は瓜生の言う事が理解できなかった。

瓜生はさらに続ける。

「さっきの不良たち。はつきり言っただけ彼らは君より弱いんだよ、馬原君」

ますます啓介はこんがらがった。

「彼らは自分を強く見せたいから校内で目立つた格好をするんだよ。俗に言うヤンキーだね。まず見た目でまわりを威嚇するんだ。馬原

君みたいなタイプはそれだけで彼らと距離をとるだろう？　そして睨みつけたリドスの効いた声でさらに威嚇する。そうやって強さをアピールするんだよ。いやそうする事でしか強さをアピールできないんだ」

「でもそこから殴り合いになったりするんだろう？」

「それはお互いが引かない場合さ。誰だって殴り合いは避けたいんだよ。痛い思いはしたくないからね」

「分らないな瓜生君。それでどうして僕の方が彼らより強い事になるのさ」

「わざわざ見た目で強さをアピールするんだよ。それは気持ちが弱いからさ。まわりから弱い奴だ、情けない奴だと思われたくないからそういう気持ちや髪型や服装、つまり外面に出てしまってるんだ。弱いとは思わないかい？　君は自分が弱いと自覚している。自分というものを理解しているんだ。それだけで十分強いと思うね、ボクは。さらに言えば公園に着くまでの間、君は暴れたり大声をだしたりいろんな手を使えば逃げさせたんだ。でもそうしなかった。それもある意味強さだ」

「なんだかへ理屈の様にも思えたが理解はできた。だが啓介は自分が強いとは到底思えない。」

それに逃げ出さなかったのは啓介自身、この瓜生に興味があったからでもあるのだ。

「そして彼ら、あの中だと大山かなあ。彼なんかはボクに負けたと認めたくない、まわりの取り巻きに情けないと思われたくない、その弱さからまたボクに絡んでくるだろう。自分の弱さを認めたくない弱さだよ馬原君」

「誰でも弱い部分を持っているという事かい？」

「そういう事だよ。強さと弱さは言ってみればコインの表と裏だ。見方一つでどっちにもとれるんだよ。そして本当に怖いのは、強さを隠して普通に生活している奴だよ」

その意味は啓介には分らなかったが、瓜生の表情は真剣な眼差しで

校舎を見つめていた。

話しているうちに校内の自転車置き場に着いた。陽も少し傾いて部活動の生徒以外はほとんど見かけない。

「さあ、下校しよう。今日はいいい経験が出来た素晴らしい日だったね馬原君」

「瓜生君、気をつけた方がいいよ。もう学校であんまり目立たない方が……」

「ある程度目的は達成したからね。もう校内をうろつく様な事は控えるよ」

目的？ と啓介は思わず聞き返した。

「いやあこつちの話さ。気にしないでくれ。さあ帰ろう。今日は巻き込んで悪かったね。ボクはちよつと教室に戻るから。」

それと携帯の番号を教えとくからいつでも電話してきてくれ。君はこの学校に来て最初の友達だ。これで明日からまた学校が楽しくなるよ」

そついうと瓜生は携帯電話を取り出した。

啓介がじゃあ、と自転車にまたがると、

「馬原君、君も用心してくれよ。君も君なりの強さを持っている。負けちゃだめだ」

啓介はそんな事を言われて少し戸惑いながらも頷いて、学校をあとにした。

その意味深な言葉と瓜生の真剣な表情が何を伝えたかったのか、啓介はこの時まだ理解できなかった。

闇の中で

陽も落ち、薄暗い闇が辺りを包みこもうとしていた。

部活動の生徒たちもその日の練習を終え汗を拭い、それぞれがやがて帰宅の途に就こうとしている。

部室で談笑するもの、道具の片付けやグラウンドの整備をするものの、顧問に個別に指導をうけるもの、様々である。

校舎に灯る明かりもほとんどなく、昼間のにぎわいも今は無く、静寂だけがコンクリートの塊を覆ってしまおうとしていた。

男は小部屋でほくそ笑んでいた。

明かりもつけず、薄暗い部屋の中で一人笑いをこらえるのに必死だった。

校舎にはほとんど誰も残っていないのだから声を出して大笑いしてやってもいいのだが彼の性質上、このような陰湿な笑いになってしまうのだった。

（昨日に続いて今日もまたあの忌々しい、学校の屑どもが……。暴力行為や威圧的な態度で校内を我がもの顔で闊歩するあの社会の汚物どもがねじ伏せられた。それも自分たちが得意とする腕力で）

思い出せば思い出すほど笑いが込み上げてくる。

机の上に顔を伏せ、くくくと背中が揺れている。

坪井高校の生物教師、竹本純一は常に不良たちに苦渋を舐めさせられて生活していた。

授業中の居眠りをはじめ、携帯電話で話し始めたかと思えば、平気で弁当を食べ始め、教室から出て行く。

はじめのうちは注意をしていたが、そんなことすれば当然の如く睨みつけられ時には胸倉を掴まれたりもした。

それを見た他の生徒も自然と竹本に対して高圧的な態度を取り出す。彼の授業は段々と無秩序なものとなっていた。

そうなってくると竹本の華奢な猫背の体はどんどん丸くなってい

き、廊下を歩く姿も小さく小さくなっていった。

内気な性格で決して自分を出そうとしない性格の竹本は生徒だけでなく、同僚の教師からも疎まれ、彼は常に孤独だった。

そんな竹本にとって不良たちが公園で敗北したという一報は、荒んだ彼の心を弾ませるのに充分だった。

（まさに天罰だ。神による天罰だ。神は真面目に生きている者の味方だ。いい気味だ。大山をはじめとするあの屑ども、図に乗るからこうなる）

両手で顔を覆い、天を仰いで竹本は笑い続けた。

（惜しいのはもっと、もっとだった。病院送りになるくらいもっと痛めつければよかったのだ）

すくつと立ち上がり暗がりの中で窓に目をやる。外には街灯の小さな明かりが見えた。

（もうすぐ。もうすぐ私にも力が手に入る。あの屑どもに罰が与えられたのは喜ばしいが、それは私の役目だった。私の手で奴らに天罰を与えてやりたかった。それだけが残念だ）

遠くから足音が聞こえてきた。廊下を歩く音だ。

竹本は小部屋でじつと息を潜めた。

彼のいる部屋は校舎の三階、生物室の隣、生物準備室。そこには昆虫の標本や爬虫類のホルマリン漬けなど授業に使われる道具が保管されている。

生物科の教師は竹本一人だから職員室にいるよりもこの準備室という小部屋に一人籠もっている事が多い。それにこの校舎の三階は学級のクラスも無く、化学室や視聴覚室など特別教室がほとんどだから放課後など人気も少ない。

竹本にとってはさほど広くはないが居心地のよい絶好の場所なのである。

足音は竹本のいる部屋の前を通り過ぎ、遠くなっていった。

この学校の、しかも自分の教科の教室にいるのだから別に隠れる必要もないのだが、竹本の極力人と関わりたくな性格からそうして

しまつのだろう。

足音も消え、竹本は自分の携帯電話を手を取った。着信はおろかメールなど当然ない。

（それにしてもまだか。あれから一カ月経つというのに。一体いつになったらアレをくれるんだ。約束のアレを）

急に苛立ち始めた竹本は携帯電話を持ったまま部屋をうろつき始めた。

（もっと早くアレをくれたならあの屑どもは私が処罰したのだ。言われた通り練習も繰り返し返した。かなり危険な練習だった。それなのに……）

狭い部屋を行ったり来たりしている様はまるで動物園の熊である。気の抜けたようにドカッと椅子に腰を下ろし、何かを思い返すように天井を見つめた。

（アレさえ手に入れば私の人生は変わる。これまでの人に見下され、蔑まれ続けた私の人生……。アレの力が大きく私を変えてくれるはずだ。今は醜いさなぎの様な私を、アレが美しく強い蝶に変えてくれる）

天井から棚に並べられた蝶の標本に視線を落とした。

（あの日、あいつから話を聞いた時は耳を疑ったが、実際に目の当たりにしたあの瞬間から私の新たな人生は動き出した。早く、一秒でも早くアレを手に入れなければ）

暗闇の中に一人身を置き、竹本は自分の世界に陶醉しきっていた。「どうしました？」

竹本は驚いて椅子から立ち上がった。余りの勢いに椅子は倒れ、それまでの静けさの中にがしゃんと激しい音が響き渡った。

「だ、誰だ」

竹本の心臓の音がこれまで聞いた事のないくらいの大きさで自身自身の耳に響く。

その闇に包まれた狭い小部屋の入り口にいつの間にか男が一人、こちらを向いて立っていた。

闇の中で / 2

「だ、誰なんだ君は……」

さっきは驚きのあまり大声で尋ねた竹本だが、今度は蚊の羽音の様な声だった。

男は入り口に立ったまま動かない。

生物準備室には入り口が二つある。一つは廊下から準備室に入るドア、もう一つは生物室へとつながるドアである。

男は生物室とつながるドアから入ってきてそこに立っていた。

外は陽が落ち暗くなっていて、部屋は闇に包まれている。

多少闇に目が慣れてきているが、男はパーカーのフードを目深に被り、うつむいているから顔ははっきり見えない。

見えるのは男の口元だけで、少しほくそ笑んでいる様に見える。

しばらく沈黙の時間が続いた。

心臓の鼓動は驚きと不気味な男に対する恐怖で激しさを増していた。

予期せぬ訪問者に戸惑いつつも何も答えないこの男に竹本はだんだんと腹が立ってきた。

「き、君はこの生徒かね。クラスと名前を言いなさい。そして早く帰りたいまえ」

聞く声は小さい。足の震えも止まらない。

「……」

返事はない。

知らない男と暗い密室で二人きりというこの状況から一刻も早く脱出しなくてはと本能が急かし始めた。

竹本は男を無視して自分のカバンに書類を詰め込み、帰り支度を始めた。

「私は帰るよ。鍵を閉めるから君も……」

「……アレが欲しいそうですね……」

竹本は再びドキツとした。

「な、何の話かね。ア、アレとは何の事だい？」

とぼけて見せたが動揺は隠せない。竹本の額から汗が吹き出してきた。

「力が欲しいんでしょ？ 不良どもを見返すための。いや、不良だけじゃない。これまであなたの人生を、あなたそのものを蔑んできた連中を見返すための力をです。俺は何でも知ってるんですよ。あなたが欲しがってる物も、それを誰に聞いたかも……」

「な、何を言ってるんだ君は。何の話をしてるのか私にはさっぱり……」

「あんたがやりたかった事をさつき俺が代わりにやっておきましたよ。少々人数が多かったですけど俺にとっては何のことはない、あんな不良ども。その力をあんたは欲しがってる。違いますか？」

「うっ……」

「困るんですよねえ、勝手なことされると」

男の口調は急に激しくなった。

竹本のシャツは大量の汗で体にひっついてくる。

「あまり目立ちたくないんですよ、俺達は。いや、目立つちゃいけないんです。分りますか？」

今度は竹本が黙りこくっている。

「力を欲しがるのは構わない。だが目立つてもらっては困るんです。あなたの勝手な行動が俺の身も危険にさらす可能性が出てくるんですよ」

男は顔を上げないまま一歩前に出た。

竹本は気押されるように後ずさる。

「ま、待ってくれ。私が力を欲しがる事と君とどう関係があるんだね？ それに俺達と言ったね。一体何なんだ君は？」

声を震わせながら竹本が聞いた。大の大人が今にも泣きだしそうな勢いだ。

男はパーカーのポケットに両手を突っ込み、ふうっとため息をつ

いた。

「あんたはアイツに何を聞いたんです？」

「な、何をつて……。ち、力が欲しいんだろう、と聞かれたから私は……」

「あんたは俺達側に来る覚悟がありますか。知ってしまったんでしよう、この世界の事を。つまらない復讐心のために知らなくてもいい事をあんたは知ってしまったわけだ」

「つ、つまらないとは何だ」

竹本が珍しく声を荒げた。普段は虫も殺さぬ様な大人しい男なのだ。

「お前には分からんだろう、私の苦しみが。四十年間もの間、誰からも相手にされず、訳もなく目の敵にされいじめられ続けてきた苦しみ。もう我慢できないんだよ。そんな時アイツに力が欲しいかと持ちかけられた。当然答えはイエスだ。その力があれば私の人生は変わるんだよ！」

興奮して息が荒くなる。

コツコツと再び遠くから足音が聞こえた。

竹本は体の震えを押さえながらその音が通り過ぎるのを待った。

部屋は蒸し暑さで空気が淀んでいる様だった。

廊下の足音が去ったのを確認して男は笑う。

「分りたくもないね。あんたの苦しみなんか知った事じゃない。俺には毛ほども関係ないからね。俺は確認に来たんだ。アイツからアレを欲しがってる馬鹿がいるって聞いてね。勝手にベラベラしゃべりやがって」

男は苛立っている様子で、どんっと竹本がさっきまで座っていた椅子に腰を下ろした。

まるで竹本の存在を無視するかのように椅子に腰かけ、窓の外を眺めている。

どうにかフードに隠れた顔をのぞいてやろうと竹本は試みたがはつきりとは見えない。声から察するにまだ若い男の様だった。

「アイツに許可は出しく。あんたにアレを渡してもいいってね。ただししばらくは大人しくしとけ。いいな？ もう一度言う、大人しくしとくんた。力試したけりやどつか遠いところでやれ。あんたがやった練習で鼠どもが動き出してるんだよ」

「鼠？」

「こつちの話だ。まあいいや。妙な事し出したらアイツもあんたも

――」

すくつと椅子から立ち上がり男は竹本の方に顔を向けた。

「――殺す」

竹本はゾツとした。

殺すという言葉もそうだが、何よりフードからちらりと覗いた男の目が一瞬爬虫類、あるいは猫の目の様に瞳孔が縦に細長くなっている様に見えたのだ。

「じゃ、そういう事だから」

そういうと男は竹本に背を向け入ってきたドアに歩き出した。

「あ、あんた……何者だ」

恐怖を押し殺し竹本は思い切つて尋ねた。

男は立ち止まり振り向くことなく答えた。

「……アイツにアレをやったのが俺だよ」

再び部屋に一人になった竹本は汗と震えが止まらないまま、しばらくそこに立ち尽くしていた。

青女月の夜に

家に帰り着くなり啓介は二階の自分の部屋のベッドに横になった。いつもなら帰ってくればテレビゲームの電源を入れたり漫画でも手に取る。それが啓介の日常なのだ。

それが今日はゲームをする気にもならない。

ベッドに寝転んでぼーっと天井の照明を眺めている。

「とんでもない日だった」

殴られた腹をさすりながら公園での出来事を思い出す。

あの痛みがまた戻ってくる。

一瞬呼吸が困難になり、目の前が真っ白になったあの感覚。

痛みは後からやって来て胃液が逆流してくるあの口の中の不愉快なあの味。

もう二度と味わいたくなかった。

あの瓜生という男に関わるとまたあんな目に遭うのかもしれない。嫌だ。もう殴られるのは御免だ。

そう考えるが、啓介はあの瓜生という男に憧れにも似た感情を抱いていた。

あれだけ大人数を目の前にして少しも怯まないあの度胸。

一瞬にして学校の番長をねじ伏せる強さ。

瓜生健は啓介が持つていない者を持つている。

まるで子供が特撮ヒーローに憧れる、そんな感情だった。

ベッドに仰向けになったまま自分の両手を天井に掲げた。

（僕の強さ……何だろう。こんな臆病な僕に強さなんかあるんだろうか……）

別れ際、瓜生が自分に行った一言がひっ掛っていた。

からかわれたのか、とも啓介は思った。

小さい頃から自然と争いを避けて育ってきたし、自分が臆病者だという事は自覚してきたからだ。

だがあの瓜生の真剣な眼差しが脳裏に焼き付いて離れない。

一体どう意味だったんだろうか……。

クラスでも大人しい啓介はクラスを中心になる人気者や、不良に憧れた時期もあった。それにクラスの女子に積極的に話しかけようとした。

だが、やはり性格なのだろう、一步踏み出す勇氣は啓介に無かった。

いつの頃からか憧れなどは彼の心から影を潜め、なるべく目立たない生き方を選んで生活してきた。

時計の針は八時を回っている。

馬原家は両親が共働きで帰りが遅く、夕飯はいつも八時を過ぎる。一人っ子の啓介は子供の頃からそれが当たり前だった。

一階の台所では十分程前に帰って来た母親のまな板を叩く音が聞こえる。

ベッドに横になっていた啓介はいつの間にかウトウトしていた。意識が薄くなっていたところへ携帯電話の着信音がけたたましく鳴った。

啓介は驚いてベッドから飛び起きた。

友達もそれほど多くない啓介の携帯電話が鳴るのは珍しい。しかもそれはメールが来た事を知らせる着信音だった。

岩崎だろうか、啓介はまずそう思った。

ゲームやパソコンなどの情報や質問などを岩崎は聞いてくる事がたまにあるからだ。

ボーっとする頭を掻きながらゆっくりとテーブルの上に置かれた携帯電話に手を伸ばす。

その液晶画面に映し出されたメール着信通知の名前を見て啓介の眠気は一瞬で吹き飛んだ。

メールは大久保沙耶からだった。

そういえば今日、沙耶と連絡先の交換した事を思い出した。

瓜生との一件でそんな啓介にとって喜ばしい事件の方はすっかり

忘れてしまっていたのである。

思いもよらない相手からのメールに啓介の頭に一気に血が上った。はやる気持ちを押さえながら一息ついて沙耶からのメールを開く。

こんばんわ

今、時間あるかな

ちよつと散歩しない？

短い文章だったがそのメールを読んだ啓介の体中の血が一気に駆け巡り始めた。

（い、今から？）

思わぬ沙耶からのデートの誘い、啓介にとってこれはデートの誘いなのだ、に戸惑いつつも何と返事をしようか悩み始める。

もちろん答えはYesなのだが、何ととっても色恋に全くと言っていいほど疎い啓介にとって、返事一つ返すのも一大事なのだ。一体何と返事するのが正解なのか、頭を抱えた。

「啓介ー、ごはんよー」

一階から母親が呼んでいる。夕飯の支度ができたようだ。

だが啓介はそれどころじゃなかった。とりあえず沙耶に返事をしなければ、ドキドキしながら一文字づつゆっくり携帯電話のボタンを押していく。

いいよ。

どこに行く？

たったそれだけ入力すると震える指で送信ボタンを押した。

（ちよつと素っ気なかったかな……）

もっと文字を多くした方がよかったかな、などと少し後悔しながら出かけるための支度を始めた。帰ってすぐベッドに横になったからまだ制服のままだった。

するとすぐに着信音がなった。

あわてて携帯電話を手取る。早い。メールは沙耶からだ。

じゃあ江津湖の入り口で待ってるね。

電車通りから入ったとこ。

啓介の胸は高鳴る。

急いで着替えを済ますと、慌てて階段を駆け降りた。

「ちよつと出てくる」

食卓に夕飯を並べていた母親が面喰う。父親の帰りはまだのよう
だ。

「ちよつとつて……こんな時間にどこ行くのよ？ 夕飯は？」

「帰ってから食べるよ」

「……もう、気をつけなさいよ……」

そんな母親の言葉を聞き終える前に啓介は玄関から飛び出した。
男子高校生の親ともなるとこんなものだろう、たいして心配
もしていない。

啓介が何か悪さをするような度胸がないことも分っている。
外に出るとうつすらと月が出ていた。

九月も半ばに入って残暑も少し和らいできた。

生温い九月の風に吹かれながら啓介は自転車にまたがり、沙耶の
待つ夜の江津湖へと急いだ。

青女月の夜に / 2

どこからか鈴虫の鳴き声が聞こえてくる。

残暑の生温い風も今の啓介には心地よかった。

通りはまだまだ交通量が多い。その中を啓介は自転車を急いで走らせた。

江津湖は啓介の家から自転車で五分程の距離だが、今夜はその距離がえらく遠くに感じた。

十六年間生きてきたがこんな気持ちになったのは初めての事だ。はやる気持ちを押さえられない。

ずいぶん長い間話してなかった沙耶にまさか呼び出された。しかも向こうから。ずっと遠くからその姿を見るだけだったのが一つのメールでその距離がずっと近くになったと感じた。

沙耶との約束の場所は啓介のいつも行くお気に入りの場所だった。湖の入り口に着き、自転車を降りて辺りを見回すが沙耶の姿はない。まだ来てないようだ。

夜の江津湖はその遊歩道に街灯がポツポツと明かりを灯している。薄明かりに照らされた湖面は、穏やかに美しい湧水を湖の中心へと運んでいる。まるで湖のまわりだけが現実世界から切り取られ、そこだけ別の空間にあるようだった。

啓介はいつもの様に一人湖面を眺めて沙耶が現れるのを待った。

この好意を持つ女性を待つという時間が啓介はこそばゆくもあった。自分には到底縁のない事だと割り切って生きてきた啓介にとつてなんとも言えない幸福感だった。

携帯電話を開き、時間を確認する。啓介がここへついて十分が過ぎようとしていた。

(どうしたんだろう)

待つという幸福感が今度は本当に現れるのかという不安感へと変わって行く。夜の闇がその不安をよりいっそう煽ってくる。

沙耶の家は啓介の家から徒歩で七、八分程の距離にある。

そこから歩いて江津湖まで来るなら二十分くらいだろうか。自転車なら十分あれば着く。

啓介は頭の中で色々なパターンでここに来るまでの時間を計算していた。

(……まあもう着くだろう)

計算した結果、出た答えである。

こちらからメールしようかとも思ったが、急かすようで格好悪いという理由でそれは却下した。

人の気配を感じるたびに振り返り、辺りを見回す。

傍から見れば妙な男である。こんな暗がりでは挙動不審な男がいれば警官に職務質問されてもおかしくない。

時間が経つにつれ、それほど啓介は落ち着きがなくなっていた。無理もない、これまで女子に見向きもされなかった男だ。一杯食わされて、本当にノコノコやって来たと茂みの中で笑われてるんじゃないかと心配にもなってくる。モテた事が無いという事実が啓介を疑り深い性格にするのだ。

乗って来た自転車を遊歩道のわきに生えている木に立てかけ、啓介は湖の中心へと歩き出した。どうもじつとしていられない。

湖の流れに沿ってそれを追うようにしてゆつくりと歩いて行く。美しい水の流れは辺りの光を反射させ、キラキラと輝いている。

(今でもホタルは見れるのかなあ……)

春先にはごくわずかだが湖のわきにはホタルが飛び交う。小さい頃は両親に連れられてそれを見に来る事もあった。

子供の頃の記憶を思い返していると、ふと啓介は立ち止まった。夏休みの終わりに見たあの光景を思い出したのだ。

沙耶とあの生物教師竹本が二人並んで歩いている光景。

瓜生と不良に囲まれたり、思わぬ沙耶からの誘いに舞い上がっていてすっかりその事を忘れていた。それほど今日はいろんな事が起きた一日だった。

もしかするとあのとても認めたくない光景を、自然と記憶の奥底に押し込めていたのかもしれない。

(……どうなんだろうなあ、実際……)

嫌な事を思い出したと啓介はため息をついた。

浮かれていたが、沙耶は付き合っている男がいるかもしれないのだ。それも学校の教師と。

噂話にしか過ぎなかったが、啓介は実際に二人が一緒に歩いているのを目撃している。それは噂が限りなく真実に近いと確信せざるを得ない光景だった。

それならなぜ沙耶は自分を呼び出したんだろうか。

夜の風に吹かれて啓介の頭はだんだんと冷静になってきた。

(なに舞い上がってたんだ、僕は。沙耶には彼氏がいるじゃないか。もしかするとその事を話すために……)

幸福感は不安へと変わり、今度は絶望へと追いやった。一人であれこれ考えて忙しい男である。

「啓ちゃん」

暗がりです突然声を掛けられ、啓介は心臓が飛び出しそうになった。振り返るとそこには沙耶が立っていた。

街灯の薄明かりに照らされた沙耶は長い髪を下ろし、真っ白なTシャツとスカートという出で立ちだった。

沙耶と竹本の関係を思い出して絶望にいた啓介の心は再び舞い上がった。胸が高鳴る。

こちらを見ている沙耶の瞳をしっかりと見返せない。

「遅くなってごめんね」

そう微笑む沙耶はいつも昼間に学校で見る沙耶と違って、どこか色気の漂う、妖艶な雰囲気に含まれていた。

青女月の夜に / 3

時間は九時になろうとしていた。

啓介が江津湖に着いた三十分前までは湖の遊歩道を散歩したりランニングをする人もちらほら見かけたが、今はもうほとんど見かけない。

昔は夜でも駐車場が解放しており、車の出入りが自由だったが、数年前から夜中に江津湖内の公園や公衆トイレを壊したり、馬鹿騒ぎする輩が増えて、施錠されるようになってしまった。それ以来夜間の湖での人影は少なくなっている。

啓介と沙耶の二人は並んで遊歩道を歩いていた。

「ごめんね、急に呼び出して」

急いで来たのだろう、沙耶の息遣いが少し荒い。ふわりと風呂上がりのいい香りがした。

「お風呂入ったら遅くなっちゃった。待った？」

人を呼び出しておいて風呂に入るなんて女性はそういう生き物なのだろうかと思っ啓介は不思議に思った。

（なんて呑気なんだろう）

一方の啓介などはまるで約束の時間に寝坊したかの如く、大急ぎでここまでやってきたのだ。

だがそんな様子は微塵も見せない。いや、見せたくないのだ。

「いいや、ちょっと前に僕も着いたから。どうした、急に呼び出して」

クスツと沙耶が笑う。啓介の体中の血液はかつてないほどのスピードで駆け巡った。

「久しぶりだね、二人でこうやって歩くの。小学校六年生の頃以来かなあ。中学行ったら啓ちゃん全然話しかけてくれなくなったもんなあ」

「そ、それは……」

沙耶がわざと意地悪な表情で顔を覗くと啓介の顔は真っ赤になった。幸いにも辺りは暗いから沙耶には気付かれてはいない。

こうやって二人で歩いていると確かに一緒に学校から帰っていた子供の頃を思い出す。

あの頃もこうやってお互いわざと意地悪を言い合ったものだ。

沙耶も啓介と一緒にどちらかと言えばクラスでも目立たない存在だった。

沙耶は転校生ということもあって、なかなか友達が出来なかった。帰る方向が同じだった啓介はいつも一人で淋しそうに帰る沙耶を見かねて思い切って声を掛けた。

その「一緒に帰ろう」の一言が沙耶と啓介の距離を縮めて、それ以来、小学校を卒業するまで二人は下校を共にしたし、放課後もよく遊んだ。

その声を掛けるという行為は、後にも先にも啓介が沙耶に見せた唯一の勇気だった。

今の沙耶はあの頃、地味だった小・中学の頃と比べると、どこか色っぽく、大人びている。

啓介はどこか大人の雰囲気を感じている沙耶を見て、自分だけが子供のまま取り残されたようで情けなくなってしまった。

「あそこに座ろっか」

沙耶は指さす先には木製のベンチがあった。啓介は無言で頷くと二人は並んで腰を下ろした。

「やっと啓ちゃんの連絡先聞けたからね。今日はゆっくり話したかったんだ」

空を見上げながら沙耶が口を開く。

夜空には薄い雲が広がり、淡い月がその雲を透して輝いている。

啓介も一緒になって空を見つめていたが、ある事に気付いて沙耶を見た。

「沙耶…… 今月誕生日だったろ」

「ふふ、覚えててくれたんだ。そうだよ。今月の二十八日ね。まだ

二週間あるけど」

小学五年の時、少ない小遣いで沙耶に誕生日プレゼントを送った事を思い出した。

「私の好きなアニメのキャラクターのバッグだったかなあ。うれしかったな、あの時」

照れくさそうに頭を掻く啓介を沙耶がからかった。

「知ってる？ 九月って色々な呼び方があるの。長月、寢覚月、紅葉月、色どり月……。他にもいくつかあるけど私が好きなのは――

――青女月」

「せいじょ……月？」

「そう。青い女の方で青女月。青女っていうのは雪とか霜を降らす女神の事なんだって」

「女神……ねえ」

「今馬鹿にしたでしょ、啓ちゃん。その顔」

隣の沙耶の顔がぐつと啓介に近づく。

「馬鹿になんかしてないよ。でも雪の女神ならなんか冷たいイメージじゃないか？」

「それがいいんじゃない」

「それがいい？ 冷たいとか寒いとかが？」

「私ね、自分の事冷たい女って思ってるの」

沙耶は空を見上げたままベンチから立ち上がった。その横顔はどこか淋しげだった。

冷たい女――。

啓介にはその言葉の意味が分らなかった。小学生の頃の沙耶にはそんなイメージは無かった。それは今、隣にいる今も変わらない。

なぜなら啓介にとって沙耶という存在は、例え手の届かない存在だとしても姿を見かけるだけで、心を暖かくしてくれる存在だからだ。

一つ、冷たい所を上げるとするならば、何年もの間目も合わせてくれなかった事だろうか。

もつともそれは啓介の方にも責任はあるのだが。

「沙耶は……冷たい子なんかじゃないよ。久しぶりに話したけど昔と全然変わってない。それに冷たい奴だったら僕はあの時声を掛けてないよ」

「ありがと。いつも一人で学校から帰ってたからうれしかったなあ。啓ちゃんが声を掛けてくれた時。あの時から学校行くのが楽しくなったもん」

月を見上げていた沙耶がくるりと振り返る。

あの笑顔――。

啓介がずっと見たいと思っていたあの笑顔がそこにはあった。声を掛ける勇気が無いために見る事の出来なかったあの笑顔だ。

啓介は自分の喉の渇きに気付いた。

（まただ。なんだろうこの渇きは。今は沙耶と一緒になんだ。沙耶と――）

と、沙耶の笑顔の中にきらりと光るものがあつた。

薄暗い月明かりの中に立つ沙耶の頬に一筋の涙がこぼれていた。

青女月の夜に / 4

幸せというものは感じるものなんだと改めて啓介は思った。どんな富や名声を得ようが、今の啓介にとってそんなものは幸せとは程遠いものなのだ。

人によつてはそんな馬鹿なと言うだろうが、沙耶と視線すら合わせなかった空白の数年間を埋めてしまうほどの、とても幸福に満ちた時間がそこにはあった。

ありふれた言葉を使うならば、このまま時が止まってしまつたらどんなにいいかとすら思えた。

ふと喉の渴きを感じた啓介は近くの自動販売機で飲み物を買ひ、再びベンチで沙耶との会話を楽しんだ。

沙耶の涙の理由は分らなかったが、二人はそれから三十分ほど思ひ出を語り合つた。

話しかける事の出来なかった数年間分の言葉がまるで江津湖の湧水の様にどんどん溢れてくる。

そのたびに沙耶は笑顔になったり時には意地悪な表情をして見せたりしていた。

ただ、沙耶はさっきの涙の理由も話さないし、特に気になる竹本との関係も啓介は聞き出せずにいた。その事を聞いてしまえば、この幸せな時間がガラガラと崩れていつて仕舞う様な気がしたからだ。できれば竹本とはただの噂に過ぎず、啓介の勘違いだったのだという願望を捨て切らずにいた。

「ほんと啓ちゃん声かけてくれなくなつたもんね、中学行つてから」
「だ、だってクラスも一緒にならなかつたしさ……」

「二年の修学旅行の時だつて……」

「そりゃああのとき沙耶が……」

他愛のない会話が途切れることなく、時間だけが過ぎていった。時折、犬の散歩をする老夫婦やジョギングをする若者が二人のそ

ばを通り過ぎて行つたが、二人は完全に自分たちの世界へと入り込んでいた。

「でも啓ちゃんと一緒にの高校だつて知つた時はうれしかったなあ」

「え？」

「私たちの中学からあの高校行つたのつてふたりだけじゃない？」

受験した人たちみんな落ちちゃつて。誰も知り合いがいないから心細かつたんだ。でも入学式の時啓ちゃん見かけてあれ？つて」

確かに啓介と沙耶の中学から坪井高校を受験したのは十数人いた。啓介の数少ない友人も一緒に受験したのだが、みんな落ちてしまつた。

実際、啓介も沙耶がどこの高校を受験したのか知らなかつた（気にはなつていたのだがわからずじまいだった）し、高校で沙耶を見かけた時は胸が高鳴つたのは言うまでもない。

「私も声かけたかつたんだけどね。なんか照れくさくつて」

「照れくさい？」

「なんて言うのかなあ、中学高校に行つてみんな少しずつ大人になつていつて……なんか今までみたいに声を掛けにくくなつたんだよね」

小学生から少しずつ大人になるにつれ、異性というものを意識するようになるものなのだろう。

人それぞれ個人差はあるのだろうが、啓介と沙耶は異性への意識が大きかつたのかもしれない。

実際、啓介の方も沙耶を意識するあまり沙耶に声を掛けられないでいたのだ。

「またこうやつて啓ちゃんと話できてよかった。もう嫌われたのかと思つてたしね」

（嫌うわけないだろ）

心の中で啓介は叫んでいた。

「僕も話せてよかったよ。また明日から普通に声を掛けれそうだし

……」

そう言いかけるとそれまで並んでベンチに座っていた沙耶が急に立ち上がった。

そしてくるっと驚く啓介の方へ振り向いた。

「実はね、啓ちゃん……。私学校辞めるんだ……」

一瞬啓介の頭は真っ白になった。突然の告白に初めは何の話を沙耶がしているのか理解できなかった。

「ばあんと頭をはたかれた様な衝撃が啓介を襲った。

「辞める？ 何を？」

「……学校」

「や、辞めるってどうして」

「おばあちゃんの体調が良くないんだ。だからお父さんたちの所へ一緒に来なさいって。ごめんね、急にこんな話して」

「だからってそんな……」

そういえば沙耶は祖母と二人暮らしと聞いていた。だが一度も顔を見たことはない。両親もそうだ。

言われて気付いたが啓介は沙耶の家庭の事を全く知らないのだ。

両親が海外に行くので沙耶だけは祖母のいる熊本へやって来たという事は小学生の時に聞いた様な気がする。

しかしそれ以外の事は知らなかったし、沙耶も家の事をあまり話したがらなかった記憶がある。

「本当はね、大学までは日本にいなさいってお父さんもお母さんも言ってたんだけど。体調の悪いおばあちゃんを私一人でつていうのも無理だから。それなら一緒に向こうに来なさいって」

「向こうって遠いの？」

「今はヨーロッパにいたい」

「ヨーロッパ……」

啓介にとってはヨーロッパだろうがアメリカだろうがそんなことはどうでもよかった。

沙耶の姿を見る事が出来なくなるという現実があまりにもショックだった。ようやく明日から昔の様に話しかける事が出来ると思っ

た矢先の沙耶の告白だった。

「それで……いつ？」

「来週の日曜日。もう学校には届け出したんだ。ごめんね、久しぶりに話できたのにこんな事で」

それからしばらく啓介は黙り込んでしまった。

幸せな時間からまるでジェットコースターの様に急降下してしまったせいで、横にいる沙耶の存在すら一瞬忘れてしまっていた。

二人の間に気まずい沈黙が続いた。

「そろそろ帰ろうか」

啓介が小さな声で囁いた。時間はすでに十一時をまわっていた。

「そうだね。遅くなっちゃった」

沙耶は出来るだけ明るく振舞おうとしている様だった。

先に沙耶がベンチから立ち上がった。

気落ちしている啓介もそれにならってゆっくりと腰を上げようとした、その時――。

啓介の唇に柔らかい、甘い香りのする何かが飛び込んできた。

啓介は何が起きたのか混乱した。

沙耶の唇が啓介のそれと重なっているのだ。それはこれまで感じた事のない感触だった。

「じゃ、また明日学校で。おやすみ啓ちゃん」

そう言う又何事もなかった様に沙耶は暗闇の中を駆けていた。

啓介はしばらくの間呆然とそこに立ち尽くしていた。

「また明日……」

最早声にならない。

啓介はいつまでも沙耶が走って行った先をただただ見つめ続けた。

通達

その日も青木は木下と午後から半日かけて、江津湖付近の聞き込みをしていた。

今日で二日目だがこれといった有力な情報は出てこない。

定期的に湖でジョギングする人や釣りをしている人もいたが事件があった日に、これといった怪しい者を見かけたという話も聞こえてこない。

陽も落ちて街灯に明かりが灯り始めている。

「暗くなってきましたねえ、先輩。そろそろ……」

「そうだな」

青木は半ば意地になっていた。意地でもこの案件の手掛かりを手に入れたい、そう考えている。

なにも手柄をあげたいという欲からではない。不自然とも言える情報の規制をしてきた上層部に対する反発心から来る意地である。

一刻も早く犯人を割り出し、そいつを署長に突き出して、全ての事について説明させてやる、そういう気持ちでいた。

「どうします。明日もまた？」

「当然だろ。当たり前前の事聞くんじゃねえ」

「だって先輩、意地になつてるでしょ」

木下は全てお見通しである。

「意地つてなんだよ。それが仕事だろバカ野郎。別に付き合ってくれって頼んじやいねえぞ俺は」

考えを見透かされ青木は声を荒げた。

「おっかないなあ、もう。青木さんが行くところに僕あついて行きますとも。それに僕も行きたいところあるんでね」

「なんだよ、行きたいとこつてのは」

「あっち、東側の湖が大きく広がってる所ですよ。湖沿いに小さい小屋があるでしょ。ホームレスが住んでるみたいなんですけど今日

は留守みたいなんですよ。事件があつた場所とはま逆ですけど何か知らないかなと思って」

確かに遊歩道から降りて行つた湖沿いに小さな小屋があつた。小屋といつてもベニヤとブルーシートで作られた粗末な作りのものである。

ここで暮らしているホームレスなら何かを見ている可能性はあるだろう。

「それなら明日行つてみるか」

その時青木の携帯電話の着信音が鳴つた。

番号表示は課長の内川だつた。

「もしもし……」

「青木か。今どこだ」

「まだ木下と江津湖にいますが……」

「ああ、そうか。お疲れさん。どうだ久しぶりに二人で飲みにも行かんか」

珍しく内川の誘いだ。青木はここ数年酒を断っているからこの飲みというのは酒の誘いというわけではない。

「珍しいですね、課長からお誘いなんて」

「まあな。少し話したい事もあるんだ。俺はママの店にいるから。場所は覚えてるな？」

青木がまだ刑事になりたての頃、内川によく連れて行つてもらつた店である。酒を断つて以来青木は一度も顔を出していない。

「わかりました。向かいます」

そついつと通話を切つた。木下は横で聞き耳を立てていた。

「呼び出しみたいですな」

「まあな。ちようどいい。この案件の事、ちよつと探ってくる。悪いが車、署に返しといてくれ」

木下は了解しました、とわざと大げさに敬礼しておどけて見せた。木下を署に帰し、青木はタクシーに乗り内川の待つ熊本市街にあるその店へと向かつた。

二年前、青木は毎日浴びるように酒を飲んでいた。

事件の捜査に追われ、署に帰って来ては報告書作り、家に帰ると疲れから妻に当たる事もあった。そしていつの間にか酒の量も増えていき、家にも帰らず飲み屋で朝を迎え、そのまま出勤というパターンになっていった。

非番の日は朝起きてきては酒を飲み、ふらりとパチンコ屋に出て行きそのままネオン街へと消えて行く。

そんな青木に愛想を尽かし妻は三歳になる娘を連れ、実家のある阿蘇へ出て行ってしまった。

そこから酒びたりの生活に拍車がかかった青木は手に負えなかった。

もともと腕っ節に自信がある青木は暴れ出すと止まらない。入った飲み屋で少しでも気に入らない者がいれば誰かれ構わず突っかっていく。新聞沙汰にならなかったのが不思議なくらい暴れていた。この頃、青木はすでに警察を辞める覚悟でいた。妻も子供も出て行き、失うものなど何もないと自暴自棄になっていた。

余りに見かねた内川はついに行動を起こす。

内川はこの青木を捜査一課に配属されて以来、可愛がっていた。その刑事としての青木に期待をしていたのだ。

青木が非番の日にアパートへと押しかけたのだ。わざわざ鍵を青木の妻のいる阿蘇まで取りに行き、インターホンを押すでもなく突然部屋に押し入った。

案の定、青木は昼間っからビールを四、五本空けて大いびきかいていた。

内川は何も言わず青木の体を引き起こしたかと思うと、いきなりその頬を殴りつけたのだ。

青木は当然何事かと目を覚まし、目の前に立つ内川を睨みつけた。長年刑事をしてきた内川も負けてはいない。そんな若造の睨みなど意に介さない。

上司だという事も忘れて思わず飛びかかろうとしたが、内川の醸し出す雰囲気には吞まれてしまつて動けなくなつてしまつていた。

そして一言も発しないまま出て行く内川の後ろ姿をただ黙つて見ているだけだつた。

その日から青木は酒を断ち、まるで牙を抜かれた獣の様に丸くなつていった。

今でもあの時の痛みを青木は忘れてはいないし、いつか妻も子供も戻ってきてくれると淡い期待を抱いて仕事を続けている。

青木を乗せたタクシーはたくさんの方が行き交う賑やかな街中へと入って行つた。

青木はタクシーを降りた。

平日の夜という事もあって街中の飲み屋も休日前の様な賑やかさこそないが、人出はそこそこだった。

内川の行きつけの店は雑居ビルの五階にあつて、ママが一人で切り盛りしている。

一階にある居酒屋では大学生や会社員たちで賑わっている。

そんな光景を尻目に青木はエレベーターのボタンを押した。

（ここに来るのは何年振りだろう）

ゆっくりとエレベーターのドアが開いた。

ふうつと一息吐いて中に入って五のボタンを押す。

ぶうんと低い音を立てながら四角い箱は上へと向かって動き出した。

五階にある店の前に着くと青木は少し緊張した。なにしろ七年振りにこの店に来るのだ。

昔の青木は酔っ払って随分とママに迷惑をかけたし、そんな性質の悪い客だったにもかかわらず、ママは青木に良くしてくれたのだ。（どんな顔をして入りやいいんだ）

内川の行きつけの店の名前は「R」。いわゆるスナックだが、店の名前の由来は知らない。

基本ママがいつも一人で切り盛りしているが、忙しくなるとたまに知り合いの店から女の子がヘルプに来てくれる。

青木はゆっくりと赤茶色のした扉を開いた。

「いらっしやい。青木ちゃん久しぶりじゃないの」

扉を開くとすぐママの高い声が響いた。

「ご無沙汰してます」

入り口で青木が一礼する。

店内には二つのテーブルとそれを囲むように二つのL型をしたソファがあり、それぞれに小さな丸い椅子が添えてある。そしてカウンターの六席程の小さな店だ。

まだ時間が早いせいか客は誰もいない。

内川はカウンターに座っていた。

「おう、お疲れさん。まあ座れよ」

「お疲れ様です」

内川に促され青木は内川の隣の席に着いた。

「ほんと久しぶりねー青木ちゃん。たまには顔出してよ、淋しいじゃない」

「すいません。酒止めたんでなかなか……」

「内川さんから噂は聞いてたわよ。がんばってるみたいね」

「今日お前が来るって聞いてママもえらい喜んでたんだぞ。久しぶりに会えるって」

「色々ご迷惑おかけして……」

久しぶりに来るこの店は青木にはどうも落ち着かなかった。

「ウーロン茶でいいかしら」

そういうとママはグラスの準備を始めた。

ママは年にしてもう四十後半だろうか。青木が通っていた頃に子供が小学校の上級生といていたからもう高校生くらいだろうか。

昔と変わらず相変わらず人懐っこい顔をしている。当時はここにくると実家に帰った様にほっとする居心地のいい場所だった。

「悪いな、急に呼び出して」

「いえ、ちょうど帰る頃だったんで。どうしたんです？ 課長が呼び出すなんて珍しい」

「お前に話したい事があってな。二つあるんだがどっちから話そうか……」

内川はそう言うと言いかけのビールに口をつけた。

（急に呼び出すくらいだ、どうせろくな話じゃないんだろうな）

ママは青木の前にグラスを置くと、ずっとカウンターから

離れた。

仕事の話などの雰囲気を観察すると何も言わずに距離を置いてくれるこいつたママの気遣いも内川や青木がこの店を気に入っている理由なのかもしれない。

「まあそう構えるな。いい話と……まあもう一つは悪い話になるか」
ぐいと残りのビールを飲み干す。どうもすでに内川はほろ酔い気味のようなのだ。

「よし、まずはいい話だ。春菜ちゃん帰って来る気がするらしいぞ。よかったな」

「え？」

青木は面喰った。

「だから、嫁と子供が帰って来たいそうだ。お前も随分がんばったからな。そろそろ戻っても大丈夫だろう。そうだろう？」

「春菜が……ですか」

「そうだ。加奈ちゃんもパパに会いたいらしいぞ。もう長い事会ってないだろう。もう小学校三年生になるか」

春菜と加奈は青木の妻と子供の名前である。二人が出て行ってもう七年も会っていない。

春菜の実家に住んでいるが青木は生活費は送り続けていた。加奈の誕生日にもプレゼントを送っていたが一度も会っていない。

青木は強情な性格だから自分から会いたいとは決して言わなかった。

自分に非があるのは分っていたし、春菜の口から離婚という単語を言っただけだったからいつ戻って来てくれると信じていた。

「あいつと話したんですか」

「一応俺が仲人したからな。お前が荒れている頃からちよくちよく相談は受けていたんだよ。お前には悪いがたまに近況を報告したりもな。強く口止めされてたよ」

「……すいません。ご迷惑を」

「迷惑なもんか。春菜ちゃんも出て行った事はずつと悪かったと思

つてたんだよ。何回も戻ろうと相談された。だが俺が止めたんだ、まだ早いって」

青木の目は少し潤んでいた。

昔を思い出すたびに妻と娘には申し訳ない事をしたとずっと後悔していた。

その後悔が刑事という仕事の原動力となっていたのだ。

この場に木下がいたなら今のこの青木を見たらどんなに驚くだろう。

「よかったね青木ちゃん」

いつの間にか戻っていたママがなぜかボロボロ泣いている。

「ママもお前の事心配してたからな」

内川は新しく出されたビールをうまそうに飲んだ。

青木は椅子から降り深く頭を下げた。

「いろいろとお世話になりました」

「もう大丈夫だよな、青木」

「はい。もう同じ過ちは犯しません」

「近々二人は帰ってくるそうだから仲良くな。加奈ちゃんも大きくなっただろうなあ……。さあ悪いが問題はもう一つの話だ」

内川のこれまではろ酔い気味だった顔が一変して刑事の顔になった。

青木はそれを見てこっちの話はただ事じゃないなと身構えた。

通達 / 3

「明日から少し休め」

「は？」

内川の言葉に青木は再び面喰った。

「休めつて……俺はまだ今の事件を……」

「春菜ちゃん達も帰って来る事だしゆくりしたらどうだ。男一人だったあのアパートも掃除せにやいかんだろう」

「しかし……」

「青木、これは命令だ」

内川の表情が一層険しくなった。

それを見て青木は全てを悟った。

「……事件から手を引け、と？」

「上からのお達しだよ。もうこの事件には関わらんでいいそうだ」

内川は視線を外し、ビールを口に含んだ。

「お前と木下の有給の手続きは俺が済ませた。三日間ゆくりしろ」
収まらないのは青木だ。

「ちよつと待つてください。まだ俺達は手掛かり一つ掴んじやいない。それにこの案件を持ってきたのは上でしょう？ それがたった数日で手を引けと言われて、はいそうですかと黙って引ける訳がない。理由を教えてください」

苛立つて思わず立ち上がった。

ママはちよつと前に買い出しに行つてくると言つて出て行つて今、店には青木と内川の二人きりだ。

「我々は組織の人間だ。たとえ不服でも上からの命令には逆らえん。それでは納得できんか、青木」

「できません」

「だよなあ。お前がそんな聞きわけよかったらこっちがびっくりするよ。でもなあ青木、今回の案件は少しばかり毛色が違うんだよ」

苦笑いをしながらつまみに出されていたピーナッツを口に入れて内川が続ける。

「この案件、お前どう思うんだ？」

「初めっから疑問だらけです。署長に呼び出された事も、捜査官に対する情報を極端に制限する事も。それにあの署長室にいたあの男は誰なんですか。課長は全てご存じなんですか？」

「ふむ……」

内川は空になったグラスを手にとって手持無沙汰に振っている。おかわりが欲しいんだろうがママがまだ帰ってこないからどうにもならない様だ。

「昔なあ、俺も言われた事があるんだよ」

「え？」

「この世界にはなあ、知らない方がいい事もあるんだってな」

「知らない方がいい？　どういう意味です？」

「そのままの意味さ。知らないまま生きて行く方がいい事もあるんだよ。お前はまだ若いし小さな子供だっている。このまま黙って納得してくれねえか」

「……課長も俺の性格は分ってるでしょうに」

「ふん。そうだな……」

内川は思わず笑ってしまった。

熊本には肥後もつこすという言葉がある。簡単に言えば頑固者という意味だ。青木はまさにそれだった。

内川もこの男の性格は充分承知している。

「口外はしません」

「畜生。酒が足りん。ママのやつ、遅いな」

内川はまだ話あぐねている様子だ。青木もいい加減イライラして来た。どうしても今ここで聞いておかなくてはならない。

「内さん！」

「わかったよ。……お前、久しぶりに内さんなんて呼びやがったな」
まだ青木が一課に配属されてすぐは内川の事をこう呼んでいた。

課長に昇進してから控えていたのだが。

「まずお前らの仕事は終わったんだよ」

「終わった？」

「終わったんだ。お前らの仕事は江津湖内での捜査だけだんだ。犯人逮捕じゃあない」

青木は黙って内川の話聞いている。質問は後からまとめてぶつけるつもりらしい。

「お前らが聞き込みをしたこの何日間は意味が無かったわけじゃない。ヤツ……まあ犯人だが、ヤツは我々が事件の情報を外部に漏らさない事を分つてやがる。だから同じ場所で犯行を繰り返したわけだ。だが内々に警察が捜査をしてるとなれば……」

「動きにくくなる」

「そういうことだ。湖の常連なんかは刑事がうるついてるんだ、何か事件でもあったのかと思うわな。そうすりゃ誰からともなく噂になる。どうも湖内は物騒なんじゃないのか、ってな。それが今回のお前らの役割だったわけだ」

「つまり俺と木下はは次の犯行抑止の為の罠だったと」

「不本意かも知れんがな」

なるほど、事件から手を引けという理由は理解した。自分たちがいいように利用されたのは不愉快だが、事件が起きないに越したことはない。だが青木にはまだ疑問が残っている。

「しかしこれで犯人が犯行を行わないという保証はないでしょう。」

「犯行日時も不規則だし……もしかしてもう容疑者に目星が？」

「かもな。だが俺は何も聞いちゃいないよ。ただ捜査を打ち切れて上から言われて、それをお前に伝えたただけだ」

確かに毎日私服警官が湖内をうろついていると噂になったなら次の犯行もしにくいだろう。

「内さん、根本的な事を聞きます。今回の事件、そんなに重大な何かがあるんですか。被害もそんなに大きくないし、人が殺されたわけでもない。いっちゃあ悪いが痴漢が少し度が過ぎた様な事件だ。」

「一体何をそんなに……」

「そこまで言いかけて青木はハツとした。」

「ヤツは警察が情報を漏らさないのを知っていた？」

内川は気付いたかというような顔をした。それはまるで青木を試したかのようだった。

「なんで犯人がそんな事分るんです？ 事件の情報をマスコミに公表しないとわかってるのならヤツは多少動きやすい。まるでもっと事件を起こせと言ってるようなもんだ。最悪、犯行がエスカレートして殺人——」

「だからそうなる前にお前らに動いてもらったんだ。後は別の部署の仕事なんだよ」

「別の……部署？」

「そういうことだ」

「そんな、初耳だ。警察以外に犯人を確保する部署が日本にあると？ FBIでも出てきますか」

青木はバカらしくなって笑ってしまった。

「あの署長室にいた偉そうなタバコの男もその秘密の部署の人間ってことですかい」

「まあそんなとこだ。納得しただろ？」

「出来るわけがない。俺と木下はこのクソ暑い中何日間も湖を歩き回ったんだ。それでおいしいところはその秘密の部署が持つて行く？」

「冗談じゃない」

立ちあがって声を荒げる青木を内川は顔色を変えることなく見ている。

「まあ落ちつけよ。歩き回るのがお前らの仕事だろ。珍しい事じゃない。さっきも言ったが今回は毛色が違うんだよ」

まだ収まらない青木は後ろにあるソファーにドカッと腰を下ろした。

「いいか青木。ここで俺が話した事は絶対によそで口にするな。木下にもだ。今日捜査終了の話をした時、あいつも不服そうだったん

でな」

そりゃそうだ、と青木はふてくされている。

「俺はお前を署の中でも特に信用してるから話すんだ。いいからこっち来て座れ」

そう言つと内川はカウンターの椅子を指さした。

青木はそう言われて渋々隣に来て座った。

「青木よ、知りすぎるつても中々大変なもんだ。知っちまうところからの人生、人を信用できなくなるかも知れん。その覚悟がお前にあるか」

「刑事は人を疑うのが仕事つて内さん、昔言つてたじゃないすか」

「まあ、そうなんだが……」

その時、ガチャリと店の扉が開いた。

ママが買い物から帰つて来たのだ。時間かかったとビニール袋を両手に持つて二人に謝っている。

そんなママの声を察知したからなのか、内川は小さな声で青木にこう囁いた。

「人を食料にする連中がいたとしたら、お前どう思う？」

落ち着かない日

男は渴いていた。

（今はまずい。奴らが動いている……。だが、この渴きは我慢できない。よりによって今やつてくるとは……）

暗い部屋で横になり天井を見つめている。

男の中に渦巻く欲、普段は我慢し、抑え込んでいるその欲が突然暴走を始めようとしていた。

（……どうするか）

眠りに就こうとするがその欲によって余計に目が冴えてくる。

これまでも渴きは突然やってきた。

だがどうにか自分を誤魔化してきたし、最悪の場合は非常用の物も身近に保管してあった。

ちょうどそのストックが運悪く底をついていたのだ。

（よりによってタイミングが悪い。早く仕入れなくてはと思っていた所なのに……。どうするか）

頭の中で繰り返す。

どうする

どうする

どうする……。

すつと目を閉じ、この渴きを解消する方法を考える。

思いつくのはただ一つ。

（あれを利用するか……）

布団から抜け出し、携帯電話を手取る。そして誰かへとメールを送った。

（目立つ行為は慎まないといけないが仕方ない。明日、この渴きを少しでも満たす事にしよう）

安心した男は目を閉じ、ようやく眠りに着いた。

明日摂れる食事に胸を躍らせながら……。

啓介は朝から何も手に着かなかった。正確に言えば昨夜からと言っている。

沙耶の思わぬ行動で、啓介はファーストキスというものを経験したのだ。

テレビや漫画でイチゴとかレモンだとかの味がするとか言っているがそんな物を味わう余裕など無かった。

それは一瞬の出来事で、微かに沙耶の洗い髪のいい香りが啓介の鼻先をくすぐっただけだった。

あのくちづけの後、しばらく啓介は公園に立ち尽くしていた。

家に帰ったのは日付が変わるギリギリのところで、心配した母親に酷く叱られた。

だがそんな説教など左耳から右耳へと抜けて行くだけで、啓介の頭には全く届いていなかったのだ。

それだけあの初体験は啓介にとって生涯忘れる事が無い出来事だろう。

もう沙耶が竹内と付き合っているという噂話などどうでもよくなくなっていた。

あのくちづけが答えなのだ、噂は噂にしか過ぎないと勝手に解釈してしまっていた。

朝、学校に着いても啓介は落ち着かない。沙耶の顔をまともに見れない様な気がするのだ。

A組の教室の前を通る時なるべく室内を見ない様に通った。その動きはどこかにぎこちない。

「馬原君、おはよう」

振り向くと瓜生がいた。

「昨日は悪かったね。妙な事に巻き込んで。お腹はまだ痛むかい」
言われて思い出したが、瓜生と一緒に不良連中とからまれたのも

昨日の事だったのだ。

昨日は色々な事が起こりすぎていた。

「いい初体験だったね、昨日は。いやあめでたい日だった。なあ馬原君。ははは」

笑いながら瓜生はC組の教室へ入って行った。昨日の事などなんとも思っていない様子だ。

啓介にはあのまま不良連中が黙って引き下がるとは思えないのだ。それに瓜生の初体験という言葉に啓介はドキツとした。殴られるという初体験以上の初体験を済ませたからだ。

A組の方を見て、一人で照れくさくなって慌てて自分のB組へ入って行った。

教室へ入るなりクラスメイトの岩崎が寄って来た。

「啓介、お前大丈夫かよ」

「え？ 何がだい」

「あの転校生、瓜生だよ」

岩崎は妙に深刻な顔である。

「瓜生君？ 彼がどうしたんだい」

「昨日、お前も一緒だったんだろ、あいつと」

「あ、ああ……。たまたま瓜生君と話してたんだよ。そしたら……」

「あいつ、十五人全員ボコボコにしたんだろ？ 学校中噂だぜ」

「はあ？」

啓介は驚いて間拔けな声を出した。

啓介の知る限り瓜生が殴ったのは二人だ。二人をのした後、瓜生と自分はそそくさと公園を後にしたはずだ。

「番長の大山なんかひどいケガだったらしいじゃないか。どんな事したんだアイツ？」

どんなものにも腹に一発入ただけだ。啓介は目の前でそれを見ているし、そんな大ケガする様な事はしていない。

「まさかお前も瓜生と一緒に……んなわけないか」

「ちよ、ちよつと待って。十五人って全員殴られたってのか？」

「公園はちよつとした騒ぎだったらしいぜ。近所の人が学校に連絡したってさ。公園で生徒が乱闘してケガしてるって。警察まで来たとか……」

啓介は言葉が出ない。そんなはずはないのだ。

確かに瓜生は暴力を振るつたが、一人は啓介を守るためだし、もう一人はあの大人数を黙らせるための最低限の行為だった。

おかげでそこにいた不良たちは瓜生に対して戦意を失ったし、それ以上の暴力を振るう理由は無かったはずだ。

「それはないよ。彼はそんな事してない。僕はずっと横にいたんだ

」

そういえば——あのあと学校で瓜生は用事があるとかで教室に戻ると言ってそこで別れた。

（まさかあの後……）

だがそこで啓介を帰した後、わざわざ公園に戻る必要があるのか。しかもご丁寧に全員をボコボコにする理由が啓介には理解できない。始業のチャイムが鳴りだしたがそんな事構わず、教室を飛び出した。

転校してきたばかりの瓜生と話したのは昨日が初めてだったが、彼がそこまでの不良たちを痛めつけるとはとも思えなかった。

昨日教室の戻ると言いながら本当は公園に戻ったのだろうか。

啓介は勢いよく組へ飛び込んだ。

驚いた生徒たちが一斉に啓介の方を向く。

普段は人に注目されるのを嫌う啓介だが今はそんなことは頭にな

い。

室内を見回すが瓜生の姿を見つけれない。

「う、瓜生君は？」

近くにいた男子生徒に尋ねる。

「あれえ。さっきまでいたと思ったんだけど……」

啓介はそれを聞いてまた外へ飛び出した。

携帯電話を取り出しダイヤルを回す。と、同時に学校の正門へと

走り出した。

「おい馬原あ、チャイム鳴ったぞ」

すれ違う教師に目もくれず階段を降りる。

耳には携帯電話の電源が入っていないというアナウンスだけが繰り返して流れていた。

落ち着かない日 / 2

昼休み、啓介は食事もとらずに自分の席に座ったまま考え込んでいた。

朝は結局、瓜生を見つけることはできなかった。

電話をかけても電源が入っていない状態だし、メールを送っても何も反応が無い。

それどころか生徒指導の教師たちに呼び出され、昨日の出来事を根掘り葉掘り聞かれたのだ。

本当に瓜生一人でやったのかだの、お前は手を出してないのかだの、何でお前まであそこにいたのかと聞いてくる。

それはこっちの方が聞きたいと声を上げたかったが、啓介はありのままの事を話した。

どうやらあそこにいた不良十五人が全員打ちのめされた噂は本当らしかった。

瓜生は朝からその事が噂になっているのを知り、暴行の事情を問われるのを嫌って下校したのではないかと言うのが教師たちの見解だった。

一方、啓介の方は大人しいこいつが、瓜生と一緒になって暴行したとは考えにくいだろうと早々にクラスに返されたのだった。

「啓介、飯食べないのか」

心配そうに岩崎が寄って来た。

「ん、ああ……」

「どうしたんだよ。朝からその調子じゃないか。先生たちに呼び出し喰らったのがそんなにショックなのかよ」

別呼び出されるのは何ともない。別に自分悪さをした訳じゃないのだ。

啓介は早く瓜生に会って確認したいのだ。本当に昨日別れた後、あの連中に暴行を働いたのかを。

「ああ、そついやあもつちゃん、今日休みみたいだなあ」

「え？」

「坂本だよ。あの噂好きのもつちゃんが見えないんだぜ？ アイツの好きそうなニュースなのに、もつたいない」

「そついえば……じゃあこの噂つてどこから？」

「知るかよ。朝来たらあちこちで噂になってたぜ。お前と瓜生が公園に連れてかれるの見たつて人がいたらしいつて。まあ放課後だから別におかしくもないけどさ」

啓介は噂の出所が妙に気になった。

噂好きの坂本がいらないのがなぜか引かつたのだ。

「そついやあ坂本君も昔不良連中に囲まれたんだつたね。彼の気持ちがあつたよ。僕も生きた心地しがつたもんね」

以前、坂本がその口の軽さと噂好きが災いして不良に囲まれた話を思い出した。

「殴られるとあんなに痛いんだねえ」

笑いながら腹をさする。

と、岩崎の表情が曇つてゐる。

「ん？ どうした、岩崎」

「もつちゃんのあれなあ、まだ続きが……」

その時啓介のポケットが震えた。携帯電話のバイブモードだ。

（瓜生君か！）

慌ててポケットから電話を取り出し、画面を確認する。

メールが一件。

開くと瓜生からではなかつた。が、啓介の胸は高鳴つた。

それは沙耶からだつた。

話の途中だつた岩崎は啓介の表情が明るくなつたのを見逃さない。

「女だな」

啓介はニヤリとしたが、多くは語らない。

メールを開くと――

今日の九時、学校で会わない？

啓介の鼓動は早くなっている。

（またデートの誘いだ。でもなんでわざわざ学校なんだ？）

疑問にも感じたが、それ以上にまた沙耶と二人きりになれるうれしさの方が上回った。

昨日キスまでしてしまった仲なのだ、無理もない。

（沙耶はどんな顔してこんなメールしてるんだろう）

不思議なもので今朝はあんなにも沙耶と顔を合わせるのが照れくさかったのに今は沙耶の顔を無性に見たくなっている。

まだ話の途中だった岩崎を尻目に啓介はすたこら教室を出ていった。

廊下の冷水器で喉の渴きを潤すと、A組を恐る恐る覗いてみた。教室は昼休みの賑わいをみせている。

隅々まで目を凝らすと沙耶の姿は無い。

（どこかに行ってるのかな）

校内のどこかに沙耶はいるのだろうか、そう思い入り口の傍で会話している女生徒に思い切って話しかけた。

「あの……お、大久保さん、は？」

啓介は滅多に女子に話しかける事がないからどこかきこちない。声を掛けられた女生徒もどこか怪訝な顔をして啓介を見た。

「ああ、大久保さん？ 今日とは来てないんじゃないかなあ。そういえば朝から見てないわ」

「え？」

（沙耶も休み？）

啓介は妙な胸騒ぎがした。

（どうしたんだろう。休んでる日の夜にわざわざ会おうだなんて…

…）

朝からいなくなった瓜生、学校を休んでいる坂本と沙耶。

これは偶然なのだろうか。

廊下に出てふと窓に目をやると生物教師の竹本がいた。

自然と啓介は竹本の動きを目で追っていた。

追っていると竹本はバッグ片手に校門の外へと出て行く。

（どこ行くんだ、竹本の奴）

これも偶然なのだろうか、そう啓介は頭の中で繰り返していた。

第五の事件

青木陽一は朝から呆けていた。

ずっと仕事一筋で気を張り続けていたから急に休暇を取れと言われても何をすればいいのかわからない。

たいした趣味もないし、かといって家の事をまめにするタイプでもない。

朝起きて小一時間布団の上に座ってボーっとしていた。

（春菜と加奈が帰って来る……か）

正直、青木は喜び半分不安半分だった。

もちろん成長した我が子に会えるのはうれしいし、離婚もせず待っていてくれた妻に対しても感謝している。

その一方で、昔の自分の様にいつまた荒れ出してしまわないかという不安に苛まれているのだ。

（もう……大丈夫だよな）

自分に改めて問い質す。

以前より丸くなったとはいえ、荒っぽいのは変わらない。

ただ酒で暴れなくなっただけの様に自分では感じていた。

署内でも特に気性が荒いと有名な青木も人の子なのだろう、やはり家族というものが必要なのだ。

今もこうして普段は荒々しい性格の青木に似合わずえらく一人でしんみりしている。

三人での暮らしがまた再び始まるかと思うとなんだかこそばゆくもあった。

そして青木の思考は昨晚、内川が呟いた意味深な言葉へと移った。その辺りの切り替えは早い。

家庭人青木から刑事青木へと素早くシフトする。

「人を食料にする連中がいたとしたら、お前どう思う？」

(どう意味だよ、人を食料にするって)

結局、内川はその言葉を呟くと、今日は久しぶりに青木と飲んでだいが酔ったと千鳥足で帰って行った。ちゃんと休暇とれよと念を押して。

残された青木はその後ママと二人でしばらく昔話に花を咲かせて、店が他の客で賑わいだした所で店を後にした。

今思えば内川も酔った勢いとはいえ、口が滑ったのだろう。あれだけ情報を隠す様な事件だから、捜査一課の課長がそう簡単に外に漏らす様な事は出来ないはずだ。

だからといって三日も休暇取れと言っておきながら、奇妙な謎だけを残して行かれたんではたまったもんじゃない。

(人間を食料にする……)

想像しただけでもゾツとした。

人間を食べるといふ事はその対象を殺すという事だろう。

ならば今回の事件もエスカレートしていったとすれば、殺人まで行き着くのだろうか。

昔、世界中の様々な事件資料を読んでいた時に目にした事がある言葉――

「カニバリズム」

いわゆる食人、人肉嗜食という意味である。

そんなものは当然、社会的に許される行為では無いし、過去にそうだった事件が世界でも起こっているのも事実である。

だいたい殺人を犯す好意そのものが反社会的であるにもかかわらず、尚且つそれを食すというおよそ人間とは思えない行動を取った事件があつたのである。

犯人にとって“食べる”事は自分の性的欲求を満たす行為なの

だ。

実際日本でも世界大戦中に戦地で、飢えによって食人事件が起ったというのを青木も耳にした事がある。

（そんなものは映画や小説の中だけで十分だ。それに課長は連中、と言っていた。そんな異常な奴が何人もいやがるのか……？）

青木は布団に寝転んでこれまでの事件を振り返った。

（これまで関係性があると思われる事件は四件。どれも多少傷を負わせているものの食べるという行為には遠い気がするな）

寝転がって天井を見つめたまま頭を搔いた。

最初の三件は爪で傷を負わせただけだった。見方によっては傷つける事自体が目的の様に思える。とても食べる事が目的の様には見えない。

ただ、四件目は傷付けただけでなく、被害者を茂みに連れ込もうとして、さらに噛みついてきた。

（“食べるため”なのか……）

しかし暗いとはいえあんな住宅地もすぐそばにある様な場所ですんな大胆な行為をするだろうか。

（人を食おうと思う様な異常な野郎だ。こっちの常識が通用かどうかも怪しいもんだ。仮に、もしそんな連中が世の中にゴロゴロいるならばもつと世界が騒ぎたてるはずだ。

現代社会はインターネットやら携帯電話やらでそう簡単に情報の隠蔽できるほど甘くないだろう。それに生きて行くうえで必要な食料が人間なら、行方不明者の搜索依頼なんかもつと跳ね上がるんじゃないか）

青木は力ニバリズムではない、他の何かがある様な気がしてきた。考えているうちに青木はソワソワし出した。休んでいてもあの事件の事が頭から離れない。

だからといってこれ以上捜査のしようがないのだ。

考えも行き詰まった所で寝転んだまま、うんと伸びをした。そこ

に青木の携帯電話が激しく鳴った。

（課長め、ちゃんと休んでるか確かめたいんだな）

電話を開くと相手は課長の内川ではなく、同僚の木下だった。

（こいつ、有給もらって喜んでんじゃねえのか）

無視しようか迷ったがとりあえず電話に出る。

「何だよ。暇なのか」

「出てすぐこれだもんなあ。暇なのはそっちでしょ、青木さん」

木下も青木の扱いにだいぶ慣れてきている。

「うるせえ。これでこっちはもやる事はたくさんあるんだよ。てめえは休めて喜んでんじゃねえのか」

「失礼だなあ。僕はこれでも頭に来てるんですよ。せっかくあんだけ歩き回って聞き込みしたのに理由もなく事件から外れてゆっくり休めとか言われて」

内川は木下には何も話していないようだ。

それよりも木下も青木と同様、事件から外された事に腹を立てている事が意外だった。

「まさか青木さん、課長に言われてハイ、そうですかって簡単に引き下がったんですか？」

「簡単につてなんだよ。しょうがねえだろ、上から言われたんなら

……」

昨日の内川から聞いた話を勝手に木下にするわけにはいかないと言青木は考えた。

「シヨックだなあ。昔の青木さんならそんな上からの命令、関係無いつて強引に——」

「うるせえな。それより何の用だよ。まさかそんな事愚痴るために電話してきたんじゃねえだろうな？」

「まあ、それもありますけど……。青木さん、今から江津湖に行ってみませんか？」

「なに？」

木下からの提案に青木は思わず聞き返した。

「だから江津湖にですよ」

「江津湖って……もう捜査は打ちきりだろうがよ。行ってどうするんだ」

「一課の青木も丸くなりましたねえ」

「てめえ——」

「まあ聞いてくださいよ。昨日帰り際話したでしょ、ホームレスの事」

「ホームレス？」

青木は思い出した。木下が話を聞こうとしていた湖の際に住むホームレスがいた。二人が聞き込みをしていた時には姿は見えなかったのだ。

「さつき気晴らしに湖の方へドライブして来たんですよ。そしたらあの小屋にいたんですよ、ホームレスの親父」

「さつきって……お前行ってきたのかよ、江津湖」

「非番ですからね。どこ行っても構わないでしょ」

「じゃあなんでさつき話聞いてこなかったんだよ。またいなくなるかもしれないじゃねえか」

「だって若造の僕が一人で行くよりほら、強面の人がいた方が……」
青木は思わず笑ってしまった。

どうやら青木と付き合っているうちに、木下もちょっとした暴走癖が移ってしまったらしい。

「わかったよ。俺も一緒に行こう」

「よかった。さすが青木さん。でもあくまでもプライベートで湖に散歩しに行くんですよ？　そこでたまたまホームレスの親父とはなし——」

「言われなくったって分ってるよ。せつかくの休みになんでてめえとデートなんかしなくちゃなんねえんだ」

木下は笑いながらボート小屋の駐車場で、と言って電話を切った。青木は木下も同じ様に考えていた事がうれしくて思わず笑いが込み上げてきた。

第五の事件 / 2

その日は厚い雲が広がるどんよりとした空模様で、強い日差しはないものの、湿気の多い蒸し暑い日だった。

木下の電話の後、小一時間ほど準備して青木は江津湖へと車を走らせていた。

（まさか木下のヤツがな……）

ハンドルを握りながら青木はほくそ笑んでいた。

木下に急かされる日が来るとは思わなかったのだ。

青木も布団の中で事件の事ばかり考えていたのは確かだが、現場に行ってみようとは考えなかった。

上からの命令に反発するのも日常茶飯事だった青木が後輩の木下に尻を叩かれたのだ。

（俺も年を取ったのか）

もともと命令されたからと言ってこの事件から手を引くほど青木も大人しい訳じゃない。

木下も同じことを考えていたとあつては命令などクソ喰らえになつてしまった。

（始末書でもなんでも書いてやるさ）

こうなつたら止まらない。

正午を過ぎた頃、青木は江津湖のボート小屋がある駐車場に入つた。

平日の午後だが駐車してある車が多い。

外回りの営業マンなどが木陰に車を停めて小休止している様だ。

ボート小屋では老人たちが談笑し、その横で釣り糸を垂らす人もいる。

そんな光景をよそに青木は木下の姿を探した。

彼の車は停めてあるが姿が見えない。

「先に行きやがったかな」

青木はふらつと、中島に続く橋へと歩き出した。
そして橋の上で立ち止まり湖を見渡した。

（このどこかに人間を食料にする野郎が潜んでやがるのか……）
この平和を絵に描いた様な日常に、悪が潜んでいるかと思うと青木は恐ろしくもあつた。

偶然そこにいて、偶然そいつの傍を通つて、偶然襲われて命を落とす。

警察官という職業に就いて、色々な死を見てきた青木だがいつも思う事があつた。

「死は誰にも平等にやつて来ると言うが、死に方は平等じゃねえなあ」

死の現場に直面するたびに青木は木下にこう呟いていた。

不慮の事故で命を落とす者、何の言われもなく誰かに命を奪われる者……中には因果応報だと思ふ事もあつたが、突然やつてくる死ほど怖い物はないと青木は常々考えていた。

（死人が出る前に犯人を捕まえねえとな……）

小さな子の手を引く母親が目の前を通る姿を見て、青木はそう心の中で呟いた。

「青木さーん」

振り向くと木下が小走りで駆け寄つて来た。

「どうしたんですか、非番の日に。散歩ですか？」

木下はわざととぼけてみせた。

「散歩だよ。おれがこんなとこいちゃ悪いかよ」

「意地が悪いなあ。お疲れ様です」

「おう。どこ行ってたんだよ」

よく見ると木下はコンビニのビニール袋を手に持っていた。

「なんだそりゃ？」

「青木さん来る前にこいつを買っておいたんですよ」

袋を開くと缶ビールが五本入っている。

「昼間っから一杯ひっかけようつてのかよ。俺は飲まねえぞ」

「いやだなあ。いくら非番でも昼間っからこんな外で飲まないですよ、いくら僕でも」

「じゃあ何するんだよ」

「いきなり二人も刑事が来たら警戒されるでしょ。スムーズに話が聞けるようにお近づきの印ですよ。冷たい物飲んで気持ちよく話してくれるように……ね」

なるほど、目的のホームレスの男に渡すための物らしい。

「えらく気のきいた事するじゃねえか」

「へへ。気難しい人が近くにいたら色々気がまわるようになるんですよ」

「悪かったな。気難しくて」

ケラケラと木下が笑う。

「頭来るじゃないですか。いきなり捜査しろって言われたかと思えばもう外れていいって言われたり。理由も教えられずそんな事されちゃ気になってしょうがないですよ、この事件。だからどんな物でもいいから情報を手に入れたいんですよ」

いつもはおちゃらけたこの木下という男が、急に引き締まった刑事の顔になった。

青木と行動を共にするようになって少しずつだが成長している様だ。

「だがよう木下。今日もいい情報取れなかったらどうするよ？」

二人は目的のホームレスのもとへと歩き出していた。

「今日はえらく弱気だなあ、青木さん。今日何も取れなかったらキツパリ諦めますよ、僕あ。あのホームレスのおっちゃんが心残りでしたからね。どうせ上に理由聞いたって教えてくれないだろうし、きれいさっぱりこの事件の事は忘れます」

確かに木下の言うように青木はどこかこの件にもう関わりたくないと思っているのかもしれない。

昨夜、内川に妻と子供が戻って来ると聞いて、いままでは攻めの

青木が守りに入ってしまったているのだ。

（今日何もなけりや俺もこの事件の事は忘れちまうか）

青木は木下と同じようにそう決心した。

「ところでなあ木下。例えばだ、人を食う様な異常なヤツが何人もいたらどう思うよ？」

「なんですか急に。今日は何かおかしいなあ。人を食う？」

食べるってことでしょ。事件ですか？」

青木はなんとなく内川が口にした質問を木下にぶつけてみた。

自分ではなかなか答えを出す事が出来ないから、この若い木下がどうとらえるのか興味があつた。

「事件じゃねえよ。昨日そういう映画観ちまってよ。ふと思い出したから聞いてみたんだ」

「青木さんもそういう映画観るんですね。ゾンビかなんかな。どうだろ、そんな猟奇的な事するような連中とは友達になれそうにもないなあ」

うーんと、木下は真剣に考え始めている。

「そうだなあ、どんな味がするのか聞いてみますか。味は牛に近いのか、豚に近いのか。それとも鳥かなって。なんで人じゃないといけないの？ とか」

本気か冗談がよく分らない返事が返って来た。

「お前に聞いた俺がバカだったよ」

「聞いたってこれだもんなあ。でも実際そうじゃないですか。人を食ったら不老不死になれるとか理由があるなら、ゾツとしませんがまあ納得はできる。納得いく理由が欲しいですよ。腹が減ったからその辺歩いてる人を食べた、じゃあ納得できない。大体、人が食料ならそいつにとつちや

歩行者天国はまるでデパ地下ですよ。ご馳走天国だ。青木さんだったらどうするんです？ そんな連中に出会ったら」

木下の言う事も一理あつた。理由を知りたいという意見は青木も

賛成だった。

どんな事件もその結果に至る理由がそれなりにあるものだ。

人を食す理由……青木には想像もつかない。

「それがわからねえからお前に聞いてみたんだよ。まあ気にするな」
「なんかひっかかるなあ」

そう話しているうちに、目的の青いブルーシートの屋根が遠くの方に見えてきた。

第五の事件3

「しかし木下、少しばかり現場とはなれすぎちゃいねえか？」

確かにそのホームレスの小屋は4件のどの現場とも一キロ以上も離れている。しかもその小屋は遊歩道から柵を越えて、湖のすぐそばにあつて通行人を確認出来るような位置には無い。

「まあ確かに離れてますけど年季が違いますよ。違法ですけどここに住んでますからね。散歩とか釣りする人でもそう何十時間も湖にいないでしょ。そういう人よりも何か見てる可能性は高いんじゃないかな、と。まあ見てない可能性も高いけど、どうせ今日で捜査も終わる事だし心残りは嫌でしょう」

「確かにここに住んでりや何か見てるかも知れねえな。だがよ、この二、三日いなかったじゃねえのか」

「そうなんですよねえ。里帰りでもしてたのかなあ。それも本人に聞いてみましょう」

ホームレスが里帰りねえ、と青木は半ば呆れながら苦笑いした。

「ほら、あそこですよ」

木下の指さす方にその小屋はあつた。

小屋は遊歩道の柵を越えて十メートルほどの湖のほとりに建っていた。

木の枠にベニヤ板を張り付け、屋根には青いブルーシートが覆つてある。そしてその小屋を包み隠すように雑草が青々と茂っていた。多少の雨風は凌げるだろうが夏の暑さや冬の寒さはどうするのだろうか」と疑問に思うほどの粗末な作りである。

「よくまあこんなとこに住めるな」

「僕の記憶じゃあ僕が学生の頃からあそこに建ってますからね、あれ。住人は入れ替わりしてるかもしれないですけど」

「しかしあそこからじゃこっち歩いてる人間も見えないんじゃないか？ 窓があるわけじゃなし」

青木が言つのも無理もなく遊歩道から小屋までは緩やかな斜面が続き、おまけに雑草が邪魔してよほど小屋から身を乗り出さないとむこうからこちらを見ることは難しそうである。

「だからあ、可能性ですよ。青木さん。聞かないで後悔するより聞いてがっかりの方がいいでしょ。それにあの家にいつもじっとしてゐるわけじゃないだろうし、食べ物もいるだろうから出歩くこともあるでしょ」

「出歩く……ねえ」

「そうです。何度も言いますけどここに住んでるんですよ？ 言わば湖全体があの家に住人にとっては庭なわけです。毎日うついてれば妙な奴がいれば記憶に残ってるかもしれない。その可能性に賭けてゐるわけです、僕は」

「わかったわかった。俺も刑事だ。無駄だと分かっててもやることはやるさ。お前の賭けに乗ってやるよ。それで、今日は御在宅かな？」

青木が遊歩道から下に見える小屋を覗きこむ。

木下も少しかがんで覗き込んだ。

「いると思うんですけどねえ……」

ランニングをする初老の男性が、中腰の二人を不思議そうな目で見ながら通り過ぎていく。

二人して小屋を凝視しているとブルーシート越しに黒い影が少し動いた。

「……いるみたいですね」

「さつさと話聞いてみるか。またいなくなっちゃったら適わねえ」

「行きましょう。せつかくのビールが温くなっちゃいます」

木下が先に遊歩道から柵を乗り越えた。

それに続こうと青木が柵に手を掛けた時、ふと周りが気になった。青木達がいる場所から三メートル程先に男が二人、こつちを見て何か話している。

「木下あ、ちよっと待て」

青木はその様子がどうも気になって木下を呼びとめた。

だが木下にはその声が届いてないのか、すでに小屋のすぐ傍まで斜面を降りて行ってしまっている。

雑草をかき分けている木下の方を気にしながら青木は男達の方に向かって歩き出した。

男達は青木が近づいてくる事に気付いて少しおどおどしている。「どうかしましたか？」

見た目が強面の青木は警戒されない様に柔らかい言葉で話しかけた。見た目で怖がられるのはいつもの事なので慣れたものである。

「な、なんだあんた達」

男達はどちらもくたびれたシャツと穴のあいたズボンという出で立ちに、小汚いバッグを手にしている。

青木は懷から警察手帳を出して二人に見せた。

「失礼。警察のものです。ちよつとその小屋の住人に用があつて」

「け、警察う？ 警察が俺に何の用だよ。俺は何も悪さしちやいねえぞ」

「そつだ。鈴木さんは何もしちやいねえ」

「ちよ、ちよつと待て。あの小屋はあんたの住まいか？」

鈴木と呼ばれた男が頷いた。

「そつだよ。俺の家だ」

青木は少し戸惑った。

（この鈴木と呼ばれた男があ的小屋の住人ならさつき小屋の中で動いた影は誰なんだ？）

「今、あそこに誰がいるだろう？ あんたの知り合いか何かか？」

「違つから俺らここにいろんじやねえか。たまに来て勝手に家に上がり込んで俺らを締め出しやがるんだよ、あいつが」

「鈴木さん困つてんだよ。今日だつてちよつと出かけて帰ってきたらまた居座つてやがる。だから俺も一緒に行つて文句言つてやるつて……」

「ちよつといいや、刑事さん。あんたどうにかしてくれよ。ちよつ

とあいつ普通じゃねえんだよ。俺はおっかなくて……」

「普通じゃない？ どう意味だ、普通じゃないって」

「最初は勝手に上がり込んでるから文句言っただよ。あんただって自分の家に他人が勝手に入ってたら文句言うだろ？ 俺も言ったよ、何してんだって。そしたら何も言わんエですげえ目つきでこっち睨むんだよ。その目が、何というかこう、人とは思えないくらい目つきでさあ。殺されるかと思ったよ」

「殺されるって、何かされたわけじゃねえんだな？」

「俺はもう蛇に睨まれた蛙よ。おっかなくてそれ以来近づけねえ。いつも黒い服着て、このクソ暑いのにやっぱ普通じゃねえよ、ありゃあ」

「黒い服？ そいつは黒い服着てんのか？」

「ああ、そだよ。顔を隠すようにフード被ってさ。あやしいだろ？ 警察なら連れてってくれよ」

青木は鳥肌がたった。

（まさか……当たりか）

もし今あの小屋にいる男が犯人ならこの鈴木というホームレスは顔を見ている。木下の賭けは見事に当たった事になる。

（木下……）

青木はホームレスとの話に夢中で先に小屋へ向かった木下の事をしばらくの間忘れてしまっていた。

小屋の男が犯人なら、何も知らない木下はすでに接触しているかもしれない。

（まずい……）

そう思った瞬間、目の前の二人のホームレスの顔色が変わった。

「あ、あんた……おい……」

二人の視線は青木ではなくその後ろへと向いていた。

その怯えた表情に気付いた青木が振り向くと、その視線の先には真っ赤に染まったシャツの木下が、長く伸びた雑草の茂みの中へとまるでスローモーションの様にゆっくり崩れ落ちて行った。

第五の事件 / 4

一瞬、青木は何が起きたのか理解できなかった。

目の前にいる二人のホームレスの表情のあまりの変貌ぶりに振り向くと、数メートル後ろで木下が膝から崩れ落ちていく光景が目の前に飛び込んだのだ。ほんの数分前まで隣にいた木下が。

その光景を青木の脳が理解するには数秒の時間がかかった。

「木下！」

呼びかけるやいなや青木は木下の倒れている斜面へと慌てて柵を飛び越えた。

着地した瞬間、草に足を滑らせバランスを崩したが、それほど青木はひどく狼狽した。

「どうした木下！」

木下の肩を抱きかかえ、もう一度名前を呼んだ。

薄く開いた目は視点がうつろで、焦点があっていないし、顔面は真っ青で血の気が引いている。今にも意識を失いそうだ。

白いワイシャツの首元は真っ赤に染まっていた。

抱きかかえた青木の手は木下の血がべったりとついている。どうやら木下の左の首あたりから出血しているようだ。

青木はハンカチを取り出し、木下の首元へ押し当てた。
出来るだけ出血の勢いを抑えるためだ。

そのおびただしい出血に青木は木下の生命の危険を感じ取った。

「おい、救急車だ。救急車を呼んでくれ！」

青木は二人のホームレスに叫んだ。

男達も木下の様子を見てどうしたらいいのか分らずただ立ち尽くしているだけだった。

「あ……くろ……」

木下が声にならない声を必死に喉から絞り出そうとしている。

「どうした。何があった？」

「く……ろい……おと……」

「く、くろい……黒い？ 黒い……男か」

木下のか細いメッセージを必死に聞き取りながら青木は斜面の下にある小屋の方に目をやった。

湖の水はゆるやかに、静かに流れ、木下が入ったであろうその小屋も何も変わった様子はない。

青木は今度は自分たちがやって来た方向へと視線をやった。

「おい！ お前！」

ホームレスの鈴木が急に叫んだ。

ちょうど青木が視線を向けた五メートル程先に、茂みの陰から柵を飛び越え、遊歩道を走って行く黒い服が見えた。

「あいつだ、刑事さん。あいつが俺の家に……」

「お前ら！ こいつを頼む。早く救急車を呼べ。警察もだ！」

そう言うつと青木は勢いよく走り出した。

木下をあのまま会ったばかりのホームレスの男達に任せたままでいいものかと頭によぎったが、逃げて行く犯人を見逃すわけにはいかない。木下も刑事なのだ、犯人確保を優先するべきだと分つてくれるはずだ。そう自分に言い聞かせ、逃げて行く男を追いかけた。

先に行く男は、遊歩道を行き交う人の間を縫ってどんどんスピードを上げて逃げて行く。

その距離は一向に縮まらない。

（畜生め。なんて足の速い野郎だ）

青木もその後ろ姿を見失うまいと必死に食らいつく。

遊歩道に行く人は何事かとこの二人のチェイスを振り返り、または立ち止まり眺めている。

そして湖の遊歩道は右方向へ緩やかなカーブに差し掛かった。

黒い服の男は先にカーブを曲がり青木の視界から消えた。

（まずい）

青木も息を切らしながら必死にスピードを上げ、男より少し遅れてカーブへとたどり着いた。

「きゃっ」

「うわっ」

カーブを曲がった瞬間、青木は激しい衝撃とともに腰を地面に叩き付けてしまった。

相当なスピードで走っていたから青木はしたたかに腰を打った。
「いつつ……」

腰をさすりながらも慌てて黒い服の男の姿を確認した。辺りを見回すが、その姿はすでに見えなくなってしまうていた。

「くそったれ……」

ふと我に帰りその激しい衝撃の元へ視線を向けた。

「おい、大丈夫か。悪かったな」

木下を襲った男を見失ったせいで青木の機嫌はすこぶる悪い。とても申し訳無く思っているような口調ではない。

走るのを止めてしまったせいで肩で息をしている。

「は、はい。すいません」

衝撃の元は女の子だった。

遊歩道のカーブで青木と女の子は出会いがしらにぶつかってしまったのだ。

曲がった瞬間に女の子の姿が見えたので、反射的に体をひねらせよけようとしたが、青木も全力疾走していたので避けきれず、結局ぶつかってお互いが尻もちをつく格好になってしまった。

「大丈夫か。ケガはねえか」

彼女の手をとり体を起してやる。

「はい。大丈夫です。びっくりして倒れたただだから……」

よく見ると女の子は高校生の様だった。薄い水色のブラウスに紺色のスカートという制服姿である。

ぶつかっただけで持っていたカバンが吹き飛んでしまったのだろ
う、慌ててそれを拾いに行っている。

青木はポケットから名刺を取り出した。

「悪かったな。もし後からケガしてる所とかが分つたらここに電話してくれ。俺は警官だ。あやしいもんじゃねえから」

「すいませんでした。失礼します」

それだけ言つて名刺を受け取り女子高生はそそくさと小走りに行つてしまつた。

（近頃のガキは愛想もねえな。てめえのせいでホシを見失つたんだぞ）

青木は男を見失つた事と腰の痛みにイライラしながら、激しい苛立ちをどこへもぶつけられずにいた。

遠くで救急車のサイレンが聞こえてきた。

（木下……死ぬんじゃねえぞ）

来た道に戻ろうとした時に青木はふと後ろを振り向いた。

ぶつかつた女子高生の姿はすでに見えなくなつていつ。

（あの子は向こうに行くから俺とぶつかつたんだろ。なんで来た道戻つてんだよ）

そんな事を考えながら足早に木下の倒れている現場へと急いだ。

第五の事件 / 5

いつのころからか木下は青木にとって一服の清涼剤の様な存在になつていた。

木下が捜査一課に配属された頃、青木は妻と子供に逃げられ、内川の鉄拳制裁を受けた後だったから多少の角は取れていた。

だが“一課の暴れん坊”と署内でも噂されるほどだったからまわりからはかなり警戒されてはいたのだ。

いきなりやってきた新人木下の教育係として内川は青木を指名した。

当然青木は後輩の面倒をみるような柄ではないし、木下の方も青木がものすごく恐ろしい人物と噂は聞いていたからそれを聞いた時は生きた心地はしなかっただろう。

課長命令で渋々ひきつけたものの、これといって自分から話しかけるわけでもない。

居心地が悪いのは木下である。

移動の車内でもハンドルを握ったまま不機嫌そうな顔をしている青木にいい加減げんなりしていた。

ある日、木下は思い切つて青木に話しかけた。

「青木さん、毎日夕飯一人でしょ。今夜どっか行きませんか？ 奢つて下さいよ」

「な、なに」

青木は突然の事に戸惑った。

妻子に出て行かれた青木に対して毎日一人などよく言ったものだ。

ただでさえ捜査一課の中でもデリケートな話題である青木の私生活に対して、木下は怒鳴られるのを覚悟で言つてのけたのだ。

「いつも一人じゃ味気ないでしょ。僕も彼女もない独り身なんでさみしいもんですよ」

「女の一人もいねえのか、てめえは」

こう言われては青木も笑って答えるしかなかった。

「しょうがねえからお前の配属祝いでもしてやるか」

こうやって木下と青木は次第に打ち解けて行った。

「青木さん、そういうのも眉間にしわ寄せてちゃ、寄ってくるものも寄ってきませんよ。もっと穏やかに穏やかに」

「うるせえよ。俺の顔に文句いうんじゃねえ馬鹿野郎」

一度慣れてしまえば木下は青木に対して何でもズバズバ言うようになっていく。

木下と組んでからというものの青木の“捜査一課の暴れん坊”はなりを潜め、随分と丸くなっていったのだ。

木下は初対面でも何の警戒をされることなく、ふわりと相手の懐に入り込むのが上手い。

今思えば内川はこうした木下の性格を見越して青木と組ませたのかもしれない。

青木が木下が襲われた現場へ戻るとそこには人だかりができていた。

（平日の昼すぎだったのに暇人ばかり居やがる）

現場にはちょうど警官が来たところで野次馬の整理をしている。

そこへ同じ捜査一課の細川が青木の姿を見つけてやってきた。

「青木さん、大丈夫ですか」

「ああ。犯人を逃がしちゃった。木下はの容体はどうだ？」

「近くの市民病院へ搬送しました。相当出血が激しいみたいです。かなりの量の血を失ったようです。いま田上がついて行ってます」

田上というのも捜査一課の同僚である。

「青木さんにもだいぶついちやってますね、血」

細川に言われて青木は自分の服や腕に青木の血が付いている事に気付いた。

「命に別状はないんだな？」

「発見が遅れてたら危なかったらしいです。なんとか大丈夫そうですね。そう簡単に死ぬような奴じゃないですよ、あいつは。でもなあ……」

「どうかしたのか？」

「いやね、あの小屋から遊歩道まで少し見て回ったんですよ。鑑識もまだ来てないし。でも血の跡はほとんどないんですよ。おかしいと思いませんか？」

「どういう事だよ。俺を試してみろ。これはあいつの血だぜ？」

「でも救急隊の話だと人は体中の血液の半分を無くしたら死んでしまっらしいんですよ。で、木下はどうもそのギリギリのラインみたいなんですよ。それだけの血を無くしてるんならどこかに血だまりができててもおかしくない。大量出血の跡がないんですよ」

細川は首をかしげて続けた。

「まず小屋の中の壁にごく少量の血が飛んでいます。そして小屋を出て、草むらを上がって……ここらへんで木下は力尽きて倒れたんですよ？ 歩いたであろう道にも血痕はなし。倒れたこの茂みに少々の血と……青木さんの体に付いた血。どう考えても体内の半分の血液量とは思えない」

「あいつの首元はもう真っ赤だったぜ。服も胸当たりまでな。それでも足りんか」

「足りないと思います」

青木は腕を組んであの小屋を睨みつけた。

「青木さん、この事件なんなんですか？ 木下と青木さん、今日から休暇だつて聞いてたのに。休みに突っ込むくらいの大きいヤマなんですか？」

細川の疑問はもつともだった。休暇中の刑事が二人揃って現場にいて、しかも被害者の一人はその片方なのだ。

青木は内川の手前、事の事情を詳しく説明するわけにもいかないので話題をそらした。

「通報してくれたホームレスはどこ行つた？ 二人いただろう」

細川は話をそらした青木に気づいているが、それ以上は何も聞かない。何か言えない理由があるのだろうと感じ取ってはいた。

「ああ、俺らが来たら急いでどっか行っちゃいましたよ。勝手にあそこに住んでる事を色々突っ込まれるとも思つたんじゃないですか？」

青木はまだあのホームレス達には聞きたい事があつた。特に犯人の顔を見ているであろう、あの鈴木の方に、だ。

「細川、ここはお前に任せたぜ。何か分かつたら連絡しろ」

「ま、任せたつてどこ行くんです？」

「俺は休暇中だ。しつかり頼むぜ」

そついうと青木は急いで駐車場に向かつた。

身内に被害者が出て黙っている青木ではない。

聞きたい事は山ほどある。もう何も隠させず、すべてを聞き出す決心で車に乗り込み、署へと車を走らせた。

曇天の午後

午後からの授業中、啓介の脳裏には様々なものが交錯していた。

消えた瓜生、登校していない坂本・沙耶、学校の外へと向かう生物教師の竹本……。

瓜生……。やはり例の不良たちへの暴行が事実で、噂になっている事を知り逃げ出したのだろうか。

しかし昨日初めて瓜生と話した啓介だが、そんな事で逃げ出すようなタイプでは無いようにも思えた。

坂本……。朝から昨日の一件が噂になっているのは彼の軽口だと啓介は思ったが今日は欠席と知って意外に思えた。ただの欠席だろうが啓介は妙に坂本の事が気にかかった。

沙耶と竹本……。昨夜は突然のキスで舞い上がっていたが、冷静に考えてみたらこの二人の関係は怪しいと坂本に聞かされていたのだ。

その沙耶は欠席、そしてまだ午前中にも関わらず学校から出て行く竹本……。

偶然だと自分に言い聞かせようとすればするほど、啓介の頭には二人が一緒に歩いているあの光景が浮かんでくる。

唯一の救いは沙耶から来た一件のメールだった。

今夜九時、学校で――

当然啓介はなぜ学校に来てないのか、とかなぜ学校なのかと沙耶にメールを送ったのだが返事はない。

こつちからの質問には答えてくれないようなので啓介は、

じゃあ今夜学校で

とだけ沙耶に返事を送った。

結局午後の授業がすべて終わっても沙耶からは何も返事が来る事は無かった。

その事が余計に啓介の心を揺さぶった。

（沙耶のやつ、やっぱり竹本と……）

などと余計な事を考えて、一人でイライラしていた。

イライラするせいなのかいつも余計に喉が渴く。廊下にある冷水器では間に合わないから校内に設置してある自動販売機で飲み物を買って渴きを潤していた。

一方の瓜生にも大丈夫なのか、とメールを送ってみたがこちらやはり返事は無い。

本来なら沙耶のお誘いメールで夢見心地になっていたのだろうが、それ以上になんとも言い難い不安が啓介を包み込んでいた。

午後の授業も終わり、帰り支度をしている時、啓介は岩崎の一言を思い出した。

（そういえば岩崎が何か言いかけて終わってたな。何だったんだろ）

啓介は教室を見わたすが岩崎の姿は無い。

今日の昼休みに続きがどうのと言いかけたが、沙耶からメールが来た事に頭がいっぱいになったせいで、聞きそびれていた事を思い出したのだ。

（もう帰ったのかな。まあ明日改めて話聞けばいいか）

そんな事を考えながら啓介は一人教室をあとにした。

夕方の空は灰色の厚い雲に覆われて、今にも雨を降らせそうな雰囲気だった。

足早に自転車にまたがり学校を出た啓介の胸は少しづつ高鳴り始めている。

午後の授業までは学校に来ていない連中の事が気になって仕方なかったのに、学校が終わってみれば今夜の事が楽しみで堪らないのだ。

（今夜は早めに家を出ようかな。親父が帰ってくるとどこに行くとか色々聞かれそうだし）

どんな服を着ていこうか、シャワーくらい浴びて行った方がいいかな、などというんな事を考えている。

なにせ女子とデートなど小学校時に男女六人で動物園にグループデートして以来だし、そんなうぶな啓介が夜に二人きりで会おうというのだから、どう準備して行ったらいいのか皆目わからない。

まあ、まだ約束まで時間はたっぷりあるからと家に帰ってから出かけるまでの流れを頭の中でシュミレーションしながら自転車を走らせた。

学校を出て電車通りを走っていると、灰色に淀んだ空からポツポツと小さな滴が啓介の顔を叩き始めた。

「いよいよ降り出したか。家までもってくれ」

灰色の空はそんな啓介の望みなどお構いなしに、雨の粒を次第に大きくしていった。

残暑の太陽に照りつけられ、焼けたアスファルトに落ちる雨は、辺りを独特の匂いを漂わせる。

行き交う人は急いで店の軒先に雨宿りし、啓介の横を走る車のワイパーは絶え間なく左右に動いている。

「ついてないな。家に着いてから降ってくれればいいものを……」

啓介は降りしきる雨の中、必死に自転車を漕ぐ。途中、雨宿りも考えたが、今夜の事を考えると一刻も早く家に帰って準備したいから啓介はこの雨の中、ずぶ濡れになりながらも家へと急いだ。

ちょうど啓介が江津湖のそばを通りがかった時だ。

「あれ？」

啓介のいる位置から湖を挟んだ反対側に数台のパトカーが止まっているのが見えた。

ただパトカーが停まっているだけなら家へと急ぐ啓介は気付かなかっただろう。啓介が雨が降っているにも関わらず自転車を止めた

のは、そのパトカーの赤色灯が点滅しているからだった。

「事故……かな？」

啓介は遠回りになるがそのパトカーが停まっている方へと方向を変えた。

警察を見ると昨日の事を思い出す。例の公園の一件は啓介の知らないうちに警察沙汰となっていた。

その事と先に見えるパトカーとはなんの関係もないはずだが、啓介はなぜか気になって赤く点滅している方へと引き寄せられていった。

啓介の位置は湖を挟んだ反対の道路、白いガードレールに足をかけ、様子をうかがっている。湖内の遊歩道ではないからここからは何があったのかは分からなかった。野次馬もほとんどなく、遊歩道に行く人たちも何かあったのかと一瞬興味を持つがそのまま通り過ぎていくから、何かが起きてずいぶんと時間が経ったのかもしれない。

遊歩道の柵に立ち入り禁止のテープが張られ、その前で制服を着た警官と、おそらく刑事であろう白いワイシャツの男が何やら話している。

よく見ると湖沿いの草むらの中に小屋のようなものが建っていた。

「あんなとこに小屋があったんだ」

昔からよく通る道だがあんなものがあるのは気付かなかった。かなりくたびれたたたずまいだから古い建物なのだろう。

「なんか事件っぽいな」

湖の茂みにひっそりと建つ古い小屋、その光景が啓介の好奇心をくすぐった。

こうなると近くに行つて見学したくなってくる。雨に濡れているのを啓介は全く気にしなくなっていた。

その先の道から湖の方に降りてみようかとペダルに足をかけた啓介は思わず身を乗り出した。

「瓜生君！」

思わず声が出てしまった。

警官と刑事が話している少し後ろに瓜生がいたのだ。彼は遊歩道から草むらの小屋を興味深そうに覗いている。啓介は湖を挟んだ反対側にいるからその声はもちろん届いてはいない。

「何してんだ、こんなところで」

朝からいなくなつた瓜生をこんなところで見つけるとは思わなかつた啓介は興奮していた。聞きたい事がたくさんある。彼が姿を消したおかげでこっちは朝から教師たちに呼び出されて身に覚えのない事まで質問攻めにあつたのだ。

降りしきる雨の中、急いでポケットから携帯電話を取り出す。防水機能がある携帯電話ではないがそんな事を考えている余裕はない。だが瓜生は、まるでそんな慌てる啓介の事を察知したかのようにその場からすうつといなくなつてしまった。

啓介はどちらの方向へ行つたのか必死に探したが、雨と行き交う人の傘が邪魔してうまくいかない。

「出てくれ、頼む。電話に出ろ！」

そんな願いもむなしく、啓介の耳にはコール音だけが鳴り続けた。

署長室の男達

青木は目的地を変更して病院へと向かっていた。命に別条はないとはいえ、どんな容態かは気になってしまふのだ。一緒に行動したのだから当然だろう。

車を駐車場に停め、江津湖のそばにある市民病院へと小走りですべていった。

病院に入ると左側に受付があり、三人ほどの受付事務員が作業をしている。

「さっきここに運ばれてきた患者、名前は木下って言うんだが何号室だ？」

受付嬢が自分を訝しそうに見ている事で、服や手が血だらけになっっている事に気付いた。

「こんな格好で悪いなねーちゃん。トイレはどこだい？」

受付嬢は警察手帳を見せると半ば納得した様子だったが、ねーちゃん呼ばわりされた事で

余計に表情を曇らせた。

青木は後ろでコソコソ話をしている受付嬢たちをよそに、教えてもらったトイレに入り洗面台の蛇口をひねる。鏡に映った自分の顔はうつすらと髭が伸び、朝より起きた時よりも心なしか頬こけて見えた。

手と顔に付いた血を洗い流し、ふうつと深く息を吐く。

歩いたり走ったりで大量の汗をかいていたからさっぱりした。手についた血は落とせたが、上着についたものはどうしようもない。

「こりゃあ目立つな。あのねーちゃんたちが変な顔するのも無理ねえな」

しかし落ちないものはどうしようもない。上半身裸で病院内をうろつくわけにもいかなから青木はそのままもう一度受付へと戻った。

「で、何号室だい？」

「何か事件ですか？」

小さな声で受付嬢が聞いてきた。警察の登場に興味深々の様だ。
「ドジだから転びやがったんだよ」

青木は笑ってごまかす。

「九〇九号室です」

「どうも」

そういうと青木は受付の反対側のエレベーターに乗り込んだ。

受付嬢たちは青木の後ろ姿を見ながらコソコソ話を続けていた。

「青木さん！」

エレベーターを降りると、ちょうど同じ捜査一課の田上と出くわした。

「おう、おつかれさん。木下はどうだ？」

「病室にいますけどまだ意識は回復してないです。運ばれてすぐ輸血して、なんとか一命は取り留めました」

田上は青木の二つ下で、青木とほぼ同じ時期に一課へ配属された。

「青木さんは大丈夫なんですか？」

「ん？ ああこれか。これはアイツのだよ」

田上は青木の上着についた血を見て驚いた表情をしている。

「通報受けた時はびっくりしましたよ。二人とも休暇って聞いてたし。まさか木下が被害者だなんて……。まあ助かってよかったですよ」

「悪かったな。迷惑かけた。完全におれの不注意だ」

まさかの言葉に田上は慌てた。青木が謝ってくるなど田上の記憶が確かなら初めての事である。

「ま、まあ青木さん、コーヒーでも飲んで少し休みましょうよ。あまり顔色がよくないし」

「悪いな田上。ゆっくりしてる暇はねえんだ。急いで署に行かねえと……」

青木の様子に田上の表情が固まった。

「医者の話による傷の大きさに比べて、失った血の量が普通じゃないそうです。まるで首筋からポンプで吸い取った様に……」

そこまで言いかけて田上は止まった。青木の表情からこれ以上は何も聞き出せないと思ったのだろう。

「……まあ何があつたか、今は詳しい事は俺ら聞きません。休みの日に二人して何かしてたんだ、重要な案件なんですよ？」

青木は田上の言葉に黙って頷く。

「いつか話してくださいよ、今は聞きませんから。そのかわり木下が元気になったら二人にうまいもん奢ってもらいますよ」

「すまねえな、田上。好きなだけ飲ましてやるよ」

「分かりました。木下の顔だけでも見て行きますか？」

二人は並んで病室へと向かった。

病室に入ると、ベッドに横になっている木下にはいくつかの機械がつながれていた。当然青木には何のための機械かなど分からない。「だいぶ落ち着きましたけどもう少し輸血しといた方がいいみたいです。顔色もここに運ばれた時より良くなってきました」

そこへ担当の医師がやってきた。それを見て青木と田上は軽い会釈をする。

「担当の西岡です。もう大丈夫ですよ。ここへ運ばれた時はかなり危ない状況でしたが」

青木の服に付いた血を見ている西岡に青木は無言で手を横に振る。この白髪交じりの医師も青木が怪我をしていると思ったのだろう。

「ところで刑事さん、木下さんの首の傷は見られました？」

「傷……ですか？」

聞かれた青木は少し考えた。あの時はそんな余裕なかったし、木下の首元は真っ赤に染まっていた。

「捜査の事もあるでしょうから詳しくは聞きませんが、出血の量に比べて傷がね、こう……おかしいんですよ」

「おかしい？」

「うーん、おかしいというか珍しいというか……。例えば首筋にある動脈を刃物でスパッとやれば大量の血が出ますよ」

西岡が指先で首元を斬るような動作をする。

「今回の木下さんは特に刃物で切られたような痕跡はないんです。

強いて言えばこれは……。まるで噛みついた——」

「噛みついた？」

青木が驚いて声を上げた。西岡も自分で言っておきながら、半ば呆れた様な表情になっている。医者の見立てとしてはまるで常識から外れたものなのだろう。

「噛まれたような、ですよ。小さくですが歯型の様なものも見られたんです。傷口の所にね」

「噛みついただけでこんなにも出血するもんなんですか、先生？」

田上がたまらず尋ねた。青木は横で腕組みして何やら考え込んでいる。

「考えるにくだすよね、普通は。しかし実際ほら、木下さんが。まるで映画のドラキュ——」

「先生！」

青木が西岡の声を遮るように声を上げた。驚いた西岡と田上が青木を見る。

「先生、この件は……。その傷の話は極秘でお願いします。誰にも話さないでください。田上、お前もだ」

青木はなぜそんな事を言ったのか自分でも分からないが、そうした方がいいのだと直感でそう思ったのだ。

「……そうした方が……。黙っておいた方がいい……」

キョトンとしている二人を尻目に、青木は急いで病室を後にした。（やはり、すべてを聞き出すしかねえな……）

再び血の付いた服の男を見てコソコソ話を始めた受付を素通りし、青木は車に乗り込んだ。

青木の向かう先は、もう一つしかなかった。

署長室の男達 / 2

「そんなバカな」

運転中の青木は苦笑いを浮かべた。医師の西岡の言葉を思い出しているのだ。

（まるで映画のドラキュラ——）

途中で遮ったが、西岡はこう言うつもりだったのだろう。

「そんなもの映画や小説の中の話だろうが。ありえるわけねえ」

そう思ったかったが、それを完全に否定できない自分がいる。

大きな雨粒がフロントガラスを叩く。それを二本のワイパーが感情の荒立っている青木の視界を良くしようと懸命に動いている。

気になっていた昨夜の内川の言葉、

（人を食料にする連中）

西岡の発言と内川の発言、この二つがぴったりくつついてしまつて、まるで滑稽無灯な話が現実味を帯びてくるのだ。

「こんなアホな考えが浮かんでくるとは、俺もとうとう焼きがまわつちまつたか」

青木の感情とリンクするように自然と車のスピードも上がっていく。

「はつきりさせねえと……なあ木下」

猛スピードで署の敷地に入り、駐車スペースなどお構いなしに車を持ち捨てた青木は一目散に捜査一課へと走り出した。

署内の警官たちがやはり血だらけの青木を見て何事かと声を上げたが、そんなものは青木の耳には入ってこない。

一段跳びで階段を駆け上がり、二階奥にある捜査一課の扉を勢よく開けた。

机に向かって仕事をしていた二人の同僚が驚いて顔を上げた。

「あ、青木さん……」

青木は自分を呼ぶ声に見向きもしない。視線は捜査一課課長内川の座る方にしか向いていない。

内川は自分の机に座って腕を組み、何やら考え込んでいるように一点を見つめていた。

「課長」

青木の声にも内川は動じず、一点を見つめている。青木は内川の机の前まで来てもう一度呼んだ。

「課長……木下がやられました」

青木の後ろの二人の刑事も仕事の手を止め、事の成り行きを見守っている。

ようやく内川の視線が青木の方を向いた。座っているから青木を見上げるような形になっている。

「……聞いたよ」

「自分は今から署長の所へ行きます。休暇中の勝手な行動についての処分は後から願います」

そついうと青木は内川に一礼して足早にその部屋から出ようとした。

「待て、青木」

呼びとめられた青木は苛立つて内川の方へ振り返った。

「待ちません。同僚がやられたんだ。黙っていられるわけがない。

何が起こっているのか——」

「待てと言ってるんだ！」

室内はしんと水を打ったように静まり返った。内川のその強い口調に青木は何も言い返せないでいる。

「落ち着け、青木」

内川の鋭い視線の前に青木はまるで蛇に睨まれた蛙のように固ま

ってしまった。

「今のその状態のお前が行った所で話は混乱するだけだ。私も行く」

そういうと内川はゆっくりと立ち上がった。

青木のそばまで来ると、内川は小さな声でこうつぶやいた。

「熱くなるなよ。熱くなったら負けだ」

署長室まで向かう間、青木と内川は終始無言だった。

あせりと怒り、それに不安が入り混じって激昂していた青木を内川は柳の如く受け流した。署長室へ怒鳴りこむ覚悟だった青木は、冷静な内川にとりあえず治められた格好になっている。

だがこの不可解な事件と何かを必死に隠そうとする警察上層部に対する不信任は、青木の中でふつふつとその爆発する時期をうかがっているのだ。

署長室の前に付くと、内川はもう一度こう言った。

「いいか、熱くなるな」

青木は何も答えず、署長室の扉だけを見ていた。まるでゲートが開くのを、今か今かと待つ競馬馬の様だった。

内川が二つ扉をノックする。

「内川です。青木刑事を連れてきました」

少し間を置いて中から声がした。

「入りたまえ」

そう言い終わる前に内川は失礼しますと扉を開けた。

正面に椅子に座った署長の梅田の姿がある。その手前のソファーにはあの時と同じ、江津湖の事件の捜査を命じられたあの日と同じようにスーツの男がどかと腰を下ろしていた。

白髪交じりで顔には深いしわがあり、腕にはなにやら高そうな時計をはめている。あの日にいたあの男で間違いない。署長室であつて、なにやら偉そうな雰囲気醸し出しているこの男。

男は青木を見ながら胸のポケットから煙草を取り出し火を点けた。

（こいつだ。この野郎が何か知ってやがるんだ）

青木はこの男に対して声を荒げたい衝動を必死に抑えた。

そしてあの日と同様、この煙草の男に不快感を抱きながら失礼しますと青木も内川に続いて部屋に入った。

とつくの昔に煙草を止めて他人の煙草の煙も気にならない青木だが、どうもこの男の煙は虫が好かない。

「君は無事かね、青木君」

署長の梅田が青木に声をかけた。すでに事の成り行きは耳に入っているらしい。

「私は大丈夫です。申し訳ありません。私の不注意で木下があんな事に」

「まったくだ」

室内に低い声が響いた。声の主はソファ―に腰を降ろしている煙草の男だ。

梅田も内川も声の主を見返す。青木の方はというと、初めて聞く煙草の声の男に戸惑っていた。あまりにも突然に不意打ちのような形で声を出されたせいで、自分に対する発言なのかどうかも判断出来ないでいた。

梅田が場を取り繕うように話を戻した。

「まあ無事でよかった。木下君の方も命に別状がなくて安心したよ」

「すいませんでした。処分はなんなりと受けるつもりです」

「当然だ」

またしても煙草の男が横やりを入れた。

署長の椅子に座る梅田、その正面に立つ青木、その青木と煙草の男の座るソファ―との間を遮るように内川が立っている。

その内川も煙草の男の横やりに青木の顔色が変わってきている事に気付いた。もちろん梅田も例外ではない。

なにせ梅田や内川は煙草の男の素性を知っているのかもしれないが、青木にとってはどこの馬の骨とも分からない男がいちいち横から偉そうなことを言ってくるのだ。

「今すぐクビになつてもおかしくないんだよ。それくらいの事をや
つたんだ君は」

青木はくるりと振り向き煙草の男を睨みつけた。ここで声を荒げ
て言い返さないだけでも丸くなつたものである。昔の青木なら有無
を言わさず飛びかかつていただろう。

（熱くなるな）

内川のその言葉が青木の頭の中で繰り返し流れているようだ。

だが煙草の男は続ける。

「あれだけ野次馬が出て大騒ぎになつたんだ。事を揉み消すのも骨
が折れるよ。我々の仕事を増やしてくれてありがたいもんだ」

「さつきからなんだ、てめえは」

限界だつた。青木が男に詰め寄る。男はそんな青木に目もくれず、
新しい煙草に火を点けた。

「どこの誰だか知らんがてめえに言われる筋合いはねえぞ。文句が
あるなら素性を明かせよ、この野郎」

「よせ、青木」

内川が青木を制する。

「君の様な下つ端を相手にしてる暇は無いんだよ。下つ端は下つ端
らしく大人しく言われた事を黙ってやっておけばいいんだ」

「こつちは大事な同僚がやられてんだ。黙って指くわえて見てるわ
けにはいかねえんだよ」

「それは君たちの勝手な行動のせいだろう。言わば自業自得だ。そ
のせいで我々は迷惑してるんだよ」

「だからどう迷惑かけたか説明しろって言つてんだよ。それで納得
出来たらいくらでも頭下げてやるさ」

「ふん。君みたいな下つ端に頭下げられたところでどうにもならん
よ。説明する気にもならんしその必要もないのだよ。足を引っ張る
など言っているだけだ。兵隊が死のうがどうなるうが私の知った事
ではない。大人しく病院で看病でもしていたらどうだね、その同僚
とやらの」

「てめえ——」

「やめんか二人とも！」

青木が抑える内川の腕を払って飛びかかろうとした瞬間、梅田が声を上げた。

普段は温和な梅田が声を荒げるのは珍しい。青木もさすがに我に返った。

「枕崎君、少々口が過ぎんかね。彼は私の部下なのだよ。ここは署長室、私の部屋だ。口を慎まなければいくら君だろうと出て行ってもらふ。青木君、君もだ。この件は君達の勝手な行動が引き起こしたのだからその点は反省しなさい」

枕崎と呼ばれた煙草の男はふん、と腹立たしそくに煙草を灰皿でもみ消した。

すいませんと内川が謝った。

なんで謝る必要があるんだよと青木は内心反発していた。

「さて……青木君、君は休暇の方に戻りたまえ」

「え？」

梅田の言葉に青木は面喰った。

「君は休暇中なのだろう？　しっかり休み給え。あとは我々で処理する。だから——」

「ちよ、ちよっと待って下さい。このまま何も無かった様に帰れと？　何の説明もなしに」

「そう言う事だよ」

枕崎がいつの間にか新しい煙草に火をつけ煙をくゆらせながら言った。青木はそれを無視して食い下がる。

「この間の江津湖の四つの事件と木下がやられた今回の件は無関係じゃないんでしょう？　お願いです、説明してください。一体何を隠しているんですか！」

「青木、よせ」

内川が青木を諫める様に方に手をやる。

「課長も何か知ってるんでしょう？　何なんだ？　そこまでして隠

す様な事件が起きてるんですか！」

青木はこの部屋にいる全ての人間が敵に見えた。何か隠している。それを確信した。

木下があんな事になった今、全てを聞くまで引き下がれない。そう簡単に引き下がる様な男ではないのだ。

すると枕崎が煙を吐きながらすくつと立ち上がり、青木を見てこう言った。

「世界にはね、知らない方がいい事もあるのだよ……」

枕崎の言葉に梅田と内川も視線を下げた。まるで仕方ないんだとでも言いたげな表情だ。

青木は奥歯を噛み締め、三人の顔を怒りや失望を込めた眼差しで交互に見続けた。

その時署長室の扉がガチャリと開いた。

「いやあ、まいった。濡れましたあ」

ノックもせずに突然入って来た事に驚いた青木が振り向くと、そこにはどこかで見た事のある制服を着た男が立っていた。

署長室の男達 / 3

青木はすでに内川の熱くなるなの言葉など、とつくにどこかへ飛んで行ってしまっていた。

枕崎と呼ばれた煙草の男と一触即発の状況の中、突然現れた場違いな男に室内の張りつめた空気が一瞬にして緩んだ。

この警察署のトップの部屋に、しかもノックもせずに図々しく入って来たこの闖入者に一同は呆氣にとられている。

服装を見る限りどうも高校生のようだ。

（なんだこのとぼけた糞ガキは）

青木はそれまでに溜まっている憤りを含めた視線でこの高校生らしき男を睨みつけた。

「ノックぐらいしたらどうだね」

枕崎が呆れたように言った。雰囲気を察するにどうも彼は顔見知りらしい。

「いやあ、ドアの前まで来たらなにやら中が騒がしいんで。遠慮せず入ってしまえと思ひまして」

「ふん。君はヒトとしてのマナーがなつとらんようだ。その辺をしっかりと学びたまえ」

「心得ときます。枕崎さんも相変わらず敵を作るのがお上手のようで……」

「何い？」

「すいません、署長さん。ちょっと寄り道しちゃって。遅くなりました」

どうやら枕崎とこの高校生の間柄もあまり良好な関係ではないらしい。

（このガキ、署長とも面識があるのか。何者だ一体）

青木がチラリと内川の方を見た。内川の表情から彼もこの高校生を知っているようだ。

その内川をみた高校生は、

「おや、内川さん。どうもお久しぶりです」
ペコリと頭を下げる。

「ん、ああ」

内川はどこかきこちない返事を返した。この部屋で青木だけが一人、置いてけぼりを食った形になってしまっていた。

「突然雨が降ってきましてね、いやあ振りそうな天気だから傘をどうしようかと悩んだんですけど――」

「君はそんなくだらん話をしにわざわざここへ来たのかね？」

コンコンとドアをノックする音がした。梅田が慌てて返事をする。
「誰だね。今は来客中だ。後にしてくれ」

「ああ、多分ボクですね」

そついうと高校生はガチャリとドアを開けた。

ドアの前には若い婦警が立っていた。両手で下から支える様にきれいに置かれたタオルを持っている。

「下でタオルを頼んだんですよ。びっしょりだったんでね。やあ、ありがとうございます。助かりました」

タオルを受け取り、深々と頭を下げる高校生を見て若い婦警は心なしか頬を赤らめている。

（高校生のガキ相手に何ポツとしてんだ。ホテルのルームサービスみたいなマネして）

室内の重い空気を察知したのか、婦警はタオルを渡すとそそくさとその場を後にした。

婦警が頬を染めるのも無理はなかった。この高校生、なかなかの男前なのだ。まるでモデル雑誌から飛び出して来た様な甘いマスク、すらっと伸びた長い脚。強面でずんぐりとした青木とは対照的である。

青木は学生時代から女性にモテるといふ事から程遠い人物だった。結婚した時ですら「青木に嫁が来る」と同級生に驚かれたくらいだった。だからどうもいい男という物に対して妙に対抗意識を持っている。

いる。

今も青木はこの得体のしれないいい男にまるで汚い物を見るかのような視線を送っていた。

「これでだいぶさっぱりしました。熊本と言う所は蒸し暑いですね。雨と汗でベタベタだ」

受け取ったタオルで濡れた髪や腕を拭きながら高校生はニコニコしている。

「……話を続けてもいいかね？」

枕崎はイライラしながらまた煙草に火を点けた。

「え？ ああ、すいません。何の話でしたっけ」

「君は現場に行ってきた遅れたのだろう？ 何か分ったのかね」

（現場？ このガキは現場に出入り出来る様な身分なのかよ）

「現場は見てきましたよ、雨の中。突然降りだすもんだから参りましたよ——」

「お前——」

高校生の受け答えに、いよいよ枕崎のイライラが爆発した。

「早く本題に入らんか！」

言われて高校生の表情が変わった。これまではヘラヘラした軽い印象だったが、一瞬にして目つきが変わったのだ。

それを見て青木はなぜか背筋にうすら寒い物を感じた。理由は分らないが、何かこう今まで感じた事のない雰囲気はこの高校生から感じ取ったのだ。

梅田も内川もこの二人のやり取りを黙って聞いている。

「……話を進めるのは一向に構いませんよ。僕は、ね」

そういうと高校生はチラリと青木に目をやった。

青木と目が合う。

「どうしますか、枕崎さん？」

高校生は青木と目が合ったまま枕崎に投げかけた。

「ちつ。そういうことか……」

枕崎はため息をつきながら青木を見た。

青木はすぐに理解した。一人部外者がいるが話を続けていいのか。つまり自分はこの場には邪魔なのだ。

だが、青木はそんな事で引き下がる様な男ではない。

「ちようどいい。その本題ってやつを俺も聞かせてもらいます」

こうなるとどこでも動かない。そんな事は隣にいる内川が一番良く分っている。

梅田、内川、枕崎の三人は視線を交わし、梅田が仕方ないとも言いたげな顔で頷いた。

「ここにいる物好きな刑事さんもお話を聞きたいそうだ。続けよう」
枕崎も呆れた表情だ。

青木は「よし」と心の中でガッツポーズである。

「では私はこれで……」

内川である。

「私の代わりに青木を残します。うちも部下をやられてみんな混乱してるでしょうから。署長？」

「分った。そちらは任せる。うまく説明してやってくれたまえ」

「分りました」

そう言って頭を下げた。そして青木に目をやり、

「青木……あとは頼んだ」

その言葉だけを残し、内川は署長室を出て行った。

「さて話を進めよう。青木君、いいかね？」

梅田に言われて青木は黙って頷いた。

「これで満足かね」

皮肉をこめて枕崎が言う。青木はぐっところえてそれを無視した。
「いいんですか？ ボク達の決まり、破っちゃう事になりますよ？」
「こうなったらしょうがないだろ。やつこさんはどうしても知りた
いそうだ」

枕崎はいつの間にかまた新しい煙草に火を点けていた。

「いいのかなあ。知らない方がいい事もありますよ。刑事さん？」
「構わねえよ」

青木は高校生を睨みつけた。

（僕達の決まり？　なんだそりゃ。こうなりやとことん聞いてやる
うじゃねえか）

どうやら青木の覚悟も決まったようである。

「話を続けようか、瓜生君」

署長の梅田が高校生を促した。

署長室の男達 / 4

「続けると言ってもなあ……」

梅田署長に促された瓜生と呼ばれた高校生は困った様に頭を掻いた。

「現場見てきたんだろう？ この刑事さんの大事な同僚とやらが襲われた現場に」

枕崎が青木に嫌みを言う。青木はもう完全にこのヤ二臭い男を無視している。

「行ってきましたけど……ただどんな所なのかなあと見てきただけですよ。おまわりさん達があれこれやってるのを遠くから覗いていただけです。だから特にこれといって……」

「何い？ お前が現場行つて遅れると言うから俺はここですつと待つてたんだぞ」

「それは枕崎さんが暇だからでしょ。ボクは名探偵じゃないんだ。現場見て犯人はあんただなんて真似はできませんよ」

「俺が暇だと？ お前、自分が昨日何したか分かつてんのか？ あれも俺が揉み消してやつたんだぞ」

「昨日？ ああ、あの事です。知りませんよ。あれはボクじゃないし。第一、あんな事する理由がない」

青木は何の話をしているのかさっぱり分からずただ黙って二人のやり取りを聞いていた。とにかくこの瓜生という男が木下が襲われた現場に行ってきたのは確かなようだ。

「理由がない？ 俺は目立つような事はするなよと学校に行かせる時釘をさしたはずだ。それをお前は——」

「まあまあ、二人とも。一体何の話をしているのかね？」

耐えかねた梅田が二人の間に割って入った。

「昨日の夜、坪井高校とかいう学校のそばの公園で不良グループが暴行を受けたんですよ。十五人がボコボコだったそう。救急車や

警察も来て大騒ぎだったらしい。で、ここにいる瓜生がその連中に連れられて歩いているのを目撃されてるんです」

「朝学校行ったらその噂でもちきりですよ。いやあ、参りました。極力目立たないように学校に潜入してたんですが」

青木は思い出した。瓜生が着ている制服にどうも見覚えがあると思っていたが、木下と江津湖の聞き込みをしている時に確かに見たのだ。確か大野とかいう交番勤務の巡査と一緒に時だった。この薄い水色のシャツを着た高校生が声を掛けた青木から逃げるようにして自転車で走り去ったのだ。あの時はあの高校生の事が妙に気になっていたが、すっかり忘れていた。

（こいつがあ的高校に潜入したって事は何か関係あるのか。ただの偶然か……。それより学校に潜入できるとか、一体こいつらは何者なんだ）

青木はぶつきたい質問が山ほどあったが、まだ黙って二人の話を聞いている。

「あそこはこの東署の管轄じゃない。北署の管轄だ。俺はわざわざ出張って県警にまで行って話つけてきたんだよ。余計な事するんじゃないやねえ」

「それがあんたの仕事でしょ、枕崎さん」

「あ？」

「それに何度も言うようにあれはボクじゃない。まあ確かに二人ほど殴りましたが……正当防衛です。それで彼らは完全に戦意を失っていた。だから必要以上に殴る理由がない」

「後から来た誰かがやった……と」

それまで黙って聞いていた青木がやつと口を開いた。
「でしょうね」

瓜生もそれに同意した。

「理由は分かりませんがボクは坪井高校の不良連中に目をつけられてみたいですね。こんな真面目なボクを、です。いわゆるシメるってやつですか。それでボクは公園へ連れていかれた」

「よっぽど連中の気に食わん事でもしたんだろ」

瓜生は枕崎を無視して続ける。

「相手は大人数だ。おっかないですよ、あれだけの人数に囲まれたら。だからボクはとりあえずグループのボスさえ抑えれば助かるだろうと……」

不良を怖がる人間がその中の親分をやってしまおうと考えるわけがない。青木も腕っ節は強かった方だからこの瓜生という男が相当喧嘩慣れしているのだと感じた。

「予想通り彼らは戦意を失い、ボクは急いで公園から逃げ出したわけです。だから今朝ボクが全員ボコボコにしたなんて噂になってるから驚きましたよ。中には病院送りにされたのもいるとか。先生連中に呼び出されたりするのはマズイと思ってすぐ学校から飛び出しました。その人に目立つなと言われてたんでね」

枕崎はふんと鼻で笑った。

「で、一人だったのか？」

「は？」

「だから公園にはお前一人が連れて行かれたのかと聞いてるんだ」
枕崎の表情は今までと違い何か脅迫めいた顔つきになっていた。

「……」

瓜生は黙ってしまった。

「答える瓜生。一人じゃなかったんだろ？ 誰か一緒にいたんだな」
もう一人いちゃまずいのか、青木は枕崎の態度が急に変わった事が不思議だった。そしてそれを隠す瓜生も、である。

「いやだなあ、枕崎さん。知ってるんでしょ？ ボクが一人じゃなかったって。確かにいましたよ。ボクと同級生の子と一緒にね。でも彼はたまたま巻き込まただけですよ。彼も運が悪かった。放課後ボクと話してるだけで仲間と思われたらしくてね。初めて人に殴られたと言っていました。何でも初めてってのはめでたいもんですが……」

「今回の件と関係してるのではないかね？ 瓜生よ」

「さあ、それはどうでしょう?」

「お前は鼻が効くだろう。もうすでに目星はついてるんだろ? さつさと終わらせる。これは命令だ」

枕崎に問い詰められる瓜生の真顔だったものが急に和らいだ。

「いやあ、この件はボクに任せてもらってるでしょう? 報告はちやんとしますから黙つといて下さいよ」

柔らかな表情とは裏腹に瓜生の口調はきつい。

さつきまでは青木と枕崎が一触即発の状態だったが、今度は枕崎と瓜生がぶつかり合っている。青木と梅田はその様子を窺うことができない。

「そうだ、ちょうどよかった刑事さん。少し手伝ってもらえませんか。ここに居合わせたのも何かの縁です」

急に振られて青木は驚いた。枕崎の苛立ちは頂点に達しているようだ。

「瓜生、調子に乗るなよ?」

「調子に乗る? 乗ってません。色々とボクの不手際で御手数掛けた事は感謝します。でも——」

瓜生が少し間を置いた。枕崎を見る表情が変わる。その鋭い目つきに青木は寒気すら感じた。

「——それがあんたの仕事だろ」

ずっと高圧的な態度だった枕崎が、その瓜生の一言で不満げな表情ながら黙りこくってしまった。きれいな顔立ちながらその迫力は息を呑むほどだった。

枕崎と瓜生は上司と部下の関係なのだろうと思っていた青木は最早この署長室の状況がさっぱりつかめないでいる。何の話をしているのかも分からないし、自分がこの部屋へ何しに来たのかさえ忘れてしまいそうだった。

「さあ刑事さん、行きましょう」

「何?」

「一緒に行きましょう。話はそこからだ。署長さん、構いませんね

？」

梅田の方も瓜生のコロコロ変わる表情に面喰っていたようだ。瓜生に話しかけられても、黙りこんでいる枕崎をじっと見つめていた。「ん？ ああ。君たちに協力するように上からも言われているからね。青木君、休暇は取消させてもらってもいいかね？」

もちろん青木に異論はない。話はよくわからない状況だが願ったリ叶ったりである。とにかく青木は今何が起こっているのか、それを知りたいのだ。この少年について行けばそれを知ることができるのだろう。

「もちろんです。何でもやりますよ」

「うむ。内川君には私の方から話しておく。くれぐれも気を付けてくれたまえ」

「決まりだ。さあ行きましょう」

青木は頭を下げ、瓜生の後について部屋を出ようとした時、枕崎が煙草の煙を吹かしながら声を掛けてきた。よほどのチェーンスモーカーなのだろう。この数十分の間に吸った煙草の量は相当である。「ああ、刑事さん。ひとつ忠告しておくよ」

呼ばれて振り返り枕崎を睨む。この男に嫌悪感を抱いていた事を思い出した。この男の吐く煙が嫌で堪らない。

「いいか。何を聞こうが、何を見ようが、絶対に口外しないことだ。それがあんたのためだよ」

青木はムツとした。一度不快感を覚えた人物には、何を言われても素直には耳に入らない。木下が襲われた事を屁とも思っていないこの男、どこの誰かも分らないこの男の言葉に耳を貸すほど暇じゃないのだ。一応刑事なのだから守秘義務くらい分っているつもりだ。「俺は口は堅い方だよ」

それだけ言つて失礼しますと扉を閉めた。

二人が出て行った署長室には沈黙と煙草の煙だけが残った。

「彼……彼は大丈夫だろうか」

梅田が机の上で手を組んだまま枕崎に尋ねた。

「彼？ あの青木とか言う刑事ですか。さあ？ どでしょう」

枕崎は空になった煙草の箱をくしゃりと右手で握りつぶした。

「なににせよあまり首を突っ込みすぎない方がいいでしょうな。これまでそれで駄目になったヒトを何人も見てきましたからね。知らなきゃよかったと泣き言言っても後の祭りだ。私の知ったことじゃありませんよ。まあ瓜生の様子を見る限りもう何か掴んでいる様だ。時間の問題でしょう」

枕崎は立ちあがりうんと伸びをした。そして首をゆっくり左右に倒し、コキコキと骨を鳴らす。

「私も準備をしいた方がよさそうだ。これで失礼しますよ」

そついうと枕崎もゆっくりと席を立った。

「あの瓜生君は一人で大丈夫かね」

ドアノブに手を掛けていた枕崎がニヤリと笑う。

「ヒトはヒトの心配をしていたらいい。あいつは腹が立つ男だが優秀ですよ。あなたはここで報告があるのを待っていればいい」

そついうと枕崎は署長室を後にした。

一人残った梅田が窓の外に目をやる。夕暮れにはまだ早いが厚い雲のせいか外は少し薄暗い。窓を開け、室内に溜まった煙草の煙を外へと解放した。雨の粒は小さくなっていて、濡れたアスファルトをシャーッと滑るタイヤの音が聞こえてくる。

「ヒト……か」

梅田はそう呟くと再び椅子の上に腰を下ろした。

落ち着かない夕暮れ

家に帰り着くと馬原啓介はぐつしよりと濡れた制服を洗面所で脱ぎ捨てた。

帰宅した啓介を見るなり母親が「あらあら、すぐシャワーでも浴びたら」と笑って台所へと入って行った。それくらいひどい姿だったのだろう。

言われるまでもなく啓介は自分の部屋にも戻らず洗面所へと直行したのだ。

雨に濡れた制服は汗と混じってもものすごく不快な臭いを醸し出していた。裸になって自分から出ている嫌な臭いから解放された啓介は浴室へ入りシャワーをひねった。

冷水に近い水温のシャワーを頭から浴びながら啓介は瓜生の姿を思い出す。さつき江津湖で見た瓜生の姿だ。

朝、学校から忽然と姿を消し、どれだけ電話で呼び出そうがメールを送ろうが梨のつぶてだった男があ湖にいたのだ。雨の中、傘も差さず。

啓介が帰宅途中、パトカーの赤色灯が気になり回り道をするや次馬の中に瓜生の姿を見たのだ。そして気のせいかもしれないが、まるで啓介に見つかつたのを察したかのようにすうっとその場からいなくなってしまった。

「あんなとこでなにしてたんだ？」

朝に学校を抜け出した瓜生が夕方四時頃に江津湖にいた。それも制服姿のまま。

何時間もの間連絡もとれず何をしていたんだろうと啓介は不思議に思った。

昨日初めて知り合っただけで、まだ友達と言えるかどうか怪しい関係なのだが
やけに気になる。

「あんな目にあわされたんだ、無理もないよな」

シャンプーで泡立った頭を洗い流しながら啓介はぽつりと呟いた。瓜生をあの場合で見つけた後、啓介は携帯電話片手に瓜生がいた場所まで自転車を走らせたのだった。

息を切らして瓜生のいた場所まで着いたが彼の姿は見当たらない。自転車で近辺をうろろしてみるのが結局瓜生を見つけることは出来なかった。

探すのを諦め、一体瓜生は何を見ていたんだろうと数人の野次馬が覗いている方へと目をやった。

警察が何かしているのは湖の反対から見えていたから分かっていたし、向こうから見た景色と距離が縮まっただけでなんら変わった事はなかった。

遊歩道に熊本県警と書かれた黄色いテープが張られ、白い手袋をした刑事らしき男と数人の制服警官、それと青い作業着を着た男が数人草の茂みに這いつくばって何かを探している様だ。それはテレビドラマなんかでもよく見かける光景だった。

啓介はいい加減雨に濡れるのが嫌になってきたので野次馬根性も切り上げてさっさと帰宅の途についたのだった。

帰り際、もしかして瓜生を見かけないかとキョロキョロしていたが、彼を見かける事は無かった。

シャワーを浴びて頭も体もスッキリさせたところで、啓介はパンツ一丁の姿で二階にある自分の部屋へと入った。そしてゴロンとベッドに横になり天井を見つめた。

時間はやがて六時になるうとしている。暦のうえではもう秋に入り、昼の長さや夜の長さが逆転しようかとしていた。強い西日がカーテンの隙間から啓介の部屋へと差し込んでいる。

「あと三時間……」

沙耶との約束の時間が迫ってきていた。今日はやけに時間が経つのが遅く感じる。

夜の学校に呼び出すなんてどんな要件なのだろう。啓介の脳は今度は沙耶の事でいっぱいになっていた。さっきまでは瓜生、今は沙耶と啓介の脳は行ったり来たり目まぐるしく活動していた。

昨日の夜、沙耶は学校を辞めると言った。啓介はショックだったし、やっとゆっくり話ができたと思った矢先の沙耶の告白に動揺もした。声を掛けられずにいたこの数年間を取り戻せると思っていた。「思いを伝えるべきか……」

啓介は枕を顔に押し当てた。そんな事が出来るなら何年も沙耶に話しかけられずにいるわけがない。告白というこれまでの啓介の人生で特に縁のなかった行動を想像しただけでも体中の血液がぐるぐると動きを速め、顔を真っ赤に染めるのだった。

「無理だ、無理無理。やめとけやめとけ」

まるで自分で自分を落ち着かせるように何度も何度もつぶやく。

たったの二文字を口にする事がこんなにも難しいものなのか。気持ちを伝えようとする事がこんなにも自分を悩ませるのか。啓介は改めて勇気の無さを痛感した。

（君も君なりの強さを持っている）

啓介はふと瓜生の言葉を思い出した。

「そっぴやそんなこと言ってたなあ……。あれはどういう意味なんだろう」

自分に少しでも強い部分があるならもつと沙耶と同じ時間を過ごせたかもしれない。それが無いから結局沙耶が転校すると知った今まで遠くから彼女の姿を眺めるに留まっていたのだ。昔から意気地のない事を自覚している啓介は瓜生がどういつもりであんな事を言ったのか不思議でなかった。強くないから今もこうして一人うじうじしているのだから。

「喉が渴いたなあ……」

そんな事を思いながら啓介はいつの間にかウトウトと夢の中へと落ちていった。

「啓介、ご飯できたよー」

一階から呼ぶ母親の声に啓介はハッとしてベッドから飛び起きた。そして慌てて枕元に置いてある目覚まし時計を手にとった。時間は七時半を回っていた。

「ああ、びっくりした」

いつの間にか睡魔に襲われいたところに突然声を掛けられたことで、啓介の心臓はバクバクしている。約束の時間に寝坊してしまったたとも思っただろう。まだ時間に余裕があると分かると啓介はホッとした。

ボーっとする頭を振りながらゆっくりと階段を降り、食卓の席についた。父はまだ帰っていない。馬原家では帰宅の遅い父をおき、啓介と母の二人で先に夕飯を済ますことが多い。

沙耶との約束の時間が迫り、啓介は食事中母に話しかけられても「ああ」とか「うん」という返事だけで心ここにあらずといった状態である。

「どこか調子悪いの？」

「ううん」

「今度ね、みんなで温泉にでも……」

「ふうん」

といった具合である。

首をかしげる母親をよそに食事を流し込んだ啓介はさっさと自分の部屋へと戻っていった。

約束の時間より余裕を持って外出しようと考えていた啓介は洋服ダンスからジーンズと紺色のＴシャツを引っ張り出し、急いで着替えを済ませた。

八時を過ぎる頃には啓介は落ち着きを失い、鼓動も少しずつそのスピードを速めていった。

（デート前の心境は皆こんなにも落ち着かない感じなのだろうか）

部屋にある姿見の前に立ち、自分の服装を確認する。そして一つ、「ふう」と深く息を吐くと、
「よしっ」

と、まるで鏡の中の自分に「頑張ってこい」とでも言うように気合いを入れ、意を決した啓介は母親に「コンビニ」行つてくるとだけ告げて玄関を出た。母親も「気をつけて」と言っただけで気にも留めていない。

雨はすでに止んでおり、外は昼間より気温が下がって、涼しい風が心地よかった。

啓介は自転車にまたがると、はやる気持ちを押さえ、ゆっくりとペダルを踏み込んだ。

途中、歯を磨くのを忘れた事を後悔したが、今更戻るわけにもいかず鈴虫の声に秋を感じながら軽快に自転車を走らせた。

刑事と少年

署長室を出ると青木はまるで瓜生に付き従うかのように彼の一步後ろを歩いていった。

青木は目の前を歩く得体のしれない、どこか掴みどころのない男の背中をただ黙って見つめていた。鼻歌交じりで署内を歩く高校生の後ろをいかにも凶暴そうな強面の男がついて歩いているのだから、傍から見れば妙な光景である。通りすがりの署員たちも何事かと不思議そうに振り返っている。そのたびに青木は「何か文句あるのか」とでも言いたげな顔で睨みつけるからみんな慌てて顔をそむけていった。

ちょうど署の入口まで来たあたりで瓜生はくるりと青木の方へ向き直った。こちらに興味深々な眼差しを向けてくる連中を睨んでいた青木は突然立ちどまった瓜生に気付くのが遅れ、危うくぶつかりそうになった。

「ではこれで、刑事さん」

何の事が分からないでいる青木をよそに瓜生はさつき借りたタオルを返しにすぐ脇にある受付の婦警に話しかけている。そしてタオルを持ってきてくれた婦警と何やら楽しげに話し始めたのだ。

青木は我に帰り込み上げてきた苛立ちを抑え瓜生の肩を強く掴んだ。

「おい。てめえどういう意味だ。これでってどういうことだ」

びっくりしたのは話していた婦警の方だ。今にも殴りかかりそうな青木を見て固まってしまっている。瓜生の方はというと青木のそんな様子を気にも留めない様子で涼しい顔をしている。それがますます青木の神経を逆なでした。

「こっちは聞きたい事が山ほどあるんだ。もう俺は用無しって事か。ああ？」

「まあまあ刑事さん、落ち着いて。婦警さんもビックリしてるじゃ

ないですか」

「表出る」

瓜生の肩を掴んだまま引つ張ると青木は一時騒然とした署の玄関口を後にした。去り際瓜生が婦警に「それじゃ」とにこやかに手を振った事で、青木の肩を掴む手に一層の力が込められることになった。

「どつという意味だ。説明しやがれ」

駐車場の脇に引つ張ってきて手を離すと青木は腕組みをして瓜生を睨みつけた。

「痛いなあ、もう。言葉の通りですよ。じゃあこれでっ」

「だからどう意味かって聞いてんだよ。さっきは俺に協力してもらうって言ってたじゃねえか」

「うーん。さっきはそうでも言わないと色々うるさかったでしょ。」

ほら、あそこにいた偉そうな人が」

瓜生は指で煙草を挟む仕草を試みせた。偉そうな人とはおそらく枕崎の事だろう。

「その場しのぎで俺を利用したつてのか。初めっから俺に協力してもらおうなんか思ってたんだな、てめえ」

青木は止まらない。

「冗談じゃねえぞ。こっちは同僚がやられてんだよ。俺はどんな手を使ってもお前についていくぞ」

高校生相手に今にも殴りかかりそうな勢いの青木を瓜生はじつと見つめている。

それは激情している青木を冷やかな目で見るのではなく、まるで青木の一言一言、一挙手一投足を吟味している様だった。

「刑事さん、落ち着きましよう」

青木は興奮のあまり少し息を切らしている。

「刑事さん、さっき枕崎さんに言われませんでしたか？ 世界には知らない方がいい事もあるって」

「ああ、そんなこと言ってたな。だがそんなもん知るか。俺は知り

たいんだよ」

「ボクにはそれが分からないですよ。同僚の方が襲われたことに
関しては気持ちは分かります。でも上の人間が関わるなど言ってい
るのにあなた方は踏み込んでしまった。その結果、彼は襲われた。
違いますか？」

確かに瓜生の言う事はもつともだった。休みを言い渡されていた
にもかかわらず、青木と木下はそれを破り、現場で捜査まがいの事
をやった結果なのである。青木もその事に関しては何も言い返せな
い。

「もう一度言います。あなたがどうしてそこまでこの件に関わろう
とするのか、ボクには分からないんです」

青木は押し黙ったまま、瓜生を睨む。なぜこの件にここまで首を
突っ込みたがるのか、自分でもよく分からない。（木下が襲われた
から）しかしそれは後からの事で、首を突っ込んだから木下が襲わ
れたと言った方が正しい。青木は答えが見つからない。瓜生の　な
ぜ　という問いに答えられないのだ。

「刑事さん、あなたに家族はいますか？」

質問が変わり、青木はハツとした。瓜生の発した家族という単語
に対してすぐに家を出ていった妻の春菜と幼い娘の加奈の顔が脳裏
に浮かんだ。

内川にもうすぐ戻ってくると言われたとはいえ、今は完全に別居
状態だ。果たして家族といえるのかどうか……。

「まあ、一応……いるな」

青木は曖昧な返事をした。

「一応？　事情はよく分かりませんがいるんですね、家族が。じゃ
あなおさらあなたは知らない方がいい」

「ちょ、ちよつと待ってくれ。家族は関係ねえだろ。こんな仕事し
てんだ。多少の危険は承知のうえだ」

「別に家族が危険に巻き込まれるとかそういう事じゃないんです。
あなたが危険なんですよ。色々知ってしまうと」

「俺が？」

「そうです。知ってしまえば後戻りはできない。記憶を自由に消せるわけじゃありませんからね。ここまで言っても知りたいですか、あなたは？」

「後戻りするつもりもねえよ、俺は」

「知ってしまえばあなたの精神がどうなるか、我々は保障できない。例えばバスや電車の中、映画館で隣に座った人でさえあなたは疑ってしまうかもしれない。ただ道ですれ違った人はもちろん身近な人、家族でさえも、です。それでも知りたいですか？」

「疑うのは刑事の仕事だ」

「刑事とかそういう問題じゃないんです。ヒトとして、です。知らなければよかったと思うかもしれない。あなたにそこまでの覚悟はありますか？」

「しつこいなてめえも」

瓜生のしつこい問いに青木もいい加減苛立ってきた。頑固が服を着て歩いているような男がちょっとやそつとの脅しで引き下がるはずもない。青木の腹はすでに決まっていた。

瓜生の方もさつきまでのどこかおちゃらけた雰囲気はなりを潜め、その鋭い目つきに青木も圧倒されそうになった。

「ボクは三回念を押しました。あなたの覚悟を見極めたかったんです。わかりました。そこまで知りたいのなら教えましょう」

瓜生はそれまでの硬い表情から一瞬にして穏やかな笑顔へと変わった。

青木は正直、瓜生と対峙していたそこ数分間のその場の空気の重さに押し負けまいと必死に抵抗していた。蛇に睨まれた蛙がその圧力に抗うかのように、青木もまた瓜生の放つ、独特のプレッシャーに気押されつつあったのだ。事実、あと数回念を押されていたら青木は諦めて引き下がったかもしれない。

高校生の餓鬼にここまでの迫力を出させるほど、今回の件は何か大きな秘密があるのだらうと青木は確信した。と同時に緊張の糸が

切れた青木のシャツの下は汗が噴き出していた。

「ここではあれですからドライブでもしましょうか。少し時間がありますから。でもその前に刑事さん、着替えとかお持ちですか？ その格好じゃ目立つなあ」

眉間にしわを寄せた瓜生が青木の血のついたシャツをじろじろと舐めるように見つめる。

青木は木下の血がたっぷりとしみ込んだシャツを着ていたことなどすっかり忘れていた。

幸い、更衣室のロッカーに呼びのシャツが何枚かあったはずだ。

「おう、ちよっと着替えてくるわ。悪いが待っててくれるか。なんか飲むか？」

「お気遣いなく」

瓜生はわざとらしく深々と頭を下げた。

駐車場から署に入るまで青木は何度も後ろを振り返り、瓜生の姿を確認した。

（うまい事言って逃げるつもりじゃねえだろうな……）

そんな青木の気持ちを察したのだろう、瓜生はニコニコしながら大きな声で、

「逃げませんから大丈夫ですよ。ごゆっくりどうぞ」

青木はその声に恥ずかしくなって急いで更衣室へと向かった。

刑事と少年 / 2

青木は血のついた白いワイシャツを脱ぎ捨て、ロッカーに出してからそのまま置いてあった薄いグレーのワイシャツを取り出した。ビニールを雑に破り、クリーニング屋のタグをちぎる。綺麗にたたまれ、しわもついていないシャツに袖を通すと気持ちが少し落ち着いていた。思えば走ったり激昂したりと汗まみれで慌ただしい一日だ。顔を洗い、さっぱりした所で鏡に映る自分を見つめる。口のまわりにうっすらと髭が伸び始めている。

ふう、と一息ついて更衣室を出た。

（あの餓鬼、本当にちゃんと待ってやがるんだろうな……）

そんな疑いの気持ちを持ちながら署の入口までやってくると青木は絶句した。

駐車場で待っていると言っていた瓜生が入口の受付の所で片肘ついて婦警二人と楽しそうに談笑していたのだ。

怒りを通り越して呆れかえった青木は何も言わず瓜生の首根っこを掴むと、力任せに駐車場へと連れ出した。瓜生はされるがまま連れて行かれたが、婦警への甘い別れの笑顔は忘れなかった。

「痛い、痛い。なんですか刑事さん」

「うるせえ。さっさと車に乗れ」

「乱暴だなあ、もう」

青木に言われ、瓜生は渋々助手席へ乗り込んだ。

「ちゃんと待ってたでしょう」

「俺は待てとは言ったが婦警をナンパしろとは言ってねえ」

「ナンパとはひどいなあ。どこの世界に警察署で婦警をナンパするヤツがいますか。タオルのお礼を言っただけですよ」

「俺にはとてもお礼してるような光景には見えなかったがな」

青木はキーを回し、車のエンジンを起こした。

「そんな荒っぽいと女性にモテませんよ」

青木はハンドルに肘をかけ、苛立ちを抑えながら瓜生の座る助手席へ体を向けた。

「で、どこへ行くんだ？」

「……と、今何時ですか？ まだ六時か……。まだ時間ありますねえ」

瓜生はうーんと少し考え込んだ後、

「少し腹ごしらえでもしますか」

「てめえ——」

「おっと、怒らないで。ちゃんと刑事さんが知りたがってる事はお話しますから。どこかコンビニでも行きましょう。どうも小腹がすいちゃって」

どうもこいつといると調子が狂う、と青木はゆっくりと車を出した。

陽も傾きかけ、雨もすっかりあがった夕暮れの道路はちょうど帰宅ラッシュの真ただ中だった。

何とも言えない独特の、どこかきこちない空気が包みこむ二人を乗せた車は近くにあるコンビニへと向かった。

気まずい沈黙を破ったのは瓜生だった。

「そうだ。自己紹介がまだでしたね。ボクは瓜生。瓜生健といいます」

せまい車内で瓜生は座席に座ったままぺこりと頭を下げた。

そんな瓜生の方を見向きもせず青木は前を向いたままハンドルを握っている。

「……。あのお……」

「青木だ、青木。青木陽一」

瓜生の方など見向きもせず青木は投げやりに自己紹介を済ませた。

「なるほど。青木さん。青木さんね」

何かなるほどなんだと、青木は思ったがわざわざ聞き返さなかった。

十分程走った所で二人の乗った車はコンビニの駐車場へと入って行った。

夕方とあって学生や帰宅途中のサラリーマンなどでコンビニの駐車場は賑わっていた。

「何か食べます？」

停車するなりドアを開けた瓜生が尋ねた。

「いらねえよ。俺は乗ってるから行ってきな」

「では……」

「おい、ちよつと待て」

車から降りようとする瓜生を青木が呼びとめた。そしておもむろに自分のくたびれた皮の財布から千円札を取り出すと瓜生へと差し出した。

「ほらよ」

「そんな、いいですよ」

「高校生なんかそんなに金持ってるねえだろ。俺にもコーヒー買ってきてくれよ」

「うーん。それをもらっちゃうと後が怖いなあ」

「なににい？」

「じゃあ遠慮なく……」

瓜生は頭を下げてお札を手に取るとスタコラコンビニへと入って行った。

「ふう。どうも調子狂うな、あいつは」

似たようなお調子者の木下とは少し違うタイプの瓜生に、青木のペースは乱されていた。

強面で、しかも初対面の相手に対し壁を作りがちな青木の懐にすんなりと入ってくる事はあの木下でさえ初めのうちはできなかった事である。それもたかが十七、八の高校生に、である。

その得体のしれない高校生とこれからドライブしようというのだから内心、青木はおかしくもあった。

「木下の奴が聞いたら大笑いするだろうな」

いつも仏頂面で決して人当たりの良くない青木をフォローするのはいつも木下の役目だった。そんな青木が初対面の高校生と二人きりでドライブなのだから木下が聞いたら格好の酒の肴だろう。

青木は座席にもたれかかり、目を閉じた。眠かったわけではないが、気持ちが少し落ち着いて、今日の疲れが一気に襲いかかってきた感じがした。

木下がああなうってしまった事を思うと、本当にこの件に首を突っ込むべきだったのかと自問自答してみた。あの時、木下を一人で行かせるべきではなかった、それよりもまず言われたとおりに休みをとって家で大人しくするべきだったのか、後悔にも似た青木らしくない弱気な考えが頭をよぎる。

（今さら後には引けねえよなあ）

ガチャリと助手席のドアが開いた。

青木はハッとして体を起こす。

「あれ、寝てました？」

ビニール袋をぶら下げた瓜生が申し訳なさそうに車内を覗いている。

「寝てねえよ。考え事してただけだ。早く乗れ」

瓜生は車に乗り込むとガシャガシャとビニール袋をあさり始めた。

「はい、どうぞ」

ああ、と青木は缶コーヒーを受け取ると封を開けないままジュースホルダーへ缶をのせた。

「で、どこにドライブするんだ？ 野郎二人で遠出するなんかゾツとしねえんだが」

「お釣り、どうしましょ。百円ちよつとしかないですけど……」

「やるよ。そんなもんいいからどうすんだ？」

こいつ、話を逸らしやがる、と青木は内心苛立ちをおぼえたがそこはぐつと言葉を飲み込んだ。

「とりあえず江津湖に行ってみましようか。今日の現場よりも離れ

てた方がいいなあ。ボート小屋あたりがいいですね」

青木としてはおそらく警察が聞き込みなど捜査を続けているであろう現場にはあまり近づきたくはなかったが、今はとりあえず瓜生に従うことにした。

江津湖へと向かう車内では二人の会話もほとんど無く、ただ弁当と菓子パンを夢中でかきこむ音だけが響いていた。

（こいつ、小腹がすいたと言いなながらがつつり食ってやがるじゃねえか）

青木は黙って湖へと車を走らせた。

刑事と少年 / 3

夕暮れの江津湖ボート小屋の駐車場は停まっている車も三、四台と少なく、貸ボートの受付もすでに営業を終了していた。

あたりはすでにうす暗く、江津湖の公園内の街灯も灯り、湖の穏やかな水面がその光を眩しく反射していた。

日中と比べると人の気配も少なく、時折ジョギングをする人を見かける程度である。

江津湖はやがて来る夜の闇を静かに受け入れようとしている様であつた。

青木は駐車場の中心を避け、なるべく目立たないようになるべく隅の方で車を停車させた。

「それで……青木さんは今回の件、どう思います？」

車のギアをパーキングに入れるなり、突然そう切り出してきた瓜生に青木は戸惑った。

それまでのらりくらりと本題に入る事を拒んでいる様にもとれる態度だった瓜生が一変して、突然本題に入ってきたのだ。

青木の方はこっちから切り出さないと何も話さないだろうと考えていたから、瓜生のこの台詞にすぐには返事ができなかった。

青木としては瓜生を質問攻めにしてこっちのペースに持ち込みたかった所を瓜生に先手を打たれた形となった。

「どう思つて……俺は詳しい事何も聞かされちゃいねえからな。」

通り魔に俺達が偶然居合わせて、偶然木下が襲われたつてところか」

青木はこう返すのが精いっぱいだ。

「偶然……そうなんですよねえ。今回は運が悪かった……」

瓜生はうつんと考え込んだ。

「青木さん、江津湖の連続通り魔の件は聞いてるんですよね？」

「だから詳しくは知らん。だからこうしてお前に——」

「同一犯だと思います？」

瓜生が青木を遮るように言った。その表情はさっきまでのお調子者のそれではなく、真剣そのものだった。署長室で青木をたじろかせた、あの表情である。

「どういうことだ。四件も人を襲った奴と木下を襲った奴とは違うってのか」

「だから聞いてるんです。本職の刑事さんに。どう思つか、を」

青木はそう言われて考え込んだ。そして内川署長に渡されたあの赤いファイルの内容を思い出してみる。言われてみれば確かに今日の事件と前の四件とは違う気がする。

三件目までは目的がよく分からないが、腕に軽い傷を負わせただけで犯人は逃げている。

四件目は少し大胆になって、被害者に襲いかかり、前の三件同様腕に軽いけがをさせ、そのうえそこに噛みついていてる。

そして今日起きた五件目、木下が襲われた事件。

まず違うのは傷の場所。四件目までは腕に付け爪の様なもので傷を負わせている。木下は首元だった。

さらに違うのはその襲い方。相手に悟られないように被害者を襲っているし、しかも相手は女性と中学生。まるで自分よりも弱い相手を選んでいるようにも思えた。

木下の件とは全く違う。相手は大の大人で、しかも刑事。犯人はそれを正面から襲っているのだ。

木下の意識が戻らないからその時の詳細は分からないが、犯人にとつてはリスクが高すぎるようにも思える。

それに黒いパーカーを着た犯人を青木は目撃しているが、木下を簡単に襲えるほど大柄ではなかった。

そしてこの五件目だけがあわや被害者が命を落としかけているのだ。

犯人が徐々に大胆になっていったのか、はたまた犯人は全くの別人なのか……。しかし目撃証言が一致している——黒いパーカー。現に青木も見ている。

青木は思考の迷路を答えの見つからないままさよい続けた。

「おそらく先の四件と今回の件は別人ですよ」

考え込む青木をよそに瓜生が言い放った。

「えらく自信たっぷりだな。どうしてそう言い切れる？」

「簡単ですよ。犯人が食事をしたか、していないか」

「し、食事い？」

青木は思わず素っ頓狂な声で聞き返した。

「そうです。食事です」

青木はそこで内川の昨夜の言葉を思い出した。

（人を食料とする連中……）

青木は瓜生の顔を見返す。瓜生の方はというと、食事をして満足したのかすつきりした顔で外を眺めている。そんな男が『食事をする』というおおよそ考えつかない言葉を簡単に言つてのけたのである。『どういう意味だよ。食事つてのは。木下は犯人の腹の足しになつたつてのか』

青木は自分でそう言いながら背中に寒いものを感じていた。内川が言っていた『人を食料にする連中』が本当にこの世に存在するのなら世の中は大騒ぎするだろう。

「そのままの意味ですよ。まあ食料というか飲料といった方がいいのかな。栄養分を補給したとでも言うかな……」

何を言ってるんだこの男は。青木は混乱した。この瓜生という得体のしれない男は恐ろしい言葉を軽々しく口にしている。

（人を襲って栄養を補給だと？ このガキ、本気で言ってるのか？）
そんなまるで映画か漫画の世界の話を真剣に話す瓜生を見て、青木は薄気味悪さを感じた。

この男と出会って初めて異様な雰囲気を感じ取った青木は、人間としての防衛本能が働き静かに運転席のドアの取っ手に手をかけた。
「知りたいんでしょう？ 我々の事を。それともこれ以上関わるの

を止めますか。今ならまだ引き返せます」

青木は一瞬躊躇した。

瓜生の言うとおり、いざ『人を食料にする』という言葉聞いた途端、青木の思考が後ずさりをした事は否めない。実際そんなおよそ現実にも考えもつかない、考えたくもない、そんな連中がいるという事を知ってしまったていいのかという考えがよぎるのだ。

（この世界には知らない方がいいこともある）

署長室での枕崎の言葉が脳裏に浮かぶ。

知らない方がいい、そういう事が……、と青木は心の中で深く深く納得した。

「もう後戻りはできねえよ。少し驚いただけだ。まるで映画か漫画みたいな話だからな。そんな連中が本当に存在するのかよ？」

青木は崩れかけた思考を立て直し、瓜生に尋ねた。

一方の瓜生の方かというと、覚悟を決めた青木に対しニコリと表情を崩し、答えた。

「存在するも何も……今実際会話してるじゃないですか」

青木の思考は再び動きを止めた。

闇の中の二人

「大丈夫？」

女の声。

「ああ……」

今度は男の声。

「驚いたぜ。まさか刑事が来るとはな」

はははと男の声はおどけてみせた。

黒いカーテンの隙間から薄い西日が射しこんでいる。さっきまで降っていた雨もあがり、外には厚い雲の隙間から傾いている太陽が光を射している。

その光もカーテンで覆われたこの部屋にはわずかししか届かず、二人の男女は闇の中で息を潜めていた。

「あの小屋で身を潜めてたらあいつがビール片手にニコニコしながらいきなり入って来やがったんだ。知らん顔してやりすごそうと思つてたら警察の者ですがとか言い出したんであせつたぜ……。俺とした事がしくじったな。その場をごまかすのも忘れてついやつちまった。殺すつもりだったんだが失敗したな。まあ渴きはなくなつたからよしとするか……」

男はペロリと舌で唇を舐めた。

「でも大丈夫？ 警察に顔を見られたんでしょう？」

女は心配そうな声を出す。

「ああ、心配すんな。前にも言つたろ？ 警察は何もできやしない

さ。警察は、な……」

「じゃあ、もしかしてあいつらが？」

「ああ。動くだろうな。それでなくても色々嗅ぎまわってやがるから」

女は後ろから男に抱きついた。

「そんな……私嫌よ。あなたがいなくなつたら……」

「だから心配すんな。そのために準備したんだ。全部押しつけて俺らはここからおさらばさ。そうだな……沖縄でも行くか。あそこはまだまだ手薄なはずだ」

「いいわね、沖縄。早く二人でゆっくりしたいわ」

女の声がるで少女のように弾む。

「でもいいなあ。私もあなたみたいに早く味わってみたいわ……」

女は羨ましげに喉を鳴らす。それを見て男は女の顎に手を当て、そつと女の唇へ自分の唇を重ねた。

女は男のされるがままにその身を委ねた。闇に重なった二人の影は数秒の間、その時を止めた。

「誤魔化さないで。私もう我慢できないわ。最近やけに喉が渴いて仕方ないの」

女はまるで子供がおもちやをせがむ様な目で男を見つめる。

男はスツとその視線をかわすように厚いカーテンに覆われた窓へと顔を背けた。

「今夜ゆっくり味わえばいいさ。初めての味を……。今まで食べたどんなご馳走よりうまいはずだぜ。空腹は最高のスパイスって言うだろ？」

男はおどけて笑ってみせた。

「まあここまでよく我慢したよ。俺なんか我慢できずドジ踏んじまったのにな。今夜はたっぷり初めての食事を楽しめばいいさ」

「ありがとう。楽しみだわ」

今度は女の方から男にすり寄り唇を重ねた。男は優しく唇を離すと女の腰に手を回す。

「死なない程度に頼むぜ。せっかく君が選んだターゲットだ。それに今日はもう一人お客が来るんだ」

「分かってる。ごめんね、私の軽はずみな行動で……」

男はその言葉に一瞬眉をひそめたが、すぐに穏やかな表情になり、「いいさ。俺がルールを教えてなかったからな。今日俺もやらかしちまったからおあいこさ」

女の頭を優しく撫でながら男は天井を見上げた。

暗い天井を見上げ、今夜行われる儀式への思いを張り巡らせ、今日の昼間の様な失態は許されないと何度も何度も自分に言い聞かせていた。もし今夜ドジを踏むような事があれば自分はもちろん、この女もたたでは済まないだろう。

（あいつらもさすがにまだ尻尾は掴んじやいないはずだ。今夜全て終わらせて、すぐに姿を消してやる。もしもの時はこの女も……）

男は天井から横に寄り添う女へと視線を落とした。女は幸せそうに目を瞑り、男の肩に頭を預けている。

「でも……本当にいいの？ あなたの——血をあげても……」

女は幸せそうな顔を一变させ、今度は不安げな顔で男を見つめている。

忙しい女だ。男は内心そう思った。これだから女という生き物は面倒くさい、そんな事を考えながらも、

「構わないよ。君のためだ。今更一人くらい増やした所でどうって事ないさ。それに君の血じゃまだ無理だからな」

男は優しく囁いた。

「ありがとう……」

女はホッとした様子で腕を男に絡ませてきた。

（……やはり……邪魔かな……）

女には見えない所で男の表情は幾分か嫌気がさしたような顔つきになっていた。

「さあ、そろそろ準備をしておこうか。せつかくあいつが隣の部屋を貸してくれたんだ」

女の腕を振り払うかのようにして男は外の様子を覗うかのようにカーテンを少し開けた。

「しっかり頼むぜ」

女は黙ったままコクリと頷いた。

ヒトとそうでないもの

「何だつて……？」

少しの間停止していた青木の思考が再び動き出した。動き出したものの、今の青木にはそう一言だけ口にするのが精一杯だった。

『人を食料とする者』がいるという突拍子もない事を聞かされたうえ、そんなにわかに信じがたい存在の者と今現在会話していると、この制服を着た高校生は言っているのだ。

青木の脳はその言葉を理解しきれず、数秒の間、思考するのを放棄してしまった。

「何つて、言葉通りですよ……ボクもその一人つて事です」

瓜生は表情一つ変えず青木を見ている。

狭い車内に二人、瓜生と青木の距離は三十センチにも満たない。

動けばすぐ体が触れるほどの距離だ。その距離にいる人間がはつきりと言ったわけではないが、自分も『人を食料とする者』であると告白してきたのだ。

「お……お前も人を食う……のか？」

青木はそう聞き返してはみたが、瓜生の返事を聞くのが恐ろしく思えた。エアコンが効いて快適なはずの車内にいて、青木の背中はいじつとりと嫌な汗が噴き出している。

怪談話をする木下を車から放り出すほどの怪談嫌いな青木にとって今の状況は身の毛もよだつ状態なのだろう。

「人を食うつて言うのはちよつと違うなあ。言つたでしょ？ 栄養補給つて」

「だからその意味がわからねえんだよ。お前もその気になりや木下みたいに俺を襲えるつて事か？ もつたいぶらねえでちゃんと説明しろ。俺は怪談の類が嫌いなんだよ」

思わず口が滑って自分の弱点を言ってしまうほど今の青木は混乱している様である。普段の青木なら、初対面の男にそんな事を告白

してしまうわけがない。昔行きつけどったスナック『R』のママですらそんな事は知らない。それほど慎重な男なのだ。

瓜生がそれを聞いてピタツと動きを止めた。止めたかと思うと次の瞬間、その表情を崩し豪快に笑い出した。

「ははは……。本当ですか、それ。似合わないなあ。あははは……」

青木は笑う瓜生に対し怒る余裕さえ無かった。瓜生の発言を一体どう受け止めていいのか分からなくなっているのだ。

どこからが本当でどこからが嘘なのか。冗談だとしても性質が悪い。

青木の脳はそんな危険な連中が本当にいるのかいないのか、それだけを繰り返し続けていた。

知らない方がいい事というのはこの事なのか。

枕崎のあの憎たらしい顔が脳裏によぎる。その枕崎も課長の内川もこの件には深入りするなと何度も青木に情報を流す事を拒んだ。その拒んだ理由が『人を食料とする者』、そんな連中がいるからなのか。それほど世の中にそんな危険な連中がいて、しかも一般人には知らされもせず、情報規制の中で保護されているのか。なんのために？

青木の意識はここではないどこかへと飛んでいて、その脳はフル回転で考えを掛けめぐらせていた。

瓜生は横でまだ笑っている。

（どんなに考えても俺には答えは出せねえ。出せるはずもねえ。こいつの話を聞く以外には……）

青木はしばらく放心していた意識をなんとか取り戻し、今置かれている現実へと自分を強引に引き寄せた。

しばらくの間、自分を見失っていた青木だが、ふと我に返ると隣でガキが笑っている事にだんだんと腹が立ってきた。気の短い青木である。しばらく混乱して放心していたものの、沸点は低い。

いきなりケラケラ笑っている瓜生の襟首を掴むと自分の方へと引き寄せた。

「いいか、俺は遊んでんじゃねえんだ。さつさと説明しやがれ。それともあれか？　今から実際俺を食ってみるかこの野郎」

すぐ青木に面喰った瓜生はスツと静かに自分を掴む瓜生の手をほどいた。その表情は先程までとはガラリと変わっていた。

「ボクも遊びだなんて思ってたませんよ。あなたが混乱していたようだから少し時間をとっただけですよ。気を悪くしないでください」

「別に混乱しちやいねえよ。お前の言ってる意味が分からなかっただけだ。で、どういう意味なんだ？」

青木は自分を落着かせようと浅いため息を吐いた。もうどんな話を聞こうが冷静でいる、改めてそう自分を戒めたのだ。

「最初は誰でもそうです。導入が難しいんですよ。この話は。さっきのはこう言う意味です。あなたの同僚を襲った犯人とボクは同じ種族、その可能性が高い」

「種族？」

「そうです。種族。つまりあなた達とは少し違う人間という事です」

「何が違うんだ？　人を襲うってどこか？」

青木は眉間に皺をよせた。いまいち瓜生の話が掴めない。「冗談を言っている様子もないし、青木の方も実のところは未だに現実の話とは思えないでいた。

「進化をどう思います？」

「進化？　進化って猿から人間になったみたいなあれか」

授業中、先生に当てられたみたいに青木は首を傾げた。

「まあそういうことです。地球に生命が誕生して生物は様々な進化を遂げてきました。海から陸へ生活を移すもの、空を飛ぶ事をやめたもの、動物や虫も何万年何千年もかけて進化してきました。人間も道具を使う事から始まりこれだけの文明を築いてきたわけです」

まるで生物の授業だ、青木はそう思いながらも黙って瓜生の話を聞いていた。

「生物学者の中には人間はこれ以上進化しないという人もいます。もしこれが間違いだったら？」

瓜生は青木に問いかけた。

「俺には難しい事は分かん。これから人間がどう進化するのも想像がつかんよ。空が飛べるようになるとか水中で息ができるとか？」

青木はまだ瓜生の話が見えてこない。こいつは一体何が言いたいのか、焦れてはいるが瓜生の語り口に引き付けられつつもあつた。「人知れず、ひっそりと静かに人間が進化していたとしたら？これを進化と呼べるのかどうか我々の中でも意見は分かれてはいますか……」

「話が見えねえな。つまりお前は那人知れず進化した人間の一人ってことか？ 木下が襲った奴も？ 一体どう進化したんだよ。人を襲う事が進化なのか？」

人が人を襲う進化なんかたまつたもんじゃないと青木は吐き捨てた。

それに対し、瓜生は穏やかに「そうですね……」とだけ答えた。その表情はどこかさみしげでもあつた。

しばしの沈黙が車内を包んだ。外はすでに真つ暗になっている。外の静けさと車内の沈黙が重なり合つて、青木はまるで自分がどこか別の世界に放り込まれたような感覚に陥つた。

「どう考えても信じられねえな。そんな漫画みたいな話がこの世の中に本当にあるのかよ？ お前の言うその進化したって連中がゴロゴロいるつてのに世間の連中は誰も知らねえのかよ。そんなもん俺らはライオンがウロついてる所で生活してるもんなんじゃねえのか？ お前らは一体何者なんだ？」

青木は回りくどい事はもうやめにして単刀直入に瓜生に尋ねた。

瓜生はゆっくりと息を吐き、青木の方をむいてニコリとほほ笑んだ。その爽やかな笑顔に同性ながら少し息をのんだ青木だが、負けじと瓜生を睨みつけた。

「ボクらはヴァンパイアですよ、青木さん」

再び青木の思考回路はその動きを止めてしまった。

ヒトとそうでないもの / 2

ヴァンパイア——瓜生の言葉に青木は再び面喰った。もう何を聞いても冷静でいると心構えをしていたものの、さすがにこの言葉は青木を再び啞然とさせた。いきなり『ボクはヴァンパイアです』と言われて、はい、そうですかと納得する人間がこの世にいるのだろうか。場合によっては、そんな馬鹿な話があるかと笑い転げていただろう。だが今はそんな状況ではない。

首を突っ込んだからにはどんな話でも信じなければならない。だからこそ、瓜生の一言で青木は間の抜けた案山子の様な表情になってしまっているのだ。

（こいつ、本気で言ってるのか……）

青木はそう思ったが、今さら瓜生がそんなくだらない冗談を言うだろうかと考え直した。

瓜生の表情は変わらず涼しげである。あなたの知りたがっている事を教えたんだよとでも言いたげな顔である。

「それを信じると？」

青木は柔らかに探りを入れてみた。

「それはあなたの自由だ。ボクは今さら嘘なんか言いません。ただ、信じないなら、信じたくないならあなたはここで別れだ」

そう言つと瓜生は助手席のドアをガチャリと開けた。本当に車から降りる気がない事は青木も感じ取った。

「まあ、待てよ。いきなりそんな事言われてもこっちは混乱してるだ。少し整理させてくれ」

「最初は誰でもそうですよ。この話を聞いた時はね。でも残念ながら段々時間が無くなってきました。急いで整理してください」

瓜生はドアを閉めて再び座りなおした。

（時間が無くなってきたとはどういう意味だ？）

青木は気になったが今はとりあえずその疑問は横に置いておいた。

ヴァンパイアと聞いて真っ先に思い浮かぶのは血だ。色々な映画にも出てくるが、彼らは人間の生き血を好む。ゆつくりと獲物に忍び寄り、首元にガブリ……。その鋭い犬歯で噛みつき生き血を啜るのだ。

血、血、血、——まさか……。

青木は木下が襲われた現場を思い出した。

同僚の細川が不思議がっていた事、木下の失血量に対して現場に残った血の量が明らかに足りなかった——。病院の医師も言いかけた『まるでドラキュラ……』という言葉。

(そういう事が……)

瓜生は言ってる事は本当なのか……ヴァンパイアと呼ばれる連中が存在するのなら現場に血が残って無かった事も説明がつく……のか？ あまりにも馬鹿げている、浮世離れしていると思いつつ、青木は自問自答した。まるで映画の世界に飛び込んだ気分だった。

つまり木下は犯人に血を吸われた可能性があるのか。

青木にはもう選択肢はない。瓜生に確認するしかないのだ。

「ヴァンパイアってあれか、ドラキュラとか吸血鬼みたいな……」

その言葉に瓜生はムツとした。はじめて見せる表情である。

「吸血鬼という言葉は嫌いです。ボクは鬼じゃあない。人間です」

怒りに満ちたその表情は青木を動揺させた。

「ああ、悪かった。ヴァンパイアというのはその……映画とかでよくあるあのイメージでいいのか？」

「あなたの言うイメージがこういうものかよくわかりませんが、基本は大体そうですね」

「大体？ どういう意味だ」

「ボクらは蝙蝠に変身しないし、陽の光も十字架も怖がりません。もちろんニンニクもね。あれは小説なんかの創作ですよ。基本が同じというのは血を欲するという所です」

「だが分らねえな。ヴァンパイアと人間の進化とどう関係あるんだ？ 人の血を吸うのがどうして進化なんだ」

「進化というのはあくまでも考え方の一つです。我々の種族内でも意見は分かれています。まずはそれを頭に置いておいてください」

瓜生は念を押して話を続けた。

「ヴァンパイアの中には大きく分けて二つの意見に分れています。

一つはヴァンパイアはあくまでも遺伝子のイレギュラーで産まれたという考え。つまり突然変異ですね。そしてもう一つがさっき言った進化です。食物連鎖は知ってますね？」

ますます学校の授業だな、青木はそう思いながら「それくらいなら知ってるよ」とだけ答えた。最早瓜生の話を聞くことに集中しているのだ。

「食物連鎖のピラミッドを思い浮かべて下さい。簡単に言えば、最下層が緑色植物、その上が草食動物、次が肉食動物ですね」

身ぶり手ぶり話す瓜生の口調も教師染みてきた。

「この地球上でその食物連鎖のピラミッドを支配するのがヒトです。肉食動物をも動物園で見せものにするくらいですからね」

「まあ考え方によっちゃあそうかもな。人間様が支配してるだろうな」

「ではそのピラミッドの頂点よりもさらに上、つまりヒトよりも上の者がいるとしたら？」

「人間を支配する……それがヴァンパイアってことか」

「我々は人間をヒトとヴァンパイアという風に分けて呼んでいます。

ヒトを食料にする、食物連鎖のトップに立つ種族の誕生、進化です。人間がヒトとヴァンパイアの二つの種族に分れたという考えです」

「ヴァンパイアにとっちゃ、俺らは牛や豚の家畜同然ってわけか」

「だが、先人たちはそれを選ばなかった」

「支配する事を？」

「そうです。確かに一部のヴァンパイアにはヒト＝家畜という考えがあったのは事実です。しかし選んだ道はヒトとの友好でした。当然反発もありましたが」

「そのヒトとの友好に反発した様な連中が今回の様な事件を起こし

たつてわけか」

「ヴァンパイアだからと言って皆が皆、人を襲うわけではありません。ヒトだって犯罪を犯すのはごく一部でしょう？ それと同じ事です。ヴァンパイアの多くはその事を隠して普通に社会で生活しています」

自分が生活している中でヴァンパイアがその素性を隠して生活をしているのを想像すると、青木は恐ろしくも感じた。ヒトの血を好む種族がすぐ隣の家に住んでいるかもしれないのだ。

ともかく青木はヴァンパイアの本質の部分を知り必要があると思いい、瓜生にそれをぶつけてみた。

「とりあえずヴァンパイアって種族がこの世に存在することは分かった。それが進化かどうかなんか俺には関係ねえ。いるんだったらしょうがねえからな、嘘みたいな話だが。」

お前らヴァンパイアはヒトの血を飲む、それが生きるための栄養補給ってことでいいんだな？」

「そうです」

「血液だけなのか？ 人間そのものを食らうわけじゃあないんだな」「もちろん。ヒトと同じように食事をするし、酒やお茶も飲みます。ただそこにヒトの血が加わるだけです」

「じゃあ、お前も人を襲って栄養を摂るのか？」

「摂りません」

「だがお前もヴァンパイアなんだろ？ 血を欲しがる」

「そうです」

「欲しくなりやあ誰かれ構わず襲うんだろ？ 木下を襲った奴の様に」

「襲いません」

狭い車内で青木と瓜生はその顔を向かい合わせ問答を繰り返した。「分からねえな。どうしてあの犯人は人を襲ってお前は襲わないんだ？ 同族なんだろ。いくらヒトと友好を結んだ所で本能には逆らえないんじゃないのか」

「禁じられてるからですよ、青木さん」

「禁じられてる？ 何をだよ」

「人を襲う事を、です」

何をいつてるんだ、こいつはと青木は露骨に嫌な顔をしてみせた。現に木下は今日、襲われているのだ。

瓜生は三本の指を青木に立てて見せた。

「まず、我々ヴァンパイアには守るべき三つの原則があります。襲わない・与えない・話さない。この三つです。まあ三つ目は今回のように例外もありますが」

ヴァンパイアという、未知の種族の三大原則……襲わない・与えない・話さない——。

青木はしばらくその三つの言葉を頭の中で何度も繰り返していた。

ヒトとそうでないもの / 3

「この三つが我々ヴァンパイアとヒトとが交わした密約です。この事を知るのは各国のトップのごく一部のヒトたちだけです。もちろんトップが変われば後継のヒト達へそれは引き継がれます。そして退いたヒトには絶対的なかん口令が敷かれます」

「ヴァンパイアが存在を知ってるのはえらいさんのごく一部とそのOBだけってことか。どうりでいつもこいつも俺が関わる事を嫌がるわけだ」

青木は鼻で笑った。梅田署長や内川がこの件から早く身を引かせようとしたのはこういう訳かと納得したのだ。

青木は内心、“ざまあみろ”とほくそ笑んでいた。最初に連続通り魔の件に俺を選んだのが間違いだ、とでも言いたげである。

「だがよくそんな約束が守れるな。約束破って口を滑らす奴もいるだろ。人間に絶対なんかありえない」

「命に関わるなら別です」

「命に関わるだと？」

「そうです。国を混乱させるという行為は重罪です。実際、中世ヨーロッパではかなりの混乱が起きました。国策に関わる人間は混乱なんか望みません。どこから漏れたか、それを徹底的に探すのも我々の仕事です」

「仕事？」

青木はふと思った。さつきから何か引つかかると思っていたのだ。そういえば、なぜこの高校生が署長室に当たり前のように入ったりしていたのか。それに刑事である青木に何を協力してもらおうと言うのか。署長にしても内川にしても今回の一連の事件を、さも当然のようにこの高校生に委ねている雰囲気があった。警察官である青木には関わるなと言っておきながら、である。

青木はそもそも、この瓜生という男の目的を知らないのだ。

ヴァンパイアというあまりにも浮世絵離れした話に気を取られてしまっていた。

「仕事って……、大体お前の仕事って何なんだ？」

「三大原則を守らせる仕事ですよ」

「守らせる？」

瓜生は分らないかなあ、という風に面倒臭そうに首を回した。

「言わば青木さんと同職ですよ。ヴァンパイア限定ですけど」

法を破った者を取り締まるのが青木のような警察官ならば、ヴァンパイアとしての規則を破った者はヴァンパイアが取り締まる。青木はそう理解した。

確かに捕まえた犯人が“私はヴァンパイアです”と自供しようものなら、何も知らない現場の警察官は呆氣にとられるだろう。

「お前はそのルールを破ったヴァンパイアを警察に代わって捕まえるわけか」

「そう言う事です。我々の先人たちは、ヒトよりも進化した種族だと認識しながら、ヒトを支配する事は選ばなかった。逆にその存在を隠し、この社会に溶け込み、静かに暮らす事を選びました。そしてヴァンパイア達に最低限のルール、三つの原則を守らせるという条件で自分達の存在を確かなものにしたのです。と、同時にルールを破った者をヴァンパイア独自に取り締まるための組織を設けました。それが『ネイヴ』です」

「ネイヴ？」

「ネイヴ」

車内で奇妙なオウム返しが起こった。瓜生も青木も思わずニヤついてしまったが、二人ともすぐに真顔に戻った。

「先人はヒトと交渉に入る以前からすでに下準備をしていました。世界中のヴァンパイアの中から優秀且つ、原則を守る堅い意志を持つ者を選び、訓練しながら時を待っていたのです」

「ちよっと待ってくれ。少しばかり質問をしていいか？」

「……どうぞ」

瓜生は青木の方へ指先を向け、

「これまでのお前の説明の中で聞きたい事は二つ。まず、さっきお前は人間の進化と言った」

「ヒトから進化した者です。我々は人間を大きく一括りにしてヒトとヴァンパイアの二つに区別しています。ヒトの進化です」

瓜生が丁寧に訂正した。青木は何も構わず続ける。

「ヒトの進化だ。お前と俺、見た目は何も変わらない。そりゃあお前は女に不自由しない容姿で俺は真逆だ。だが普通の人間だ。どう進化したんだ？ ヒトの血を飲む事の何が進化なんだ？」

青木なりの軽い冗談を交えて質問したが、瓜生はほとんど表情を変えない。

「ほとんど変わりません。だからこうやって社会に溶け込んで生活できるんです。ただ……ただ、多少五感と運動能力がヒトよりも上という事くらいです。個人差はありますがね。中には百米メートルを五秒で走るヴァンパイアもいるとか」

青木は昼間の逃げる犯人の姿を思い浮かべた。脚力には自信がある方だったが、あの黒いフードの後姿がどんどん遠ざかっていくのは、自分の重ねてきた年齢のせいなのかと思っていた。だがそれだけではなかったようだ。

「そいつはすげえな。オリンピックにでも出りゃスター間違いなしだ」

「そこです」

瓜生が突然声をあげた。

「そんな事をすればヴァンパイアが存在が世間に漏れるのは時間の問題だ。ヴァンパイアの力を使えばスポーツの世界では簡単にトップに立てる。それを取り締まるのも『ネイヴ』の仕事です」

「じゃあどうする？」

「どの競技でもやってるでしょう？ ドーピング検査です」

「ドーピング検査でヴァンパイアと分るのか」

オリンピックの時期になると良く聞く単語である。

「もちろん不正薬物使用してないかの検査です。その検査の中にヴァンパイアの反応がでるもの含まれているということです。これで陽性反応が出れば……」

「『ネイヴ』がしょっぴく……」

「その通り」

瓜生が口元を弛めながら頷いた。

ヒトとそうでないもの / 4

青木は五感や身体能力の向上が、瓜生の言うヒトの進化だとしたら、それは進化と判断する材料しては多少弱いと感じていた。

青木にとって進化というのはもっと想像もつかないとてつもないものと考えたからだ。瓜生の説明ではただの血を吸う運動神経のいい人間としか捉えられなかった。

だが、ヒトよりも腕力や瞬発力が優れているのだとしたら木下があつという間にやられたのにも多少納得がいった。

「お前らの進化は分かった。二つ目の質問だ。世界中にヴァンパイアがいるとお前は言ったが、なんでそんなに世界中に広がって言ったんだ？ 始まりはヨーロッパだったんだろう。俺にはお前は日本人にしか見えないんだが」

世界中に組織を作るというくらいだからヴァンパイアの人口も百人、千人単位じゃきかないのだろうと青木は考えた。

現に青木の知る限り、最低でも二人のヴァンパイアがこの九州の熊本に存在しているのである。

地球全体の人口から考えると、すでにヴァンパイアは相当数、存在するのではないか。そう想像すると青木は背筋が寒くなった。

「その辺のヴァンパイアの歴史は後ほどお話ししよう。恐らく今夜はもう一人二人、レクチャーしないといけませんから」

瓜生はすっかり暗くなった窓の外に目線を泳がせた。

青木にはその意味が分からなかった。一体誰にレクチャーする気なのだろうか。

つまりは今夜その時に青木も瓜生の言うその一人二人と一緒に空間に確実にいるという事なのだろうか。

「簡単に言っておくと、ヨーロッパを追われて世界各国に安息の地を求めたんです。その時に先人達は少しずつ仲間を増やしていったんです」

「それが日本にも流れ着いたってわけか。こんな九州の田舎にまで東京みたいな都会の方が人も多いしヒトも襲いやすいんじゃないか」

「もちろん東京や大阪のような都市部に『ネイヴ』の拠点はあります。人口が多い分、ヴァンパイアの数も多いですからね。地方の方が『ネイヴ』の目が届かない、届きにくいのも事実です。沖縄なんかはまだヴァンパイア人口は少ないんです。その分犯行自体も今のところ報告されてません。時々米軍のヴァンパイアが事件を起こすことはありますが」

「お前らはヴァンパイア人口をしっかりと把握できてんのか。そこをしっかりとしないとヒト側のエライさん達も納得できねえだろ」
「もともとある程度は把握しています。それも『ネイヴ』の仕事です」

「役所みたいなこともお前はやってんのか」

青木の問いに瓜生は首を横に振った。

「『ネイヴ』の説明に戻りましょう。『ネイヴ』は大きく四つの部署に分かれています。」

“ハート” “ダイヤ” “クラブ” そして “スピード”

「ふん、まるでランプだな」

青木が鼻で笑うのを横目に瓜生は続けた。

「青木さんの言うようにヴァンパイアはランプをベースに分けられています。始祖ヴァンパイア、つまり最初のヴァンパイアの子孫をキング。そうでない八人の幹部をクイーン。そしてキングとクイーンに仕えるのがジャック、それが『ネイヴ』です。『ネイヴ』とは元々古い英語でランプのジャックを意味します。日本語に訳すと“仕える者”」

「まさにお前はキングに“仕える”わけだ」

皮肉交じりに青木は言ったが瓜生の方はそんなもの気にもしていない。

「で、お前はどの絵柄なんだ？」

青木がそう尋ねると、瓜生は後ろ髪をかき上げて青木に示して見せた。耳までかかるうかという少し茶色がかった髪の下、ちょうど左耳の後ろ辺りにそのマークはあった。

「……スピードか」

覗き込むようにして青木がつぶやいた。

「マークを彫る位置は人それぞれですけどね。ボクはこうして学校に潜入する事があるのでそう目立つ場所には彫れませんから」

「スピードは現場で犯人を捕まえるのが仕事か」

「平たく言えばそうですね。潜入、捜査、逮捕。今回のように学校や警察に裏から手を回したり情報を操作するのがダイヤの仕事です。さつき会った枕崎さんなんかがそうですね」

瓜生が指で煙草を吸う仕草を試みせた。

（あいつもヴァンパイアか。あのヒトをイラつかせる態度はどおりで人間離れしてるはずだ）

青木の脳裏にあの煙をくゆらせる憎たらしい男の顔が浮かんで、またさっきの苛立ちが甦ってきた。

「ダイヤと警察は太いパイプでつながっていて、全国のどんなに小さな出来事でも『ネイヴ』に情報が入ってきます。そこからヴァンパイアが関連していると疑わしいものに派遣され調査するんです。それでシロなら警察、クロなら『ネイヴ』が動きます。これは世界各国共通です」

「たいしたもんだ。よくまあこれまで一般人にバレなかったもんだ」

「口止めや情報操作もダイヤの仕事ですからね。枕崎さんはああみえて優秀な人ですよ。多少性格に難がありますが……」

「多少どころじゃなさそうだ」

まだほんの数回しか会ってないが、青木は相当、あの枕崎が気に食わないのだろう。青木の性格もやっかいなもので、初対面の時のイメージが悪いと、ずっとそれを引きずって目も合わせなくなるのだ。

『ネイヴ』の話がひと段落したところで、青木も少し落ち着いたのか、先程瓜生が買ってきてくれた缶コーヒーに手を伸ばした。

すっかり乾いてしまっていた喉に濃いカフェインが流れ込み、一時は混乱した青木の脳も正常運転に戻っていた。

すでに駐車場に車は青木の他に二台あるだけで、帰宅を急ぐ車のヘッドライトが忙しく江津湖沿いに動いている。

「で、お前らはどうやって増えるんだ？」

残りのコーヒーをぐいっと飲み干し、青木は尋ねた。

「同じ人間だから変わりませんよ。男と女、することは一緒です」

瓜生は窓の外を見つめながらさりと答えた。

「そうじゃねえよ。それだけじゃそんなにヴァンパイアの数が増えねえだろ。子供を産むとかの話じゃなくてヴァンパイアを増やす方法さ。それがあるんだろ？　そうでないや『ネイヴ』みたいな組織が世界中に作れるわけがねえ」

青木は空になったスチール製のコーヒーの缶をぐしゃりと握りつぶした。ペコンと間の抜けた音が車内に響く。

「噛まれた木下も晴れてヴァンパイアの仲間入りなのか？」

昔、青木が見たヴァンパイアの映画では、噛まれた人間はしばらくするとヴァンパイアになってしまふ。そして新しくヴァンパイアとなった者はまた血を求めて人間を襲う……。

もし木下がヴァンパイアになってしまったのならこれから先、警察の人間として生活していけるのか、瓜生の話を聞いているうちに、青木はそれが不安になってきた。

「残念ながら……」

瓜生は打つ向き気味に首を振った。

青木はふうつとため息をつき、座席のシートにもたれかかり「そうか……」とだけ答えた。

その様子をみた瓜生が突然、くくくと笑いだした。

「残念ながら血を吸われてもヴァンパイアにはなりませんよ、青木

さん。最初に言ったでしょ。映画とかのはほとんどが創作だって」
クスクス笑う瓜生を見て、からかわれたと気付いた青木は完全に頭に血が上ってしまった。

「てめえ……」

殴りかかりこそしなかったが、やはりヴァンパイアという得体のしれない連中は信用できないと、青木は改めて確信した。

ヒトとそうでないもの / 5

「すみません。ちょっとした冗談ですよ。そんな怒んなくても……」

「こんな時に笑えねえんだよ、馬鹿野郎」

青木は怒りを抑えながら叱責した。

「硬いなあ、青木さんは。木下さんは大丈夫ですよ。まあ、もう少し血を吸われたら危なかったのは確かですけど」

「お前らはそんなに簡単にヒトを殺せるのか。あの短時間で体中の血を吸いとれんのかよ」

拗ねた子供のようにそっぽを向いた青木は、瓜生の方を見もせず
に尋ねた。

「よほど渴いていたか、慌てたんでしょね犯人は。まあ失血死させるほど血を吸う力がありますよ。大体は死なないように加減するんですが。ヒトは血を吸われるとしばらくの間、体の自由が利かなくなるんです。正座して足がしびれるように体全体がしびれた様になっちゃいます」

「その間に犯人はとんずらするわけか」

「木下さんはすごいですよ。襲われた後にあの茂みを自力で歩いたんですから。たいしたもんです」

瓜生は腕を組み、なにやらうんうん頷いている。

「元気になったら伝えとくよ」

負けじと青木も鼻で笑った。

「さっきの増え方の話に戻りましょう。それは三原則の二つ目、
“与えない”に繋がるんです」

ヴァンパイア講習は続く。

「ヴァンパイアとヴァンパイアの子供は当然、ヴァンパイアです。

厄介なのはヴァンパイアとヒトの場合です。これは子供がヴァンパイアの場合もあれば普通のヒトの場合もあります」

「そのどこが厄介なんだ？」

「隔世遺伝、つまり孫やひ孫がヴァンパイアの場合があるんです。この場合はこちらとしても把握しにくい。つまり突然、ヴァンパイアに目覚める場合があるんです」

「『ネイヴ』が把握してる数よりも実際のヴァンパイアは多いってことか」

「潜在ヴァンパイアを考えると多い可能性はあります。ヴァンパイアの子供は小さい時から三原則などある程度は教育されますけど、突然目覚めた場合、我々は覚醒と呼んでますが、この場合はある日突然、ヒトを襲う可能性があるので。何も知らないわけですから」

「おっかねえ話だ」

青木はゾツとした。やはりヴァンパイアの存在など一般人は知らない方がいいのだと改めて感じたからだ。

社会全体が潜在的なヴァンパイアを疑い、疑心暗鬼となり、それこそ世界はパニックになっってしまうだろう。

ヒトとヒトとの信頼関係など脆いもので、一度でも疑い、信用を無くせば、ほつれた糸の如くどんどん広がっていつてしまう。

警察という特殊な職場にいるせいかな、そういった危うい人間関係を青木は何度も目にしてきた。

「まあ一応、我々もチェックをしていますが全部を把握するのはなかなか簡単ではないですからね。一般的に繁殖方法はヒトとなんら変わりません。問題はもう一つの繁殖方法です」

「やっぱりなんかあるのか」

青木にとってはそっちの方が大事なのである。

男女の交わり以外の繁殖方法があるのだとすれば、世界中のヒトをヴァンパイアと変えてしまう事が可能なのではないか、不安はそこにあった。

瓜生は親指で自分の胸を差し、

「血ですよ」

と答えた。

「血？ お前の、つまりヴァンパイアの血か」

おかしい話である。

ヴァンパイアは己の渴きの為にヒトの血を欲し、そのヴァンパイアになるためには逆にヴァンパイアの血が必要だと言うのである。

青木は笑いながら、

「例えば俺がヴァンパイアになりたけりや、お前の血を飲めばいいってわけか。それともお前の血を輸血するか？」

そういいながらバカバカしいといった風にまた窓の外へ顔を向けてしまった。

「輸血じゃ駄目です。飲まないと。ほんの一口でもいい、血を飲むんです」

「たったそれだけで進化の出来上がりかよ」

「そうなるんだからしょうがない。輸血してヴァンパイアの血が体に入ってもヒトの血と同化して影響はないんです。胃の中に入れる事で吸収しヴァンパイアとなるんです。個人差があつて人それぞれですが、早ければ三十分」

「自分で分るのか？ ヴァンパイアになった事が」

「しばらくは眩暈がします。そして渴きをおぼえる。場合によっては暴走し、ヒトを襲ってしまう」

「それが三原則の“与えない”か」

「そうです。逆に潜在ヴァンパイアがヴァンパイアの血を口にすると激しい腹痛と吐き気に襲われます。だから共食いはできないってわけです」

「よくできてるな」

青木は思わず感心した。

「だが待てよ。それじゃあ世界中のヒトに血を飲ませりゃあいいじゃないか。そしたらヴァンパイアの世界だ。今みたいにこそそしなくて済む」

素朴な疑問だった。

が、瓜生はそれを聞いてこれまでにないくらいの笑い声をあげた。「面白い事言うなあ青木さんは。みんなヴァンパイアになったら誰

の血を飲んで生活するんですか。ヴァンパイアの数はいくら少ない方がいい。食料の取り合いが起きないで済むんですから」

そう笑いながら話す瓜生を見て、青木はこいつはヒトとは違う、本物のヴァンパイアだという事を再認識させられた。

こいつらにとってヒトは所詮、食料のただと、およそ人間離れした感覚をヴァンパイアという種族は持っているのだろう。

「俺らにとっちゃ笑いごとじゃすまねえんだがな。まあそれはいいや。しかし三原則の“襲わない”はどうなる？ ヒトを襲わなければあおまえらはおまんまの食いあげじゃねえか」

俺らは食糧なんだろ、と青木は皮肉交じりに瓜生に尋ねた。

瓜生は気にもしていない。

「『ネイヴ』の戸籍に登録していれば月に一回、冷凍された血液が支給されます。二回目からは有料ですが」

「なんだそりゃ。どつからそんなもん支給されるんだ。どつかの馬鹿が善意でくれるのか」

青木は喰ってかかる。

「ヒトがなんの疑いもなく血を提供してくれる場所があるでしょう？」

「血を提供……献血か！」

瓜生はニヤリと頷いた。

「もちろん献血されたものの全部がヴァンパイアに回ってくるわけじゃないですね。その一部です。全部回していたらそれこそ輸血用の血が足りなくなりますからね」

「そんな馬鹿な……そんなことが許されてんのかよ」

青木は愕然とした。街中で「血が足りません」という看板を目にした事があるが、まさかヴァンパイアの腹の中に収まっているのか。そう思うと怒りさえ湧きあがって来る。

「襲われるよりマシでしょう？ 平和な社会を作るためです」

平気な顔をしてそう言うてのける瓜生の顔を、青木はしばらく間睨み続けた。

ヒトとそうでないもの / 6

（こいつらの感覚は普通じゃねえ。なにがあっても仲良く一緒に生活なんてできるわけがねえんだ）

瓜生を睨みながら青木は腹の底からヴァンパイアに対する不信感を強くしていた。

ヒトが善意で行っている献血をさも当たり前のように自分達のものにしているのである。

「そんな怖い顔しないでください。仕方ない事なんです。献血の血がなければこの世は飢えたヴァンパイアの暴走が起こる。それこそ社会は混沌に陥ってしまう」

「輸血の血が足りなくなっただけです。え？ 珍しい血液型は？ 何もかもお前らが優先されるのか？ どうかしてる」

青木は今日初めて瓜生に対して声を荒げた。

「もちろん人命が優先です。珍しい型の血液は配布されませんし。その辺はご心配なく。ただRHマイナスの型はおいしいらしいですけど……」

この期に及んで瓜生はおどけてみせた。当然今の青木には神経を逆なでする行為である。

「この化け物め」

その言葉に瓜生の顔は固まった。

その時ブーンと鈍い振動音が車内に響いた。

青木はズボンの携帯電話を確認したが、自分のものではない。

すると瓜生が自分のポケットから二台の携帯電話を取り出した。

その片方が振動音とともに小刻みに震えている。

「失礼」

瓜生は携帯電話を開き、なにやら画面を確認している。

暗い車内で、画面の光が反射している瓜生の横顔を見ているところの少年が血をすすっている姿など想像もつかない。

ふと時計に目をやると時刻はすでに八時を回っていた。

非現実な話を目の当たりすると、時間の流れさえも早くなってしまうのか、青木は深く息を吐き、固まってしまった腰を軽く伸ばした。

「時間です」

瓜生はボタンと音を立てて折り畳み式の携帯電話を閉じた。

「時間？ 何の事だ」

その問いには何も答えず、瓜生は一枚のメモを青木に差し出した。

「ボクをこの住所へ送ってください。この近くのはずです。のんびりしました。時間がありません」

メモを受け取ると住所と名前が書かれていた。もちろん青木には見覚えのない名前だ。確かにここからなら車で十分とわからない距離である。

「この家は何だ？ 今回の件と何か関係があるのか？」

「説明してる時間はありません。とにかくここへ」

そう言うとな瓜生は早く車を出せ、と言わんばかりにシートベルトを締め直した。

青木は言われるがままに、その住所へと車を走らせた。

瓜生の指示した住所までの道中、二人は一切目も合わせず口も開かなかった。

この数時間で、初対面だった二人の間の溝は深くなってしまっているようだ。

署を出た頃と比べると車の流れはスムーズで、江津湖から五分程度でその住所までたどり着いた。

そこは閑静な住宅街で、人通りも少なく、街灯の明かりだけが道沿いに点々と灯ってみせていた。

メモに書かれた住所の家は、どこにでもあるごく普通の二階建ての一軒家だった。

一階の、おそらくリビングであろう部屋の明かりだけが点いている。

「着きましたよ、お客さん」

ハザードランプを付け、車を路肩に寄せると青木はわざとそう言ってみせた。

「どうも。それでは青木さん、確認です。ボクに協力してくれますか？ 答えがNOならそれでも構いません。今日、耳にした事は他言無用です」

青木はすぐには答えなかった。答えられなかったと言った方が正しいのかもしれない。

初めのうちは木下の件もあり、犯人逮捕に積極的だった青木だったが、瓜生の話を聞くうちに、その気持ちは多少萎えてしまっていた。

ヴァンパイアという得体のしれない者に対する恐怖心や、その事を知ってしまった後悔などではなく、ただ単純にヒトを食料と見下しているヴァンパイアという生物に対して嫌悪感を抱いたのである。そんな者に対し、果たして協力できるのかと、頭の中で葛藤を続けていた。

「ボクの携帯電話の番号とアドレスを教えときます」

まだ答えの出ない青木は狼狽した。

「ちょっと待て。俺はまだ協力するとは言ってねえぞ」

「大丈夫です。あなたは協力してくれますよ」

瓜生は自信たっぷりにニコリと笑った。その笑顔は憎たらしいほどに爽やかである。

「お前、勝手なこと……」

そう言いかけた青木を瓜生は手のひらを広げて静止した。

「ああ、はいはい。もう言い合ってる時間はありません。最初にあなたに会った時にボクは確信したんです。あなたは大丈夫だろう、と」

「ふん。いい加減な事を言うな。それともあれか、ヴァンパイアの

勘か？」

「そんなものじゃないですよ。木下さんが襲われた件でもあなたは感情だけで動かなかった。だから得体の知れない高校生に黙ってついて来た」

「俺くらい感情で動く奴はいないと思うがな」

「それに残念ながら、これまで何人もの警察関係者が事実を知ってしまった為に精神を病んでしまいました」

「なんだと？」

「あなたの様に協力してもらったために事実を話しても聞く耳を持たない人や、聞いてしまったが為に人間不信、疑心暗鬼に陥り……」

確かに世の中に密かにヴァンパイアが潜んでいるという事実を知れば、自分の親や子、親戚や友人、果ては隣近所、すれ違う他人までもがヒトではない生き物なのかもしれないと疑ってしまうのも無理はない。

一度疑ってしまえば、その疑心という穴を埋めてしまう事は容易ではないだろう。精神を病んでしまった者には同情すらおぼえる。

青木自信、この先これまで通り普通に生活できるのかも分からないのだ。

「俺なら大丈夫そうだと？」

青木が尋ねると、またしても瓜生は爽やかな笑顔を見せつけ、

「そんな柔な人には見えませんでしたからね」

そう言う助手席のドアに手をかけた。

「勝手な野郎だ」

青木はそう悪態をつくのが精いっぱいだった。

「青木さんはこれから坪井高校に向かってください」
降り際に瓜生は言った。

「坪井高校？」

青木の声は思わず裏返った。そう言えば瓜生の制服も確か坪井高校の制服だったことに今気がついた。

「そうです。場所は分かりますね？ そうだな……九時五分、いや

十分くらいがいいな。

「明かりが点いてる教室があるはずです。そこに行ってください」
戸惑う青木の耳にボタンとドアを閉める音が聞こえた。青木は慌てて助手席側の窓を開ける。

「おい、そこに行つてどうするんだ？ 俺は何をすればいい？ 大体今回の件と何か関係があるのかよ」

瓜生は時間が惜しいといった素振りでも面倒くさそうに窓を覗き込んで、

「大あります。急がないと最低でも一人、最悪三人の犠牲者が出ます。見つからないように行ってくださいね。そこでの状況次第でどう動くかはあなたの判断に任せます。一応銃も携帯して行つた方がいいかもしれない」

ボクもすぐに向かいますから、と言い残して瓜生は足早に目的の家に向かつて行つた。

残された青木はしばらく瓜生の小さくなっていく背中を見つめていた。

「銃だと？ えらく物騒じゃねえか。一体何があるってんだ」

独り言を呟きながら青木はエンジンをスタートさせた。

坪井高校と聞いて、そう言えば交番の警官が怪我した小学生を連れてきたのも、確かあの高校の生徒だったという話を思い出した。

「ただの偶然か」

今夜、あの学校で一体何があるのか、何の説明もなく指示されたが、首を突っ込んだからにはとりあえず言われたとおりに動くしかない。犠牲者が出ると聞いたなら尚更だ。

説明はあとからたっぷりあの小生意気なヴァンパイアに聞けばいい。

青木の表情はすでに刑事のそれになっていた。

途中、署に銃を取りに戻るかとも考えたが、休暇扱いだし、捜査一課の連中と顔を合わせるのも面倒だと思ひ直し、青木は瓜生に言われるがまま坪井高校へと車を走らせた。

今夜、暗い学校で

馬原啓介は夜の学校にいた。正確には自分の通う坪井高校の正門の前に立っていた。

時間は八時五十分。大久保沙耶との約束の時間には十分ほど早い。予定ではもっと早く家を出て江津湖にでも行つて心を落ち着かせようと思っていたのだが、着ていく服を悩んで、結局家を出たのが八時半すぎ。

自宅から学校まで普段なら三十分はかかるので心を落ち着かせる暇もなかった。

家を出た際、丁寧にも「今家を出た」という旨のメールを沙耶に送った。

ひよつとして学校までの道すがら、沙耶とばったり会わないかと思つてメールを試してみたのだが、姿を見ることはなかった。

乗ってきた自転車を目立たないように正門から少し離れた所に置き、啓介は沙耶が現れるのを今か今かと待った。

辺りはしんと静まり返り、闇にそびえたつ三階建ての校舎は、昼間に見るそれとはまた違った顔をのぞかせていた。

校舎や体育館の明かりは消えていて、人のいる気配は感じない。ぼつんぼつんといくつかの校内の街灯だけが小さな光を放っているだけだった。

啓介はズボンのポケットから携帯電話を取り出し、表示されている時計に目をやった。すでに九時を五分ほど過ぎている。

（デートの待ち時間とはこんな感じなのか……）

初めて体験する孤独な時間を啓介は噛み締めていた。このまま何時間でもこの場所で沙耶を待ち続けれる様な気さえした。

それほど啓介にとってこの時間は貴重で、孤独に酔える瞬間なのだった。

唯一心配だったのは、暗い学校の前に一人立っている事で不審者

に間違われはしないだろうか、ということだった。

啓介は学校に背を向け、校門にもたれかかり、夜空を見上げた。雲の流れは早く、さっきまでの雨が嘘のように、空には小さくだがいくつかの星も確認出来た。

冷静に考えれば、わずかな明かりと静けさに包まれた学校の前に一人立っている。

元々気が小さく、臆病な啓介が長時間この状況に耐えられるわけがない。

沙耶との約束で少々興奮していた啓介の頭は、初秋の涼しげな風に吹かれてその臆病さが顔を覗かせつつあった。

学校の窓に何か動く物が映ったのではないか、音楽室からピアノの音が聞こえてくるのではないか、などと一人待つ間につき余計な事を考え始めてしまうのだ。

その時、

「啓ちゃん」

突然背後から声を掛けられ啓介は飛び上がった。人間、本当に驚いた時は声も出ないのだろう。

振り向くとそこには沙耶がいた。彼女はすでに校門の内側にいる。「こんばんわ」

こちらにニコリと微笑みかける沙耶の顔に、啓介の心臓は驚いた事と重なってその動きを激しくした。

校内の沙耶と郊外の啓介、校門を隔てて二人は対面した。

啓介には、その校門がまるで二人の間を分かち最大の障害物の様にも感じられた。

思えば昨夜、思わぬ不意打ちで口づけをかわしてから初めて顔を合わせたのだ。

たった一日しか経っていないはずなのに随分久しぶりに沙耶の顔を見た気がした。

学校で合わなかった分、沙耶に会えた喜びと同時に照れくささが同居した啓介の顔は紅潮していた。幸いにもそれは、街灯の小さな

明かりだけでは沙耶に気付かれる事もなかった。

平常心を装いつつ、啓介は廻りの静寂に気を遣いつつ沙耶に囁いた。

「びつくりした。おどかすなよ」

「ふふ。ごめんごめん。だって啓ちゃんがぼつんと立ってるからちよつと驚かせようと思って」

沙耶はそう言っていたはずの子の様に微笑んだ。

「学校に入って大丈夫なのか？」

すでに校内に侵入している沙耶に啓介は不安げに尋ねた。

「大丈夫だよ。門はいつも開いてるし、警備員なんかいるわけないし。今日は先生達も皆早くに帰ったみたい」

学校の周りには住宅もあるから二人の会話は小声である。

「啓ちゃんもおいで」

指先で小さく手招きする沙耶に、啓介はまるで催眠術にかかったようにフラフラと校内へ導かれた。

「こんばんわ」

学校の門をくぐり、目の前まで来た啓介に沙耶が改めて挨拶した。間近で見る沙耶は普段学校で見る制服姿とは違って、淡い色シャツに短めのスカート姿、そして顔にはほんのりと化粧をしていた。

目の前で見つめられ、啓介は思わず視線を逸らした。

「いつの間に来てたんだよ」

「啓ちゃんが来る前だよ。一人で校庭の方、ぶらついてたんだ」

「校庭？ 一人で？」

啓介は驚いた。とてもじゃないが一人で夜の校内をうろつく度胸は自分には無い。

「よく一人で行けるな。夜の学校なんか気味悪いだろ」

呆れながら言う啓介に沙耶が口元を緩めた。

「あれー、もしかして啓ちゃん恐いんだ？」

「べ、別に恐くはないさ。でも誰がいるかわからないだろ。こんな暗いところに女の子一人で……」

男という生き物は惚れた女の前では見栄を張る生き物なのだろう。必死に取り繕う啓介を見て沙耶はクスクスと笑った。

「そ、そんなことよりどうしたんだよ。学校休んでこんなところ呼び出して」

話題を変えるのが精一杯なのである。

沙耶は何も言わずくると啓介に背を向け、小さい歩幅で一步、また一步と足を踏み出した。

気のせいかな、啓介には少し淋しげに映った。だから啓介も何も言わずその背中を見ていた。

そして数歩行った所で急に踵を返し、たたと啓介の方に走って来たかと思うと、

「行こ、啓ちゃん」

そう言っただけで啓介の手を取り引張った。

虚を突かれた啓介は手を取られ、言われるがまま引張られていった。

「行くって……どこへ？」

手を取る沙耶のスピードは次第に速くなり、啓介もいつの間にかそれに合わせてかけ足になっている。

「せっかく学校に来たんだよ？ 校舎を探検するに決まってるじゃない」

啓介は自分の耳を疑った。

（校舎だって？）

手を引張られながら啓介は夜の闇にそびえたつ黒い校舎を見上げた。

肝試しには季節外れだ、そんな事を考えたが、夜の学校と沙耶と二人きりの夜、天秤にかけた結果がどうなったかなど、答えは火を見るより明らかだった。

今夜、暗い学校で / 2

二人は校門とは反対側の校舎への入り口前まで来た。

急に小走りになったせいで二人の呼吸は少し乱れていた。

手はまだつながれたまま。沙耶は気にもしてないが啓介の方も当然のことながらそうではない。

何年も声を掛けられず、ただただ遠くから見ていた存在が、この二日間でその距離が急激に近づき、戸惑いを隠せないで、沙耶に握りしめられた手をただじっと見つめているだけだった。

沙耶はそんな啓介を背に、ガラス張りのドアの中を物色するかのようにジロジロと覗きこんでいる。

「本当に入る気か？」

ここまで来て往生際の悪い男である。

沙耶の背中越しに見える校舎内は当然真っ暗で、非常口の緑色した明かりがぼんやりと見えるだけだった。

啓介の情けない問いに、振り返った沙耶の顔は、半ばあきれ顔である。

「まだそんな事言ってるの？ 何か悪い事してるみたいでわくわくするじゃない。啓ちゃん、先に行つてよ」

「え？」

沙耶は手を離し、啓介の背中を押す。

「ちょ、ちよつと待つて。これ勝手に開けたら警備会社とか来るんじゃないか？」

慌てた啓介は沙耶に押されながらも、入り口横の壁にある銀色のカードの差し込み口に気がついた。それには緑のランプが灯っている。

最近の学校はセキュリティを警備会社に任せていて、何か異変があれば警備員が飛んでくるらしい。

その緑のランプが何を意味しているのか、啓介には分らない。

「これ無理やり扉開けようとしたら警備員が来るんじゃないかな」

「ふうん。やつぱり啓ちゃん中は中に行きたくないんだ……」

沙耶はわざと淋しそうな顔をしてみせる。啓介は動揺した。

「いや、行きたくないわけじゃないよ。警備の人が来たらまずいかなあと……」

「来た時は来た時よ。その時は逃げればいいの！」

小・中学と大人しく控えめだった沙耶が、高校でこうも変わるものかと啓介は感心した。

同時にそれに比べて臆病で小心者のまま、何も変わらない自分に嫌気がさした。

「啓ちゃん、運だめしよ。鍵が開いてるか閉まってるか。もしかしたら先生達、閉め忘れてるかも」

鍵を閉め忘れる事なんてまあないだろうと啓介は扉の取っ手に手をかけた。鍵がかかっていれば沙耶も中に入るのは諦めるだろうと淡い期待を抱いて。

肩に力を入れ、取っ手に体重をかけるように扉を押す。すると扉は拍子抜けするくらいの軽さで静かに開いた。

「あ、開いた」

「やったね啓ちゃん。今日はツイてるのよ」

沙耶はまだ取っ手をにぎった啓介を追い越し、喜びながら跳ねるように校舎へと足を踏み入れた。

「探検よ、啓ちゃん」

暗い学校の廊下ではしゃぐ沙耶を見て啓介は、

（沙耶と一緒にだし、いいか）

と、薄気味悪さは変わらないが沙耶と一緒にいれるという喜びに気持ちを切り替え、ゆっくりと沙耶の方へ歩を進めた。

沙耶は微笑みながらそれを迎えるように手を広げ、再び啓介の手を取った。

今度は啓介も動揺は無く、ぎゅっと沙耶の手を握り返した。

暗い校舎の中を二人は手を握り、足音を殺しながら静かに歩きだ

した。

隣にいる沙耶からほのかに風呂上がりのいい香りがする。

啓介はそんな沙耶を横目で見ながら、

（なんだか喉が渴いたなあ……）

そんな事を考えていた。

夜の学校はしんと静まり返り、昼間よりも幾分かひんやりと涼しげだった。

この字型した坪井高校の校舎を二人は端から端まで歩いて二階へと階段を上った。

初めのうちは気味が悪かった薄暗い学校も次第に目が慣れていき、この空間に沙耶と二人きりという幸福感に包まれているせいか、恐怖感も次第に薄れていった。

「なあ、沙耶」

階段を上がりながら啓介が口を開いた。

「どうして夜の学校なんか呼び出したんだ？ 今日学校も休んだみたいだし」

「うーん……なんでだろ」

「なんでだろって……」

「思い出、作リたかったからかなあ」

「思い出？」

沙耶は少し淋しげな表情を見せた。

「私、昔暗かったし、友達も少ないじゃない？ 高校来てもそんなに友達できてないし……」

小学校から沙耶の事を知っているが、確かに沙耶はクラスの中にいるような明るい子ではなかったし、高校に進学してもこれといった女友達と談笑する姿を見かけたこともない。

だが、それは啓介も似たようなもので、クラスで目立つタイプじゃないし、友達も多いわけではない。

そんな所も含めて啓介は沙耶に好意を寄せているのだ。

「……熊本を引越す前に思い出——どんな小さな事でもいいから思い出を作りたかったの。ごめんね、啓ちゃんを無理につき合わせたりして」

沙耶がスツと手を離し、二人を結んでいた手がほどけた。

決してそんなつもりで尋ねた訳ではない啓介はうるたえた。

「そ、そんなことないさ。無理にじゃないよ。なんて言うかその……気になったんだ。こうして一緒にいれる事は……うれしいし——」

手を離され必死に取り繕うが、結局後半部分は蚊の羽音の様に小さくなって恐らく沙耶の耳には届いていないだろう。

沙耶は立ち止まった啓介を置いて一人廊下を歩いて行ってしまった。

ぬくもりを失くした自分の右手を残念そうに眺めながら啓介は沙耶の背中を追った。

沙耶は特にどこかの教室に立ち寄るでもなくただただ、廊下をゆっくり歩いて行く。

時々窓の外に目をやる事はあるが、立ち止まることもない。

手を離されてから啓介は何を言うでもなく沙耶の後ろをついて歩くだけだった。

相変わらず校舎内は物音ひとつ無い、静寂に包まれている。

この静寂が啓介には辛かった。自分の尋ね方がいけなかったのか、それが沙耶の機嫌を損ねてしまったのか——。

沙耶に何と話しかけていいのかも分らず、目に入っているのは同じリズムで揺れる沙耶の背中だけだった。

二階の廊下も端から端まで歩き、三階への階段まで来たところで沙耶は立ち止まった。

「あ」

その声に啓介は驚いた。自分の耳に随分長い事、音という刺激を感じていない気分だった。

「これ……」

沙耶が指さす方に目を向けた。その先には沙耶のサンダル履きの足。

「土足だったね」

ぺろっと舌を出し微笑む沙耶の表情を見て、啓介はほっとしたと同時に、喉の渇きが激しさを増した。

まだ俺は緊張してるのか、啓介は渇きの理由はそのせいだろうと自分で納得していた。

今夜、暗い学校で / 3

二人は三階へ階段を上がっていた。

啓介はいつまた、沙耶が手を握ってくれないだろうかと期待しているが、二人の間には数十センチの距離ができたままだった。その距離が啓介にとって、ものすごく長い距離に感じ、もう縮まる事はないのではないかと思えて仕方なかった。

階段を上ると一年生の教室が並んでいる。

「ちよつと休憩」

そう言つと沙耶は廊下にある冷水器まで行き、水を口に含んだ。

啓介も沙耶と会つてからやけに喉が渴いていたので沙耶に続いて喉を潤す。よく冷えた水が渴いた喉を通り、胃に染みわたっていくのがよく分かった。

よほど喉が渴いていたのだろう、何口も口に含み顔を上げると横では沙耶がニコニコとこちらを見ている。

「これでもいい出……」

そう言つと沙耶はおもむろに顔を近づけ、唇を重ねてきた。

今日も昨夜の様に不意打ちだったが、啓介にも二回目ということに余裕ができたのだろう。両手を沙耶の背中に回し、体を優しく抱きしめた。経験というものは、時に人をこつちも成長させるものなのだ。

それに応えるように、沙耶のか細い腕にもわずかに力が込められ、啓介の体を包み込む。

沙耶の小さな胸のふくらみ、沙耶の体のぬくもりを感じながら、唇は重なり合つたまま数秒間続いた。

その間、啓介はこう言つ時は鼻と口とどちらで呼吸するんだ、なんて唇が合わさっただけでこんなにも幸せな気持ちになるんだろう、などともいい事を考えていた。

そしてどちらからともなく、最接近していた顔は離れ、そのまま

啓介は目を伏せた。

気まずい雰囲気が辺りを包む。

「これ……このキスって、どういう……」

思い切って聞いてみたがどうも言葉にならない。

「ん？」

下を向いている啓介の顔を沙耶が覗き込むように聞き返した。

「だ、だからどうして僕とキスなんか……」

目を合わせられない啓介は顔を横に向けた。そしてちらりと横目で沙耶の様子を窺った。

沙耶は窓から空を見上げていた。

「ん……。だから思い出だよ」

「それだけ？」

「それだけ。他に何かあるかなあ」

「それだけって……」

啓介は肩を落とした。彼にとっては大事なキスであつても沙耶にとっては、ただ

体の一部分を重ね合わせるだけの行為なのだ。

キスなんて行為を持つてる人にしかないものなのだと勝手に思い込んでいた啓介は、沙耶の答えに淡い期待を寄せていた。

（もしかして沙耶も自分の事を――）

しかし返って来た答えは啓介にとっては非情で軽いものだった。

啓介にとつては重い行為でも沙耶にはとても軽いもの。

そう考えると沙耶が一層大人に感じられてしまい、その存在がより遠いものに思えてしまった。

実際に化粧をしている事を置いても、沙耶はどこか色っぽくもあり小中学校の頃とは別人の様でもあった。

小さく見える星を探すように空を見上げる沙耶の顔を見て、また抱きしめたい気持ちが起きるが、今の啓介にそんな勇氣は無かった。
「思い出、か……」

やはり沙耶の心の中には他の誰かの存在があるのかもしれない。

それはやはり生物教師の竹本なのだろうか。

そう考えるだけで啓介の体と気持ちはズシツと重たくなってしま
う。

「なあ沙耶、お前誰かすき——」

「ねえ、啓ちゃん」

沙耶が啓介の渾身の勇気を遮った。

「思い出つていっても誰でも良かったんじゃないんだよ」

「え？」

「今日一緒にいるのが誰でもいいってわけじゃないって事」

「どういう意味だい？」

啓介は沙耶の言う事が理解できずにいた。

「それは自分で考えて」

沙耶はそれだけ言つて廊下を一人で行つてしまった。

その場に立ち尽くし、思考を目まぐるしく働かせるが啓介にその
意味は分からない。

ただ、少しだけほつとし、気持ちが軽くなつたのは確かだった。

「待てよ」

啓介は急いで沙耶の後を追う。

沙耶は教室のドアの前で立ち止まっていた。視線の先はドアの上
に表示されている白いプレートがあった。

『一年A組』

沙耶のクラスである。

「どうした？」

そのプレートを沙耶はどこか悲しそうな目でじつと見つめていた。

「この教室ともお別れか……」

沙耶が教室のドアをあけ、中に入る。啓介も黙つてそれに続いた。
ひんやりと空気が冷たい無人の空間がそこにあった。整然と並べ
られた机と椅子がどこか薄気味悪い雰囲気を出している。

「夜の教室って不気味だな」

「何か昼間とは別の場所みたいだね」

普段は四十人近い生徒の笑い声や教師の声が響く教室も今はそれも無く、あるのは静寂だけである。

沙耶はゆつくりと自分の席まで歩くと椅子をひき、それに腰掛けた。啓介はその光景を教室の入り口に立ったままそれを眺めていた。椅子に座った沙耶は背筋を伸ばし、膝に手を置いて正面の何も書かれていない黒板を見ている。

「ここには何もいい思い出が無かったなあ……」

小さく呟いた沙耶を見て、なぜか啓介の胸はぎゅっと締め付けられる様だった。それと同時についさっき潤したはずの喉が驚くほど渴いている事に気付いた。

今夜、暗い学校で / 4

「いい思い出がないって、寂しい事言うんだな」

啓介は教室の入り口に立ったまま沙耶に話しかけた。沙耶の言葉の意味は啓介に理解できない。

二人が高校に入学してまだわずか五カ月、啓介自身も思い出と言えるほどのものはまだない。やっと新しい生活に慣れてきたという所である。

「まだ入学して半年だぜ？ 思い出なんかこれからだよ」

これからと言いながら、沙耶がこの学校を去る事は充分承知していた。啓介のその言葉には「だから学校を辞めるなよ」という気持ちも含まれているが、沙耶がそれに気付いたかどうかは分からない。「このままこの学校にいてもいい思い出なんてできなかったよ、多分」

沙耶はまだ黒板を見つめたまま、啓介の方を見ない。

「どうしたんだ沙耶。何かあったのか？」

啓介は沙耶に近づこうと、一步教室に足を踏み入れたが思いとどまった。沙耶の雰囲気さがさきまでとは違って近寄りがたいのだ。

「ごめんね、啓ちゃん。せつかくの夜に。大丈夫だよ」

「どうしたんだよ、急に」

「あんまり楽しくなかったんだよね。高校来ても。新しい友達もできなかつたし」

言われてみれば、沙耶が学校で女生徒や男子生徒と仲良く話している場面を見た記憶がない。友達がいるかいらないかなど、啓介は気にも留めていなかった。

毎日、沙耶の姿を目で追っていながらそんな事にも気がつかないとは、自分は情けない。啓介は自分自身を責めた。

「友達、いなかったのか」

「うん。なんでだろうね。昔から友達作るの苦手だったから」

思えば、小学校の頃はそうでもなかったが、中学時代から沙耶はいつも一人でいた。だからといって、友達の輪に入れてもらえないとか、いじめられてるといった印象はないのだが、言われてみれば啓介の見る沙耶は一人の事が多かった。

もしそれが沙耶の悩みの一つだったのだとすれば、昔からの友人である自分が、沙耶の孤独に気付いてやれなかった事を啓介は深く後悔した。

沙耶が孤独だったからこそ、啓介は夏休みの終わりに見た、竹本と一緒に歩く沙耶の笑顔に衝撃を受けたのかもしれない。

「ごめんな、僕がもつと話しかけてれば……」

啓介はまた一步、沙耶に近づいた。悲しげな顔の沙耶の近くにいてやりたかった。

「啓ちゃんに知られなくなかったのかも。一人でも大丈夫って強がってたのかなあ」

「僕に強がってどうするんだよ。昔から知ってる仲なのに」

「知ってるからだよ。啓ちゃんの事だから私を心配するかな、って」

「そりゃあ、心配するかもね。ずっと話もしてなかったけど」

すると沙耶は椅子の背もたれに肘をかけて体を啓介の方へ向けた。教室の暗闇の中で沙耶の視線と啓介の視線が交わる。

沙耶に近づこうとしていた啓介の体はまるで金縛りにあつた様にその動きを止めた。

「啓ちゃん、私の事好きでしょ？」

予想外の沙耶の言葉に啓介の頭はぐらついた。長年抱き続け、決して伝える事が出来なかった思いを沙耶に見透かされたのだ。

その思わぬ一言を受け、恥ずかしさと戸惑いで、少しふらついた啓介は近くの机に手をかけ体を支えるのが精いっぱいだった。

「そうでしょ？」

沙耶が追い打ちをかける。

啓介はどう答えるべきか頭をフル回転させた。

思いを伝えるチャンスは沙耶がくれた。いや、あの沙耶の言い方

はなんだろう、どこか違和感がある。そう、何か自分を馬鹿にした様な言い方――。

啓介の鼓動は早くなり、沙耶の顔を見れないでいる。顔どころか彼女の存在自体を視界に入れることすら視覚が拒絶しているようだった。

そしてまたあの感覚――渴く、喉が渴く。

「お前……沙耶は違うのか……？」

啓介は声を振り絞った。そう聞き返すことが啓介の脳が出した答えだった。

「違う？ 何が？」

沙耶の声が静かな教室に弾んだ。さっきまでの淋しそうな声とは全く違う。

それはまるで啓介を追い詰める様な声だった。

啓介は手を掛けた机を凝視しながら沙耶に答えた。

「だ、だから沙耶は僕の事――」

「違うよ」

息をつく間もなく、冷たい声が啓介の耳を貫いた。

恐る恐る顔を上げると、視線の先には肘をついて足を組んでこちらを見つめる沙耶がいた。すぐそこにいる沙耶は、さっきまでとはまるで別人だった。

「ち、違う？」

沙耶の態度が急変し、啓介は混乱した。

暗くてその表情ははつきり見えないが、沙耶が自分の事を嘲笑しているのだという事だけは分かった。

「違うよあ、啓ちゃん。残念だけど」

「どうしたんだ沙耶。そんな急に……」

「あんまり期待させちゃ啓ちゃんに悪いと思って」

「期待？ 僕に悪い？ さっきのあれは一体なんのつもりで……」

啓介の中にふつふつと怒りが沸いてきた。キスをし、体を抱きしめた、さっきのあの行為は何だったのか。期待するなという方が無

理な話だ、啓介は憤る。

「あれ？ ああ、キスの事？ あんなの挨拶でしょ。そんな特別な事じゃないよ。啓ちゃんはうぶだなあ」

その一言は啓介を絶望に追いやるには十分だった。

啓介は両手を机につき、今にも倒れそうな体を必死に支えた。

フラれるのはかまわない。どうせ思いを伝えることなど自分にはできないと思っていた。しかしこれは、この仕打ちはあまりにも酷過ぎる。啓介は今にもこぼれそうな涙をこらえた。

それは悲しみの涙ではない、悔しさの涙だった。

なぜ、沙耶が自分にこんな事をするのか、不思議でならなかった。そこにいる沙耶は自分の知る沙耶じゃない、そんな気すらしたのだ。「そんな事言うために僕を呼び出したのか？ これが思い出か？」

啓介の声には怒りがにじみ出ていた。込み上げる怒りを必死で押さえながら啓介は沙耶に問うた。

一方の沙耶はそんな啓介の怒りなど全く気にもしない。

「もうね、私我慢できないの」

「我慢？」

何を言ってるのか分からない啓介は思わず顔を上げた。

沙耶は依然、足を組んで椅子に座ったままだ。

「せっかくなら初めての獲物は知ってる人の方がいいかなあ、って思っで。今日でお別れだね、啓ちゃん」

沙耶はニコリと笑って腰を上げた。

「え？」

その瞬間、啓介は背後に人の気配を感じた。慌てて振り向くと、黒い影がひとつ。

黒い影の腕が伸び、何か布のようなものが啓介の口をふさいだ。湿った布からツンとした香りが啓介の鼻を刺した。

虚を突かれ、声を出す事も抵抗もできない啓介はされるがままだった。

全身の力が抜け、意識が徐々に薄れていく。啓介も目を閉じない

ように必死に抵抗するが、抗えない。

「お……お前……」

遠くなっていく意識の中、啓介ははっきりとその影の顔を見た。

（知っている顔だ——なぜ、お前が——）

啓介の体は意思を失い、膝から崩れ落ちるように床に倒れた。

（沙耶は……沙耶は無事なんだろうか）

両目の瞼の力が抜けてしまい、意識が闇の中へ引きずり込まれながら、啓介は残された沙耶の事が気がかりだった。

「さよなら……」

遠くからかすかに、沙耶がそう言った気がした。

準備

「言われた通りやったぞ」

暗闇で男が囁く。

うす暗い、机が並べられたその部屋には二人、正確には三人の影があつた。

中肉中背の男の足元にはもう一人、気を失つた男が倒れていた。

「御苦労さま。タイミングばっちりだったわ」

暗闇で女は男に微笑んだ。

男はかすかに届く外の光でおぼろげにその表情を見てとれた。

「それで？ こいつをどうするんだ」

男はどこか怯えたような声を出した。現に男の足は小刻みに震えている。

それはたつた今自分がしてしまった事と、これからしようとする事の重大さ、罪深さを物語っている様だった。

それを察した女は小馬鹿にした様に男を眺めている。

「震えてるの？ もう後戻りはできないのよ、あなたも私も。それにあなたも望んだことでしょう」

女の鋭い目つきに男は怯んだ。

「わ、分かっている。大丈夫だ。ちゃんとそっちも約束は守ってくれるんだろ？ な。そうじゃないと——」

「ふふふ。大丈夫よ。あなたも私も随分焦らされたんだもの。十分我慢したわ。今日は二人が新しく生まれ変わる日よ」

女はまるで舞台で万雷の拍手を浴びるヒロインの様な仕草で、大げさに両手を広げた。

この世に何も怖いものは無いという風な、若さの溢れ出る姿を唯一の観客である男は黙って見つめていた。

「どこでやるんだ」

「聞いてないの？」

「何も」

「あなたの部屋よ」

「え？」

「何度も言わせないで。あなたの部屋」

「冗談はよせ。そこまでしたら私はここにいらなくなる」

両手を広げたままヒロインを気取る女に男は詰め寄った。少し薄くなった男の額には大粒の汗が噴き出している。

「何言ってるの、今さら。あなたも私も明日にはここから消えるの。だからそんなもの関係ないわ」

呆れた表情で女は両手をストンと落とした。その女の怪訝な表情はまるで汚らしい野良犬を見る様な蔑んだ、冷たい目つきだった。

冷酷な視線に恐ろしさを感じた男は冷静さを失いつつあった。

「どついう事だ。そんな事聞いてないぞ。これからも普通の生活ができるって話だったはずだ。現にあいつも——」

「あなたにはまだ覚悟が足りないわ」

うるたえる男を女は冷たく遮った。

「あの人とあなたと一緒に考える事自体間違ってるのよ。私だってそう。あの人の様に上手く生きられない。だから皆でこの土地を去るの。あの人だって動く必要のないのに私と一緒にだから、そう言うてくれたわ」

そう語る女の表情はさっきまでの冷たい表情から恋する乙女のように穏やかに、目まぐるしく変わる。

「あなたはあの人から恩恵を受けるんだから黙って言われた通りにすればいいの。ここから去ってしまえばあとはあなたの好きにしたらいい。私達の邪魔されたらたまったもんじゃないわ」

男は何も言い返せない。女は構わず続ける。

「仕返ししたい連中がたくさんいるんでしょ？ あなたを馬鹿にした連中が。ここにいたらそれは叶わないわ。あなたみたいな愚鈍な人はすぐに正体がばれてしまうでしょ。そんな事になったらあの人にも迷惑がかかってしまうわ。だから一旦、ここから姿を消してそ

れから復讐でもなんでもすればいい。分かった？」

子供をなだめるかのような女の言葉を男はうつむき気味に黙って聞いていた。

言い返そうにも言葉が出ない。

年は男の方が上だが、立場はこの女よりもはるかに下にある様だ。

「分かったんなら行きましょ。グズグズしてる時間はないわ」

女は足早にその部屋から出て行こうとした。

「ちよつと待て。一人で運ぶのか？」

すでに部屋から体半分が出ていた女は振り返り、呆れかえった。

「あんた男でしょ？ それくらいの物一人で運べないの？ほんとあなたはダメな男なのね」

そう言い残して女はさっさと行ってしまった。

残された男は女に対しての怒りを抑え、打ち震えていた。

「あの餓鬼、好き放題言いやがって……。お前もリストに入れといてやるから覚悟しておけよ……。大久保沙耶」

男はズボンのポケットから小さなメモ帳とペンを取り出し、女の名前を何度もうわ言のように唱えた。さっきまでの怯えた表情は消え、男は狂気に満ちた表情でメモ帳にペンを走らせなにやら書きなぐった。

「それともうひとつ……」

行ってしまったと思った女がひょいと部屋の入り口から突然顔を覗かせた。

驚いた男は急いでメモ帳をしまおうとしたが、慌てたせいでポケットに入りきらずにぽとりと足元に落としてしまった。

「なあにそれ」

女は当然その物体に興味を示した。

「いや、なんでもないよ。授業の準備に必要な物を忘れない様に書いてるんだよ。それで？ もうひとつってなんだ」

女は怪しそうにポケットのそれを窺っていたが、男は話を逸らして交わす。

「ふうん。まあ、いいわ。言い忘れてたけど移動しても明かりは点けないでね。目立って誰かに来られてもいけないし。あなたそういうところに気が回りそうにないから」

人を馬鹿にするようなことをわざわざ戻って言いに来たのかと、男は顔を曇らせたが、

「分ったよ。まあ今日は何かの飲み会で教師全員出払ってるから当分は戻ってこないと思うがね」

そう言っただけでばかり女に反抗してみせた。

「あ、そう。じゃあいいわ。でもあなたはその会に呼ばれないのね。かわいそうに」

人の神経を逆なでするのが上手い女である。そう言った女の表情は男に対する嫌悪感たっぷりだった。

「まあね。慣れたもんさ。それに今日はもっと大事なものがここにあるからね。そうだろう？」

男も必死に抵抗する。

「ふん、じゃあそういうことだから。私もうずうずしてるんだからさっさと動いてね。竹本先生」

黒い髪を掻き上げ、挑発的にそう言い残すと女は部屋から姿を消した。

「調子に乗るのも今のうちだぞ、大久保……」

竹本は怒りを押し殺し震える手を抑えた。そして足元に横たわる男に視線を落とすと、

「お前には恨みは無いんだが……悪く思うなよ、馬原」

そう呟いて、床の上に完全に脱力した男の上半身を非力な腕で抱え起こし、両足を引きずりながら女の後を追った。

闇が包み込む静寂の中に竹本の荒い息遣いと、ズルズルと重い物を引きずる音だけが小さく響き渡った。

潜入

青木は瓜生と別れた後、車を坪井高校まで走らせていた。

（あの餓鬼、警察をアゴで使いやがって）

学校内で本当に何かが起ころのかは半信半疑だったが、非現実的な話を一人落ち着いて整理するには丁度いい時間だった。

時刻は八時四十五分。

電車通りを走る青木の車は路面電車と何度もすれ違った。

電車内は会社帰りのサラリーマンや制服の学生、夜の街に繰り出す若者などで賑わっているのが車の窓からもうかがう事ができた。信号待ちでちょうど横にその路面電車が並ぶ。

そして反対側に目をやると隣の車線には路線バスが数台連なっている。車内は吊皮を持つ

乗客たちが見えた。

青木はあの中にも何人かのヴァンパイアがいるのかと想像して背筋が寒くなった。

（知らない方がいいこともある、か。その通りなのかもな）

世の中に潜むヴァンパイア、そしてそれを取り締まる『ネイヴ』という組織。

今日は色々な事が起きすぎて青木の頭はパンクしそうだった。さらに今からまだ何かが起きようとしていると瓜生は言うのだ。

今はまだ興奮状態で神経も尖ったままの状態だから、これから起こる事に集中出来ている。しかし今回の件が全て終わってしまった後に自分がこれまで通り平常でいられるのか、青木は多少不安があった。

出て行った妻も子も青木のもとに帰って来ようとしている、そんな時に知ってしまった事実をどう昇華するのか、昇華できるのかという不安である。

家族がいつ、どこでヴァンパイアに出会つかもしいないという不

安は、この事実を知った者が極度の疑心暗鬼に陥り精神を病んだのも頷ける。

妻に近づく者、娘に近づく者、そのすべてがヴァンパイアではないかと疑ってしまう生活を想像すればするほど不安と恐怖は募っていく事だろう。

がさつで家庭を省みなかった青木でも自分の事より家族の心配をする人間らしい部分を当たり前に持ち合わせているのだ。

そんな事より今はこの事件の解決に集中しようと努めるが、どうしてもこれからの不安と疑心が顔を覗かせる。

ヴァンパイア

ヴァンパイア

ヴァンパイア

その単語、これまでは映画の世界でしか聞く事のなかった単語が頭から離れない。

すでに青木は先人同様、この世界に対する不信感と人類に対する疑心によって精神崩壊への階段をひとつ登ってしまったのかもしれない。

そこへ青木の携帯電話の着信音が鳴った。

考え事をしていた青木は慌ててハンズフリーのイヤホンを電話につないだ。

着信の番号は捜査一課の細川だった。木下が襲われた現場をとりあえず仕切っていた刑事である。

名前が表示された画面を見て青木は電話に出ようか一瞬迷ったが、木下の容態も気になって通話ボタンを押した。

「青木だ」

いつも通りの低い声で電話に出て、平静を装う。

他の刑事たちは青木がヴァンパイアと接触している事など当然知らないのだ。

「ああ、青木さん。細川です。今どこですか？」

「どこって……」

青木は言葉に詰まった。まさか坪井高校に向かっているとは言えるはずもない。

「俺は休暇中だぜ？ どうしたんだよ」

「休暇中って……。木下が大変な時に」

顔は見えないが電話の向こうで細川が呆れてるのが分かった。同僚が襲われた現場に居合わせた刑事が呑気に休暇を楽しんでるとあっては呆れるのも無理はない。

不器用な青木は上手い言い訳がとっさに出てこなかったのだ。

「課長の命令とあっちゃ刃向かえんだろ。それに木下は大丈夫そうだと田上に聞いたぜ」

「まあ、あいつはほつといても大丈夫です。こっちから頼んでもそう簡単にくたばる様な奴じゃないし」

意識の無い人間が、いないところでひどい言われようである。

「そんな事よりその木下の事件、うちはもう捜査から引けて上からの指示なんです。現場保持も聞き込みも何もなくていいって。こっちは身内やられてんのに何の説明もなしですよ。どうなってるんですか、これ」

やはりそうきたか、と青木は内心想った。

ヴァンパイアが絡んでるとあれば警察に根回しをしてくるのは今となつては納得だきるのだ。

だがこの間までの青木の心境と同じだから細川が憤るのも理解できる。

「青木さん、何か聞いてないんですか？」

「俺が？ ああ、何も聞いてないよ」

青木はぎこちない返事を返すので精いっぱいだった。

「青木さんらしくないなあ。相棒やられてすんなり休暇に戻るなんて。いつもなら率先して上に噛みつくタイプでしょうに。本当に何も聞いてないんですね」

細川も上からの命令に不満で多少熱くなっているの、しつこく青木に食い下がる。

「だから何も聞いてねえよ。休暇に戻れって言われたからそうするしかねえだろ。お前らもいつまでもそんな事に氣い取られてないで別の仕事にかかれよ。事件は待ってちゃくれねえぞ、馬鹿野郎」

青木はそう怒鳴って電話を切った。

恐らく電話の向こうの細川も青木大火山が爆発したとあつては、渋々この件から引きさがる事だろう。

青木はふう、とため息をつき、手荒くイヤホンを外すと助手席に投げつけた。

「悪いな、細川……」

細川の気持ちがかかるだけに青木の胸中は複雑だった。事情を説明したいのは山々だがそういう訳にもいかない。

仲間を欺いている気がして後ろめたさが青木を襲った。

それと同時にヒトを糧とするヴァンパイアがいるという恐ろしい事実を知るのは自分一人で十分だ、とすべてを背負う覚悟を改めて決めたのだった。

青木の車は坪井高校のすぐそばまで来た所で、渋滞にはまってしまった。

「畜生、あっちの道に回ればよかったな。かなり混んでやがる」

その時、またしても青木の携帯電話が鳴った。

青木は助手席に放り出したままのイヤホンを取り上げ、耳につけた。

携帯電話の画面には登録されていない、青木の知らない番号からの着信だった。

（誰だ？）

知らない番号だが瓜生ではない事は確かだ。さっき連絡先を交換した際、名前も一緒に登録したはずだった。

「もしもし……」

いつもより低い声で警戒しながら電話に出た。

「青木刑事の電話かね」

電話の相手は聞いた事のある声だった。どこかで聞いて、自分を不

愉快にさせるこの声……。

表情こそ相手に見えないが、心当たりのある声の主に対し青木はひどく不快な顔をしてみせた。

「誰だ？」

青木は声の主に心当たりはあったが、わざととぼけてみせた。

「つい、数時間前に会った人間の声も覚えられないのかね。やはり頭より体が先に動くタイプの人間の様だね、君は」

「あいにくどうでもいい奴の声まで覚えてる程こっちは暇じゃないんでね。そんな嫌みを言うためにわざわざ電話してきたのか、てめえは。西戸崎だったか？」

どうもこの電話の主とは生理的にそりが合わない。青木はわざと名前を間違つてみせた。

「枕崎だよ、青木刑事。覚えておきたまえ」

「覚える必要はねえな」

「ふつ、まあいい。そんなことより君に忠告しておきたくてね。妙な気を起さない様に」

「妙な気？」

「そうだ。瓜生に話は聞いたんだろう？ 我々の存在について」

「ああ、聞いたよ。お前が蚊やヒルと親戚なんだ、ってな」

常に高圧的な態度を取つて来る枕崎に青木はイライラしている。

「ふふ。面白い事を言う男だ。だが言葉には気をつけた方がいい。我々は君らよりも進化した存在なのだからね」

なるほど、この枕崎という男はヒトを下に見る方のタイプか。青木の枕崎に対する嫌悪感は益々募った。

「そのエライヴァンパイア様が下等な俺に何の要件があるんだと聞いている」

「はつきり言っておこう。我々の存在を知ったからには君は『ネイヴ』の監視下に置かれている。これからの言動には細心の注意を払いたまえ」

「監視？ 早速盗聴器でも仕掛けたか。えらく心配性なんだな、お

前さん」

青木自身、これくらいの事は予想の範囲内だった。

思えば、昨日話を聞きに行った江津交番の警官の様子がおかしかったのもこいつらに何らかの圧力をかけられたのだろうと納得できた。

「盗聴器などという下品なものはないさ。ただ、妙な噂が広がればそれがどんな些細な物でも、世界中のどこでも我々はその出所を突き止める。それくらいのネットワークを持っているのだよ。そしてその噂の発端を見つければ……」

「抹殺か？」

電話の向こうでライターを擦る音がした。煙草に火を付けているのだ。横柄な態度で腰を下ろし、煙を燻らせながら話をする枕崎の姿が容易に想像できた。

「ふっ。そんな野蛮な事はしないさ。ヒト側も犯罪を犯したヴァンパイアの命は取らないし、ヴァンパイア側だってそう。それがヒトとヴァンパイアが交わした協定の基本だ。しかし噂を流し、みだりに世間を混乱させようとする輩には多少大人しくはしてもらうがね」

「警察の人間ならどつかよそへ飛ばしたりか？」

青木は木下が警察学校時代に聞いたという噂話も思い出した。事件隠蔽のお達しが上からくるというやつだ。

瓜生から『ネイヴ』の話を聞いて、あの交番の警官の様子と警察学校の噂、青木の中でこの二つが繋がったのだ。

「そんな甘いもんじゃないさ。まあ、ひどい妄想傾向があるということとで病院送りか隔離施設あたりだろうね。どうなるか知りたければ試してみるのもいい。君なら喜んで送り届けてやるよ」

枕崎の挑発的な態度にもだんだんと慣れてきた。

「へえ。どこぞの警察学校じゃ噂らしいぜ。警察の上層部に事件を揉み消す組織があるらしいってよ。急いで火消しにいかねえと噂が広がって大火事になるぜ」

木下には悪いが噂を使わせてもらった。具体的な話ではないし、

あくまでも警察内部の噂だから大丈夫だろう、と青木は判断した。

「日本の警察も落ちたものだ。そんな下らん噂話をするような連中が拳銃ぶら下げて治安を守るのだからね。世も末だ」

「同感だね」

青木はそこだけは枕崎に同意した。

「そんな警察内部の噂など取るに足りんよ。それ以上足を踏み込めば話は別だ。ついこの間も週刊誌の記者が施設送りになったばかりだ。しつかり頭に置いておきたまえ」

相変わらず渋滞の列は続き、青木の車も中々前に進めずにいた。

そのイライラも合わさって、青木は枕崎にも攻撃的になってきた。「自分たちの存在が公になるのをえらく恐がつてるじゃねえか」

「何だと？」

「恐がつてると言っただ。聞こえなかったんらもう一度言つてやろつか。恐がつてるんだろ、お前らは。話聞いとると少なくとも俺にはそう聞こえるぜ」

「くだらんね。我々が何を恐がる必要がある？ 混乱を防ぐために我々は――」

「じゃあ堂々と言つてやれよ。私たちは吸血鬼だ、つてな。何百年も地下に潜つてこそこそと。仕舞いには今みたいに脅迫めいた真似までしやがつて」

青木のギアが上がる。電話口からも枕崎の苛立ちが伝わってきた。それがまた青木には心地よかった。

「心配しなくても俺は口外しねえよ。今回の件が解決すりゃあ二度と関わりなんか持ちたくねえんだからな。お前らの事なんか記憶から消してやるさ」

青木のその言葉に嘘は無かったが、そうなりたいという願望が含まれていた。家族が戻って来ようかという時期に、余計な不安は持ちたくないという気持ちがあるからである。

「瓜生に何を言われたのか知らんが、今からでも遅くない。そのまま家に帰れたまえ。これからの成り行きなど君にはおおよそ関係ない

ことだ。記憶から消すというのなら尚更だ」

「てめえは俺の上司だったか？ 違うならそんなこと言われる筋合いはねえな。俺はこの事件担当の刑事として動いてる。お宅もこんな電話してないで自分の仕事でもしたらどうなんだ？」

電話口でまたライターの音がした。青木の攻撃が枕崎の煙草の量を増やしているのだろう。

「とづくにこちらも動いてるさ。君に言われなくてもね。君とこれ以上話しても時間の無駄の様だ。まあ、くれぐれも我々の仕事の邪魔をしない事だ。もし『ネイヴ』の活動に支障をきたすようならば遠慮なく君には退場してもらう」

枕崎は一層低い声で念を押した。まるでこれが最後通告だ、と言わんばかりの雰囲気だった。

「わざわざどうも。じゃあな」

それだけ言つて、青木は通話終了のボタンを押し、電話ごと助手席に放り投げた。

「気に食わねえ野郎だ」

青木は権力を振りかざし、高圧的な態度をとる人間に対して、反発する癖があった。

保身ばかりに頭を使い自分では何もせず、態度ばかりが大きい人間を嫌った。

警察という縦社会にあつて青木のその性格は致命傷とも言え、事あるごとに上司と衝突してきた。

ある時、そんなことでは出世はできないと言われた時など、当時の上司に食つてかかった程だった。

出世の事など頭になく、罪を犯した人間を捕まえる、それだけを信念にここまで来た男なのである。

そんな青木を諷め、時には奮い立たせ、うまくコントロールするのが今の上司の内川だった。

良く言えば熱い、言い方を変えれば扱いづらい青木が、初対面から挑戦的な態度をとる枕崎とうまくコミュニケーションがとれるは

ずもないのだ。

皮肉な事に枕崎との喧々譁々としたやり取りをしているうちに、青木の車は渋滞を抜け、坪井高校の目前まで来ていた。

車内の時計に目をやると九時五分になっていた。

瓜生に指定された時間は九時五分から九時十分だった。偶然か必然か、青木は九時十分に坪井高校の前に辿り着いた。

枕崎との電話を切ったあと、青木の腹の虫は中々収まる事なかったが、気持ちを事件の方へと切り替える事に神経を巡らせた。

青木はひとまず坪井高校の正門から少し離れた場所に車を止め、車内から辺りの様子を覗いた。

学校は大きい通りから少し入り込んだ場所にあるので、人通りも少なく、街灯の小さな明かりが等間隔で灯っていた。

通りに民家も少なからずあるが、家の明かりは通りまで届かず、三メートル先の人影こそ分るもののその顔までは判別できない。

（さて、車をどこに停めておくか）

瓜生の言った通り、校内に誰かいるのであれば、警戒される恐れがあるので校内には停めておけない。かと言って校門前に堂々と停めるのも気が引けた。もし瓜生の言う何者かがまだ校外にいるとしたら車が停まつてる事を不審に思うかもしれない。

思案しているとサイドミラーに一点の光が近づいてくる。

青木は思わずシートに身を屈め、身を潜めた。一台の原付バイクが青木の車を追い越して行った。

（あんまりもたもたしてる暇もねえな）

青木は正門から学校の裏門へと車を回した。

学校の反対側には小さな川が流れていて、裏門はちょうど河川敷沿いに位置していた。正門よりもさらに人気はなく、民家も門の数メートル手前で途切れていた。あまりの暗さに青木の車のヘッドライトが目立つほどである。

裏門から校舎は広いグラウンドと体育館を挟んだ形になっているので、学校に忍び込むにはちょうど良かった。

青木は門から少し離れた所にある空いたスペースに車を止め、急いでライトを消した。

（車が停まった事を悟られてなけりゃいいが……）

静かにドアを閉め、外へ出る。雨上がりのじとつとした空気が青木の肌にまとわりついた。

ふうつと緊張をほぐすかの様に肩をぐるりと回す。

グラウンドには明かりもなく、サッカーゴールがぼんやりと見えただ。

「夜の学校か。ゾツとしねえなあ……」

木下が横にいたならクスクスと笑いを押し殺していただろう。なにしろ青木はこの荒々しい性格に似合わず大の怪談嫌いなのだ。つまり恐がりなのである。

さっきまで電話で枕崎とやりあっていた人物とはまるで別人の様だった。

仕事で無い限り夜の学校に忍び込むなど思いもしない事だろう。

何も青木は霊やお化けの類の存在を信じているわけではなく、怪談や闇の放つ独特の閉塞感の様なものが生理的に嫌なのだ。

裏門から校内を見渡せば、しんと静まり返ったグラウンド、その後には築数十年は経っているであろう古ぼけた体育館。そしてどんとそびえ立つ三階建ての校舎。肝試しをするにはうってつけの環境である。

「夜の学校ってのはこうも薄気味悪い所もんか」

青木は腹を決めて裏門をよじ登り、校内へと足を踏み入れた。

校舎側には数こそ少ないものの街灯が設置されている為、向こう側からグラウンドに人がいる事が分ってしまうかもしれない。

青木はなるべくグラウンドの隅をゆっくり、体を屈めるような姿勢で進んで行く。

足音を立てないようにゆっくりと歩くが、ジリッジリッと土を踏み音が静けさのあまり、えらく大きく青木の耳に響いてきた。

後ろを振り向けばいるはずもない何かが目に入りそうで、前に進

む足が少しずつ早くなっていく。ここで誰かに名前を呼ばれようものなら青木は驚いて飛び上がるだろう。

雨上がりで蒸し暑いはずなのに、背筋にはうすら寒い何かを感じる。時に闇は体感温度までも下げてしまふものなのだ。

体育館まで来たあたりで壁に張り付き、ひとまず校舎内の様子を伺った。

ここまで来ると青木の目も暗闇に慣れ、校内の様子も暗がりながら多少見えるようになっていたので、窓越しに動く気配があればすぐに分かる。

五感を研ぎ澄ませ、誰かの足音や小さな声を捜そうとするが人の気配は感じられない。

それに瓜生はひよっとすると教室に明かりが点いているかもしれないと言っていたが、どの部屋にもその様子もない。辺りは暗いのでどこか一つでも照明が点いていればすぐに分かりそうなものなのだ。

（外れか……）

瓜生が青木を騙して学校に行かせる理由も思いつかないし、彼の予測が外れたただけなのかと青木は考えた。

あれだけ自身たつぷりに刑事である自分に指示しておきながら、結局空振りとはふざけやがってと青木は脱力した。

もちろん、何も無いに越した事は無いのだが、暗闇にびくびくしていた自分を振り返ると青木はなんだかおかしくなってきた。

誰もいない夜の学校に忍び込み、一人でこそしているのが滑稽に思えてきたのだ。

さつさとこんな気味の悪い場所からおさらばしたい気持ちもあったが、念のため、校舎の近くまで行き、異常がないか確かめようと再び歩き始めた。

闇にたたずむ校舎を見上げると、生徒という学校の主達がいなくてこつも静まり返るものなのかと青木は改めて感心した。あと数時間もすればここはまるで命を吹き込まれた様に賑わい始めるのだ。

訪れる時間でその表情が変わるさまを見るのも中々面白いもんだと、まるで夜の散歩を楽しむかの様だ。

「ん？」

青木の足が止まり、その目つきが刑事のそれに一瞬にして変わった。何気なく見上げた校舎の窓にちらりと小さな光が見えた。

その場所は校舎の三階だったので、光が見えたというよりそこだけが周りよりも少し明るく見えたと言った方がいいのかもしれない。そしてその明るさがゆらゆらと揺れている様に見える。

「気のせいかな？」

じつと目を凝らしてみるが、それが元々そういう光がそこにあるものなのか、誰かがそこにいるのか確信が持てない。

場所が場所、時間が時間だけにまさか霊的な物じゃねえだろうなと少々不安もあったが行って確かめるしかない。

青木は校舎への入り口を探した。

「人がいてもそうじゃなくてもいい気持ちはしねえな」

ぶつぶつ言いながら入口のドアに手をかけた。ドアの横には警備会社のセキュリティであろうカードを差し込むボックスが備え付けである。

「最近の学校はえらく厳重なんだな」

そんな警備など知るかと言わんばかりにドアを開く。

鍵がかかっている可能性も考え、軽い力で押したドアは音を立てる事も無く静かに開いた。

暗い、長く続く廊下は自分の来訪を歓迎しているとはとても言い難い、青木にはそう感じられた。

校舎に一步足を踏み入れると、その学校の持つ独特の匂いが青いの鼻孔をくすぐった。

「こりやまた不気味なもんだ」

外とはまた違った校舎内の薄暗い雰囲気、青木はため息をついた。しかし長い事暗闇にいるせいか、最初に学校の門を乗り越えた頃と比べれば恐怖心は和らいでいた。

遊園地の絶叫マシンと一緒に一度慣れてしまえば、どんな苦手な状況でも多少は平気になってしまふものである。

緊急事態だ、勘弁なと靴を履いたまま校内へ足を踏み入れた。

校舎に入るなんて何年振りだろうか。別にここは自分が卒業した学校でもないのに、青木は静かに廊下を歩きながら高校時代の思い出などを振り返っていた。

憎たらしい生徒指導部の教師、上級生の不良グループとのいざこざ、結局その想いを伝える事の出来なかった同じクラスの女子生徒、青木らしくないノスタルジックな心境になっていた。

高校時代の青木は不良だったかといえば不良だったのかもしれない。しかし誰とつるむわけでもなくただ一人で突っ張ってるような生徒だった。その強面な外見で、いつも仏頂面しているせいで入学早々上級生には目をつけられていた。

自分から喧嘩を吹っ掛けるわけでもないし、青木本人も周りに威圧的な態度を意図的に取ってるわけでもない。自分なりに普通の学校生活を送っているだけだった。

だが、一匹狼を気取る青木が気に食わなかったのだろう。ある日、上級生の不良グループが青木を呼び出した。

青木も無駄な喧嘩は売らないが、売られた喧嘩は買うタイプである。

何の迷惑もかけてない、それこそ会話すらした事のない上級生にいらぬ因縁を吹っ掛けられたのだ、黙ってやられるわけにもいいい。

相手は六人だった。

まず一人、最初に青木に近づいて生意気だ何だと、挑発してきた相手をあつという間に片づけた。

驚いたのは上級生の方である。六人相手に青木は怯むことなく手を出してきた。次に胸倉を掴んできた相手の顔面を殴りつける。

だがあとは多勢に無勢、中学校上がりの子供が四人相手に敵うはずもなかった。

翌日、顔を腫らして登校してきた青木に生徒指導部の教師が目をつけて、色々と問いただしてきたが青木は一切何も答えなかった。

それ以降、上級生とのトラブルは一切なかった。上級生側もまさか青木が抵抗して二人もやられるとは思わなかったのだらう。あいつは危ないと噂が不良グループの間で広がったのだ。

そんな噂のせいもあってか、女子生徒にはモテた記憶がない。その代り、不器用で無愛想だが友達が多かった。

後輩に対して威張るわけでもなく、決して周りに流されない自分というものを持っている、そんな高校生だった。

そんな青木に警察官の道を進めたのが当時の担任の教師だった。

本人はそんなもの自分には合わないと頑なに嫌がったが、ついにその説得に折れた青木は合格するわけがないと、渋々試験を受けた結果、警察官となったのだ。

当時の担任は青木の内に秘めた強い正義感を見抜いていたのかもしれない。

階段を上がると思い出に浸っていた青木の表情はガラリと変わった。

坪井高校は二棟の校舎が並びそれをつないでいる校舎という構造になっていてコの字型をしている。向かい合う校舎の反対側の三階、

青木のいる位置のちょうど反対側の窓からわずかにあかりが見えた。
「見間違いないじゃなかったな」

一瞬にして青木に緊張が走る。

直接明かりが見えるわけではなく、その教室だけがまわりの教室よりかすかに明るい。それは一定した明るさではなく、光と影が時折ゆらゆらと不規則に揺れていた。照明や懐中電灯の光ではなさそうだ。

向こうに見える校舎はここから見ると廊下を挟んで教室がある様なので、ここからは中の様子は分らない。教室から漏れる光に青木は気付いたのだ。

青木は腰を屈めた。

校舎内に青木以外の誰かがいるという可能性が大きくなったからには慎重に動かなければならない。勘づかれて逃げられでもしたら元も子もないし、実際昼間に犯人を逃したという事実がいつも以上に青木を用心深くさせていた。

辺りの様子を気にしながら静かに二階から三階へと上がる。

特に話声や物音もしない。ただ廊下に設置された冷水器が時々、ぶうーんと低い作動音をさせているだけだった。

階段を上がり終え、静かにその明かりのついた教室のある棟へ進む。

体中のあらゆる神経は緊張し、わずかな物音にでも体が反応する様に準備を怠らない。

呼吸は必要最低限の空気を取り込むだけで押し殺し、青木の首から背中にかけて一筋の汗がつつたう。

そして緊張の糸を一度ほぐすかの様に首を左右に小さく振った。あまり体が緊張しすぎると、いざという時の初動が遅れてしまう事を少年時代の喧嘩で青木は身をもって学習していた。

目標の教室までの距離はおよそ十メートル。青木の位置から三番目の教室である。

教室の中を観察するには、手前と奥にある二つのドアについた窓

ただだ。その二つの正方形からほんのわずかに薄い光が漏れていた。
（さてどうするか……）

青木はズボンの後ろポケットに手を当て、警察手帳の厚みを確認した。

手ぶらで突入したのではただの校内に不法侵入した男にすぎない、警察手帳を見せれば相手の目的が何であれ、一瞬の隙を見せるはずだ。

（瓜生の言うとおり銃を持ってくるべきだったか）

そう後悔したがもう遅い。

青木は教室の手前のドアの窓の下まで来て静かに腰を下ろし、ふうと静かに一息ついた。

ドアに背を向け、張り着くようにして中の音に耳を澄ます。

……するん……だ……

会話の内容は分らないが、誰かがいる事は確かなようだ。
教室内の人間も声を押し殺している。

（独り言か？ いや、最低でも二人か）

青木は腰を浮かし、ゆっくり、ゆっくり小さな窓から薄暗い教室へと目を凝らした。

その目に飛び込んだのは教室内に立つ、二つの影だった。

青木の覗いた窓から最初に見えたのは乱雑に並べられた机の列だった。教室の机というのはきちんと等間隔に並べられているイメージだったが、ここはそうではない。何か邪魔になる机を外側に押しのけた様な感じだった。

そして適当に置かれた机の上に小さな炎がゆらゆらと揺らめいている。よく観察してみるとそれはアルコールランプだった。教室の所々に火の点いたアルコールランプが置かれていた。青木が気付いた揺れる光の正体はこれだったのだ。

中にいる人物も照明を点けるのはまずいと思っているのだろう。という事は中で良い事をしているのではないな、青木はそう考えた。

不安定な炎の光に照らされた二つの影は向かい合ったまま何か話をしている様だ。

青木の位置から手前に一人、そしてその手前の人物に重なるようにして奥にもう一人。

（あの後ろ姿……女か？）

手前の人物を良く見ると長い黒髪に、スカートから伸びる細い足。後ろ姿とその服装からどうやら若い女の様だ。

その女と丁度重なっているためちらちらとしか見えないが、奥の人物は男だ。男の方は薄い頭髪に中肉中背、青木よりも年は上に見えた。

声こそ聞き取れないが、二人のやり取りを見ているとどうも女の方が男よりも立場が上の様に見えた。誰もいない夜の学校に中年の男と若い女、教師と女生徒の禁断の密会。褒められた事ではないが、良くあるパターンかと青木も初めのうちは考えたが、どうも違うようだ。青木の目には男がどこか怯えていて、女の言う事に嫌々従っている様に映ったのだ。

女と男の間には二、三メートル程距離があった。もし二人が恋中なら密着こそしなくてももう少し近づいていてもいいはずだ。

（痴情のもつれか？）

痴話喧嘩になって女に怒られている男という設定を想像した。

もし二人の関係が恋人同士で、学校に忍び込んで事を始めようとするのなら、そんな覗き趣味のない青木はさつさとその場を立ち去っただろう。

こちらに背を向けた女が位置を移動した時に青木の目に飛び込んできた物が、青木をその場に足止めした。

これまで青木の位置からドアを背にした女と、黒板を背に女の方を向いた男は一直線上になっていた。そこで女が横に移動した事で、今まで見えなかった男と女の直線上にあった物が姿を現したのだ。

（あれは……人間の足？）

驚いた青木は慌てて口を押さえた。女の陰から突然現れた人間の足に思わず声が出そうになったのだ。

生きているのか、それとも死んでいるのか分らないが、丁寧に並べられた机の上に人間の形をした物が横になっている。

踏み込むか、青木はそう考えたが、思い留まった。まだ早い。あいつらがこれから何をするのか、それとももうすでに済んでしまったのか分らないが、もう少し観察する必要があると青木は判断した。もしも横になっている人間に危害を加える様な素振りを見せればすぐにでも飛び込める様に構えてはいるが、不安は拭えない。

ここに來て瓜生の言った通り銃を携帯しなかった事を青木は後悔した。相手は二人いる。丸腰で飛び込んでも二人同時に動きを抑止するのは厳しい。

それにしても――

わざわざ学校に侵入して何をするつもりだろう。ご丁寧に机まで並べて男を寝かせ、まるで何かの儀式をするかのような。青木には揺らめく炎に照らされた女の顔が魔女の様にも見えた。

魔女——？

青木の胸の鼓動のスピードが緊張で早く波打ち始めた。

（まさかあの二人、ここで食事をするつもりか？）

逢引きや男女の痴話喧嘩なはずがないのだ。瓜生が学校に向かえと言った。答えは一つしかない。

青木の体中の毛穴が開き、頬に汗がったう。

（ヴァンパイアか！）

青木の中でそう結論が出たが、そうなることさらのどう動くか、判断が難しくなる。

昼間は相手がヴァンパイアなど想像もしていなかったので、実際ヴァンパイアと相對するのは初めての事だ。

瓜生は「どう動くかはあなたに任せる」と言った。俺はどう動く？ あのと二人をどう止める？

青木は教室の中を見ながら自問自答を繰り返した。

魔女は今にも踊りださんばかりに体を揺らしている。まるでおやつを前にした子供の様だ。その魔女を恐れるように背中を丸め、その様子をただ黙って見つめる中年の男。

（行くか……）

そう腹を決め、ドアに手を掛けようとした時、青木の脳裏に、その青木本人でさえも恐ろしい考えが一瞬よぎった。

どうやって——

青木は慌てて体をドアから離し、頭を振った。激しさを増した鼓動を落ち着けるために深呼吸を繰り返す。何度も、何度も……。

青木は自分自身を叱責した。

（何を考えてやがる、なんて事を考えてんだこの俺は……）

一瞬。ほんの一瞬だが青木は好奇心を持ってしまったのだ。刑事として、ヒトとしてそれは持つてはいけない好奇心を。

『ヴァンパイアがヒトの血を吸う瞬間』

青木はこれを見てみたい。いや、確認したいという方が正しいのかもしれない。

ヴァンパイアという存在を知ってしまった以上、そこに興味を示す事は仕方ないのかもしれない。だが、青木の中の正義感が一瞬でもそう考えた事を許さず、そして恥じた。

（犯罪を未然に防ぐのがめえの仕事だろうが）

そう自分を戒めて、再びドアの前に立つ。

とにかく止める事が先決だ、青木はそう決めて教室に飛び込む覚悟を決めた。

と、同時に間抜けな携帯電話の着信音が校内の静寂を打ち消した。飛び上がるほど驚いたのは青木だ。彼の携帯電話が静けさの中、余計に大きく響き渡ったのだ。

（しまった！）

刑事にあるまじきミスである。枕崎に腹を立て、さらに校内にいる誰かに気がいつてしまい携帯電話の着信を消しておく事を忘れてしまっていたのだ。

だが、そんな事は言い訳にならない。始末書どころの騒ぎではない凡ミスである。

急いで取りだした電話の相手はよりによって木下だった。病院で目を覚まし、青木に状況でも聞くつもりだったのだろう。

青木は電源を切つて電話を放り投げた。カシャンという音とともに携帯電話は暗い廊下を滑って行った。

（あの馬鹿野郎。もっと寝てろ）

自分のミスを棚に上げて木下のせいにするのだから始末が悪い。間が悪い木下も木下だが、いいとばかりである。

こうなりや仕方がない、青木は勢いに任せてドアを開け、教室に飛び込んだ。

「警察だ！ 二人とも動くな」

三人は教室で相對した。

ドアを開けた時の風圧でアルコールランプの炎がひとつ、その揺らめきを消した。

夕餉（ゆうげ）の支度

竹本は荒くなつた呼吸を落ちつけ、広い額に噴きだす汗をシャツで拭った。

この生意気な忌々しい小娘の命令を聞くのももう少しの辛抱だ、そう自分に言い聞かせながら、竹本は意識を失っている馬原啓介の体を背負っていた。

暗い廊下の先をハイキングにでも来ているかのように、軽い足取りで進む大久保沙耶の背中に追いつくように必死で足を出す。

非力な竹本には、高校生といつても体格は大人に近い啓介の体重はズシリとくる。人の完全に脱力した体はこんなにも重いものなのかと痛感した。

目的の教室までもう少し。もう少しで生物室へとたどり着く。

坪井高校のこの棟の二階には西から化学室、化学準備室、生物室、生物準備室と並んでいる。

どちらも準備室とは名ばかりで、普通の教室の様に広さもなく、要は物置みたいなものである。理科系の教師用の理科教官室もこのフロアにあるのだが、竹本はもっぱらこの物置に閉じこもっているのである。

沙耶の言う「あなたの部屋」というのは生物室の事だった。

なぜわざわざ生物室を使うのか、無人の教室は今なら山ほどある。なんなら校長室でも職員室でも使い放題だ。

だが沙耶が選択したのは生物室なのだ。

もしここで何かあれば自分に責任の矛先がむきはしないか、気の小さい竹本はそれが気がかりだった。

他の教師連中は宴会。自分はそこにいないのだから学校で何をしていたんだという話になりかねない。そんな教室を使うのは断固として拒否したい。

拒否したいが、今はこの女に従うしかないのだ。

『アレ』を手にするまでは……。

必死に荷物を運ぶ竹本をよそに、沙耶はさつさと生物室のドアを開け、中に入って行ってしまった。

教室に入る際、竹本を横目でチラリと見た沙耶の目つきは、さつさとしろと言わんばかりだった。

ようやくたどり着いた竹本を沙耶は机の上に座って足をブラブラさせていた。

「ご苦労さま。さあ、次は机よ」

床に啓介をゆっくりと降ろしながら竹本は沙耶に聞き返した。

「机？」

「そ。そんな床に置かれた物を食べるって？ 冗談じゃないわ。私にとつて記念すべき最初の食事よ。本当ならテーブルクロスでも欲しいくらいだわ」

「じゃあどうすりゃいいんだ？」

竹本は内心呆れていた。こんな時に呑気なもんだ。さつさと済ませてここから早く立ち去りたいのが竹本の本音である。

「机を並べて、その上にそいつを置いてちょうだい」

沙耶は顎で竹本を促した。

竹本の方も黙って、邪魔な机をよそによけ、六台の机を綺麗に並べてその上に啓介の体を寝かせた。

食卓の準備を音を立てないに進めていると、竹本は沙耶がいない事に気付いた。

「あの小娘、どこ行きやがった？」

辺りをキョロキョロ見回すがその姿は無い。

「まさか、あいつ俺を嵌めやがったのか」

焦りと不安で一気に汗が噴き出す。

（もともとあいつらは俺に『アレ』を渡す気などなかったのか……）
そうあたふたしていると、ガラリと教室のドアが開き、何かを抱えた沙耶が涼しい顔で入ってきた。

「ど、どこ行つてたんだ」

「どうしたのよ、そんな怒った顔して。どこにも行きはしないわよ」
「何持ってたんだ」

竹本は沙耶が抱えている物を指差した。

「あんまり暗いと雰囲気でないでしょ。明かりを点けるわけにもいかないし」

そう言うのと沙耶は教室の適当な場所にそれを所々置いて火を点けた。隣の化学室からアルコールランプを四つほど持ち出してきたのである。

「ほら、何か中世のお城みたいな雰囲気でしょ」

沙耶は子供の様にはしゃいでいる。さっきは舞台女優、今度はお姫様にでもなった気分なのだろう。

竹本は早くこの小娘との関わりを断ちたくて仕方なかった。『アレ』を手に入れるまでの我慢もそろそろ限界に近付いていた。

大久保沙耶が最初に竹本に接触してきたのは夏休みに入る直前、一学期最後の登校日だった。

終業式も終わり、各クラスが一学期最後のホームルームをしている時間帯、担当のクラスを持たない竹本はいつものように生物準備室に籠り、グラスについだ冷たい麦茶を飲んでゆっくりしていた。

職員室も理科系職員用の理科教官室も、居心地の良さはこの部屋と雲泥の差なのだ。ここでの一人の時間だけが仕事で唯一くつろげる空間だった。

だが、そんな至福の時も、またいつもの様にあの連中に邪魔された。ホームルームを抜け出してきた三年の不良三人が押し掛けてきたのだ。竹本は知らん顔をして彼らから顔を逸らした。

「竹本お、お茶」

生徒たちから陰で番長と呼ばれている大山がドカッと椅子に腰を下ろし竹本に命令した。隣にいる二人も竹本を見てにやにや笑って

いる。

この不良連中のさぼり場所の一つがこの生物準備室だった。竹本が抵抗しない、いや抵抗できないのをいいことにここへ来ては竹本をからかって楽しんでた。

青ざめた竹本は自分の飲みかけのグラスの中身を捨て、麦茶を注ぎそれを大山に差し出した。

「ぬるいんだよ」

大山は一口飲むなり、グラスのお茶を竹本めがけて浴びせかけた。当然竹本の顔から胸にかけてぐっしょりと濡れた。何も言い返さず、ただ黙って下を向いたままピクリともしない。ただただ、背中を丸め、体を小さくしてその暴挙が時間と共に過ぎ去って行くのを待つかのようだった。

それを見て不良三人は大笑いし、「夏休み会えないのが淋しいよ」と心にもない台詞を吐き捨てて、さっさと部屋から出て行った。

残された竹本はタオルを取り出し、もくもくと濡れた体と床に散ったお茶を拭き取る。

（一体あいつらは何がしたいんだ？　こんな事をして何になるんだ？　そんなに楽しい事なのか？）

この学校に五年前に赴任して、もつと言えば教師になってから間もなくして、生徒に馬鹿にされ、悪質ないじめを受け、さらにはそれを同じ仕事仲間であるはずの教師仲間からも見て見ぬふりをされてきた。

教頭からは生徒に対する姿勢が悪いのだと罵倒された。

（俺が悪い？　俺が何をした？　お前らに——生徒や他の教師連中に、一体何をしたんだ？）

竹本はひたすら耐えるだけの孤独な生活を送ってきた。

昔からそうだった。中学生の頃から、何かと因縁をつけられてはいじめられた。弄ばれた。

もちろん悔しかったし、仕返しをしてやりたかった。抵抗したかった。

だが、少しでも反抗的な素振りを見せればこれまでの倍以上の仕打ちが待っていた。竹本少年は抵抗はおろか、反応する事さえも放棄したのだ。

教師という職業を選んだのもそういう生徒、自分の様に弱い生徒を守りたい、助けたい思いからだった。

（こんなにつらい思いするのは自分だけでたくさんだ）

蔑まされてきた竹内の中の正義感は死んでなかった。つらい経験をした者だけが分かるであろう、生徒の心の闇を振り払ってやりたかった。

それがいつの間にか、なぜそうなったのか分からないがいつの間にか生徒からもいじめられる教師になってしまっていた。

竹本は絶望した。

（俺はどこへ行ってもこうやって馬鹿にされてきた。俺の人生はこんなものか。この運命からはどうやっても逃れられないのか。一体何のためにこの世に存在しているのか……）

どこからか溢れ出した涙が床に落ち、こぼれたお茶と混じった。

限界だった。教師になって二十数年、ずっと苦しんできた。それどころか十代からずっとだ。

もう十分苦しんだろう、俺がこの世からいなくなればあいつらは少しくらい責任を感じて苦しむだろうか。俺が死ねば……。

「先生、大丈夫？」

床に手と膝をつき、四つん這いの格好で涙をこぼす竹本に背後から何者かが声を掛けてきた。

ハッと我に帰り顔を上げ、振り返ったそこにはハンカチを差し出した女生徒が心配そうにこちらを見ていた。

大久保沙耶だった。

夕餉（ゆうげ）の支度 / 2

竹本は慌てて立ち上がり、沙耶に背を向け涙を拭いた。こんな自分でも教師の威厳がある。生徒の前で涙を見せなくなかったのだ。

「まだホームルームの時間じゃないのか？ 君は確かA組の――」

差し出されたハンカチは受け取りもせず、竹本は気丈に振舞った。
「大久保さんだったかな」

生徒の顔と名前などろくに覚えていない竹本はなぜかこの沙耶の名前は覚えていた。

「なぜこんな所に？」

あの不良たちにされていた無様な姿をこの生徒にも見られたのかと思うと、さつさとこの場を去ってしまいたかった。

「あの……偶然通りかかったら大きな声が聞こえて、それで……」

下を向いてもじもじしながら話すこの女生徒をなぜ覚えているのか、竹本は考えた。長い黒髪にきちんと着こなした制服、一見すると地味でどこにでもいる普通の生徒をなぜ竹本の脳は記憶していたのか……。

孤独。

そうだ、彼女は自分と同じ種類の人間なのだ。竹本は気付いた。自分と同じように孤独を彼女から感じ取ったから自然と竹本の脳に印象強く残っていたのだ。

A組の中でもひとりぼつんという、誰かと談笑している様子も見
た事が無い。

彼女も孤独なのだ、竹本はそこに親近感を覚えていた。

「先生、力が欲しくないですか？」

「力……？」

竹本にはその意味が分からなかった。

そして沙耶はその大人しそうな顔が一変し、竹本へ不気味な微笑
みを見せこう言った。

「あの人たちを仕返しができる力です」

「仕返し？ 何を言ってるんだ。教師が生徒に対して仕返しなんか

「正直に。あいつらが憎いでしょ？ 分かります、先生。私もそうだったから……」

竹本は固まった。沙耶のその瞳は優しくもあり、魅惑的だった。だがその奥にある何とも表現しがたい、どす黒い物を感じたのだ。「もし本当にそれが欲しいなら連絡ください」

そう言っ て連絡先を書き残し、沙耶は部屋から姿を消した。

竹本がすぐに沙耶に連絡したのは言うまでもない。

すでに精神的に限界だった竹本にとって、沙耶の意味深な言葉は闇に差し込んだ一筋の光だった。

二人は待ち合わせの場所を決め、竹本の車で目的地の無いドライブへと出かけた。

女性——この場合そう呼んでいいものか分からないが——女性を助手席に乗せるなんていつ以来だろうか。教師と生徒という関係上、越えてはならない一線がある事は十分分かっていた。

もちろん竹本はやましい気持ちなど微塵も持ち合わせていなかったが、もし学校にこの事がバレでもしたら騒ぎになるのは明らかだ。教師の職も追われるかもしれない。そうなれば学校の連中は厄介払いできたと大喜びだろう。

だがそうはいかない。辞める時は不良たちをはじめ、自分を馬鹿にした連中に復讐してからでないと意味がない。

そう考えた竹本は道の途中、沙耶を後部座席に移動させた。

「先生も用心深いのね」

竹本のすぐ後ろで沙耶がクスクスと笑った。

「も、もしもの事があるからね。二人でいる所を見られたら君もまずいだろう」

「別に私は構わないわ。陰口されるのは慣れてるの」

バックミラーに映る彼女の顔は少し淋しげに見えた。その表情に竹本の胸が疼く。その感情を抑えるかのように竹本は彼女から視線を外した。

彼女はあくまでも生徒だ。妙な気を起こしてはいけない。力を、何の力なのか今は分らないが、力を手に入れるために彼女というだけだ。

竹本は頭の中でそう繰り返した。

車はひたすら目的もなく走り続けた。ハンドルを握る竹本は気の向くまま右へ左へとハンドルをきった。

「先生、ヒトを辞める覚悟はある？」

後部座席の沙耶が突然切り出した。

「人？ 人間をやめる？」

何を言ってるんだ、竹本は顔をしかめた。力をくれる話を聞くはずだったのに人をやめるとはどういう意味だ。

「人間じゃなくてヒトよ。ヒ・ト」

「人間と人とは違うんだ。同じじゃないか」

「そうじゃないんだなあ」

そう言って沙耶はゴロンと後部座席に横になった。ミラー越しに目が合う。その目はまるで竹本を誘惑するかの如く、悩ましく妖艶だった。細く伸びた白い足が竹本の視界に飛び込んだ。慌てて視線を前方へと戻す。

「ヴァンパイアって知ってます？」

思わず竹本は噴き出した。仮にも生物教師にむかってヴァンパイアなどとおとぎ話を持ち出したからだ。

（所詮子供か。期待した俺が馬鹿だった）

竹本は絶望した。自分はこの女子生徒にいい様にかかわれているのだ。彼女も自分をいじめてきたあの連中となんら変わらないのだ。

「大久保さん、そんな話をするためにわざわざ僕と一緒にいるのかい？ 僕は生物の教師だよ。そんな物いるわけじゃないじゃないか」

帰ろう、竹本は車の目的地を沙耶を乗せた場所へ進路をとった。

「力が欲しいんでしょ？ 先生も一緒に進化しよ」

「進化だって？ 人が進化したらヴァンパイアになる？ そんな話聞いた事もない」

竹本は苛立った。力はおろかこんな馬鹿げた話に付き合ってもらえない。

「私だって最近知ったのよ。彼らは正体を隠して生きてるの。普通のヒトと同じように。あの人は教えてくれた。そして見せてくれたの」

「見せてくれた？ 何を？」

「血を飲む所よ。本当に飲んでたわ。あれは間違いなく血だった」

竹本は車を乱暴に路肩へ寄せた。

「君は何を言ってるんだ。血を飲む？ それだけでヴァンパイアだと何で分かるんだ？」

竹本がこんなに声を荒げたのはいつ以来だろうか。それだけ彼は力を欲していたのだ。運転席から後部座席に身を乗り出し、横になったままの沙耶に詰めよった。

沙耶はゆっくりと身を起こし顔を竹本に近づけた。その妖しく艶めかしい目に竹本は一瞬たじろいだ。

「だって私もヴァンパイアだから……」

そう言った沙耶の目は一瞬、ほんの一瞬だが人間のそれとは思えない、見た事もない姿へと変わった。

驚いた竹本は思わず体をハンドルへ押し当ててしまい、けたたましいクラクションの音を鳴らしてしまった。

「先生が望むなら私からあの人へ頼んであげる」

大人しく思えた女子生徒の姿はもうそこにはなく、竹本には沙耶のその姿がまるで魔女の様に見えていた。

夕餉（ゆうげ）の支度 / 3

その日、大久保沙耶が竹本に約束したのは二つの事だった。

一つはヴァンパイアが存在を絶対に口外しないこと。もう一つは狩りの練習をすること。

一つ目の約束は簡単だ。

ヴァンパイアが存在など端から信用していなかったし、誰かにそんな事を言った所で大笑いされるのが関の山だ。

信用していないとはいえ、あの沙耶が一瞬見せた眼。唯の見間違いか。だが確かに一瞬だけ丸いはずの瞳が縦に長く伸び、まるで昼間の猫の様だった。

恐ろしかった。瞬きをするほんの一瞬だった。その瞬間、彼女は本当に魔女の様だった。

終業式の日に最初に話しかけてきた時の沙耶と、今日の彼女とはまるで別人だった。この数日で生まれ変わったように自信に充ち溢れていた。

存在こそ半信半疑だが、それが本当にヴァンパイアの力だとしたら……。

欲しい。

竹本の生きる目的がここで新たに生まれた。

ヴァンパイアになる——人生を見失っていた竹本にはまさに救いの女神だった。

そこで二つ目の約束が課題になってくる。

狩りの練習？

竹本のヴァンパイアのイメージは美女の生き血を吸う、黒いマントの吸血鬼だ。夜な夜な棺の中から出てきて蝙蝠に変身する。十字架と太陽の光を嫌う、それがヴァンパイアだ。

ヴァンパイアについてはもっと詳しく聞く必要があるし、狩りの練習など気の小さい自分にできるはずもない。人を襲うなんて犯罪

行為は危険すぎるし、警察に捕まりでもしたらそれこそ人生は終わってしまう。

その日から数日間の間、竹本は仕事も手につかず、ひたすら悩み続けた。

一日でも早く力が、力が欲しい。

沙耶とのドライブから一週間後、何の音沙汰も無かった沙耶から連絡が来た。

竹本は自分から連絡したかったのだが、二つ目の約束である『狩り』をする事だけは踏ん切りがつかないままだった。

沙耶は竹本に来週までに狩りの練習をするように指示して来た。ご丁寧に場所まで指定してきたのだ。江津湖なら人も少なく狩りがしやすいだろう、沙耶はそう言うのだ。

なぜだか分からないが、電話口の沙耶はどこか焦っている様子だった。

狩りといっても何をすればいいのかさっぱり分からない。竹本は練習の前にもう一度沙耶と会う約束を取りつけたが、沙耶はそれを拒否した。

電話での態度がこれまでと明らかに違うことが疑問だったが、機嫌を損ねて約束が反故にされる事を恐れて深くは追求しなかった。二十以上も年の離れた相手にも強く出れない、小さな男なのである。次の日、竹本はいつもの生物準備室に一日中籠もり、狩りのシミュレーションを何度も繰り返し返した。

竹本の知るヴァンパイア、ここでの情報はあくまでも映画からなのだが、彼らはみな鋭い犬歯を持っていて首筋から生き血をすす。そんな真似を竹本が出来るはずもない。

とにかく血を吸う傷を作ればいい。ほんの小さな傷。あまり大きすぎると事が大事になってしまう。相手には悪いが通りすがりに少しでも、切り傷程度を。

ただの練習なんだ、練習したという事実さえあれば文句あるまい。

竹本はそう考えた。

「早い方がいい。明日、いや下見をしておいた方がいいかもしれない。明後日だ」

日も傾きかけた頃、竹本は学校を出て沙耶の指定した江津湖へと向かった。そして彼なりに良さそうな場所を見つけ、その場所を明日の狩場と決めた。

夜は眠れなかった。明日、自分は犯罪を犯そうとしている。そう考えただけで体が震え、胃液が逆流するようだった。

「力を手に入れるためだ。これくらい、これくらいの事……」
そう自分に言い聞かせ続け、とうとう朝日は上った。

その日、竹本は朝から少しの時間顔を出しただけで昼前には学校を後にした。

近所の公園にある公衆トイレで季節外れの黒いトレーナーに着替え、帽子を目深にかぶった。

さらにズボンのポケットにはハンドタオルを忍ばせた。そして車に戻り、今度は瞬間接着剤と以前、生物室で拾った長く鋭い付け爪を取り出し、それを右手の親指にしっかりと張り付けた。

生徒が落としていたであろう付け爪がまさかこんな所で役に立つとは思いもしなかった。

準備は出来た。竹本は近くにあるパチンコ屋の駐車場へ行き、車の中でじつと時が経つのを待ち続けた。

昨夜同様、何度もシュミレーションを繰り返す。何度も何度も……。

竹本はいつの間にか眠ってしまった。昨晚の睡眠不足が祟ったらしい。

時計を見ると六時を過ぎていた。行動に移すにはまだ早い。

気持ちを落ち着かせるように竹本はコンビニでおにぎりと水を購入した後、ようやく江津湖へと車を走らせた。万が一の事を考え車は江津湖内の駐車場ではなく、近くのスーパーに停めた。

陽も暮れてあたりは暗くなってきた。とにかく時間の流れがゆっくりと感じた一日だった。やっとその時が近づいてきたのである

竹本は夜の湖に身を潜めた。

今日だけ、今夜のこの一回きりでいい。この一回の練習で認めてもらい力を手にするのだ。緊張で足が震える。

獲物は誰にするか。それが問題だった。

自分より体が大きく、強そうな者はいけない。できれば女か子供。広い江津湖の中でもここを選んだのも、人気が特に少ないのもあるが、この先に学習塾があるのだ。塾帰りの子供を襲う、それが竹本の狙いだった。

木々の茂みにしゃがみ、時々寄って来る小さな虫を振り払いながら竹本は獲物を待った。

目の前を何人か通って行ったが、竹本の基準に満たなかった。というより気が小さい性格がここに来て出てきたのか一歩が出ない。体が動かないのだ。

「次だ。次に来た者が獲物だ」

竹本は覚悟を決めた。

ちょうど向こうからライトを点けた自転車がやって来る。

竹本は顔を下げたまま自転車に向かって歩き出した。ポケットの中の手はタオルを握りしめている。

自転車に乗っているのは中学生くらいの男の子だった。自転車と竹本がすれ違う、その瞬間――。

竹本は後ろから少年の口にタオルを押し当て、体を抱えあげた。ガシャンと派手な音を立てて倒れた。

次に、暴れる少年の腕に付け爪を突き立てる。竹本は自分でも驚くほど冷静だった。さっきまで足が震えていたのが嘘のように呼吸一つも乱れていない。

さらに竹本は爪を差した個所に噛みついた。

これだ、練習とはいえ百点じゃないか！

ほんの一瞬の出来事だったが、竹本にはとてもゆっくり、そこだけ時間が止まったような感覚だった。

暴れる少年から離れ、竹本は無我夢中に走った。どこをどう走ったか覚えてもいない。まわりも全く視界に入っていない。ただただ黒い闇の中を走っているだけだ。後ろから「待て」という声が聞こえたが待てるはずも無い。

どれくらいの距離を走っただろうか。竹本は足を止めた。

はあはあと呼吸が荒れている。気付けばさっきの場所から一キロ以上は離れていた。

人を襲った罪悪感よりもまるでマラソンを走り終えたような満足感、充実感が竹本にはあった。

「これで力が手に入るのだ」

沙耶に言われた通り危険を冒して実践練習をしたのだ。力を手に入れた後の事を考えると楽しみで仕方無かった。すでに今自分がやってしまった事などすっかりどこかへ行ってしまったているのだ。

竹本は心の底から笑った。怖いものは無くなった、そんな気がしたのだ。

夕餉（ゆうげ）の支度 / 4

車に戻ると竹本は意気揚々と沙耶に報告の電話を入れた。

襲った中学生に顔を見られてない自信があつたし、証拠も何一つ残してはいない。完全犯罪、完璧な狩りだった。

これで力が手に入る。これまでの無様な人生ともおさらばできる。竹本は興奮していた。

それにしてもこれは病みつきになる。竹本は実践練習を無事に済ませられた事で気持ちが大きくなっていた。

「……もしもし」

沙耶が電話に出た。声を殺して話しているようで聞き取るのがやつの音量だった。

「やったぞ、大久保君。君の言った通り練習してきたぞ。私はやったんだ」

竹本は興奮を抑えきれず、自然と声も大きくなっていた。

「そう……」

沙耶の反応は驚くほど冷めた反応に、竹本は拍子抜けした。それはまるで百点のテストを自信満々に持ち帰った子供に対して、母親が「それがどうした」とでも言う様な冷酷さだった。

「や、約束は守った。誰にも見られていないし、ちゃんと君の指示した場所で練習したんだ。次は君の番だ。君が約束を守る番だ」

沙耶の予想外の反応に焦った竹本は電話口で捲し立てた。どうも様子がおかしい。

「ちゃんと約束は守ってくれるんだろうな？ 俺は犯罪を犯したんだ。早く、早く力が欲しいんだ。いつくれる？ 明日か、明後日か？」

電話の向こうの沙耶は黙りこくっている。電話が切れてるのかと、携帯電話の画面を確認するほどだった。

「……また連絡します」

それだけ言って沙耶は電話を切ってしまった。

竹本は目の前が真っ暗になった。そして自分がついさっきやってしまった行いを改めて思い返し、体中から嫌な汗が噴き出してきた（どうしたんだ。何かやばい事になったのか。いや、そんなはずはない。あの場所には私とあの少年だけだった。誰もいなかった。ばれてはいない。ばれてはいない……）

急に恐ろしくなった竹本は急いで車を走らせ、自宅へと帰った。そしてその日も一睡もできなかった。

沙耶が連絡してきたのはそれから五日程してからだった。

それまで新聞やテレビのニュースであの夜の事が出てこないか、いつ警察が自分を尋ねてきやしないかと不安に押しつぶされそうになっていた。しかも沙耶に連絡しても一向に返事が無かったのだ。まさに生きた心地のしない日々だった。

そんな時にかかってきた沙耶からの電話はまさに救いの女神だった。

その日のうちに竹本は沙耶に呼び出され、江津湖へと向かった。あの場所に行く事はいいい気持ちがいなかったが、力を手に入れるために渋々出かけて行ったのだった。

久しぶりに顔を合わせた沙耶はあの夜の電話の時とは別人のように明るく、上機嫌だった。時々腕を絡めて来て竹本を困らせた。生徒と腕を組んでいる所を見られるなどたまったものではない。

「ここね」

竹本が少年を襲った場所で二人は足を止めた。

竹本はあの夜を思い出し、身震いした。いくら力が欲しいとはいえ、恐ろしい事をしたものだ。

「おめでとう。約束通り力をあげるわ」

「ほ、本当か」

「本当よ。ちゃんと約束守ってくれたしね」

竹本は嬉しさのあまり飛び上がりそうになった。しかしあくまで

も生徒の前という事もあり、それをぐつと堪えた。

「で、何してくれるんだ？ どうやったら力が手に入るんだ？」

そう言えば竹本は『力』としか知らなかった。それが何を意味し、自分がどうなるのかを知らなかった。知っている事といえば、彼女がヴァンパイアという事だけなのだ。

「まさか……君が私の血を吸うと私がヴァンパイアになれる……のか？」

竹本の知っている吸血鬼に対する知識はそうだった。吸血鬼に血を吸われたものも吸血鬼になる、そう映画で見た。

少し怯えながら尋ねた竹本を見て沙耶は明るく笑った。

「そんなわけないじゃない。先生の血を吸うとか考えただけで嫌だわ」

よくそんな人が傷つくような事を平気で、しかも笑いながら目の前ではつきり言えるもんだ、竹本は苦笑いするしかなかった。

「あのね、ヴァンパイアになるにはヴァンパイアの血が必要なの」「ヴァンパイアの血？」

「そう。ヴァンパイアの血をヒトが一口飲めばヴァンパイアになれるの」

そんな簡単なことで力が手に入るのか、竹本はますます力を手にいれなくなった。血を飲むだけで強くなれる。そんなうまい話があるとは思ひもしなかったのだ。

「じゃあ君の血をくれるのか」

沙耶は笑いながら首を横に振った。

「残念。それは無理」

「なんだと？ それじゃあ約束が違うじゃないか」

「慌てないで。ヴァンパイアの血はあげるわ。まだ私の血じゃ駄目なの」

ここまで来てこの小娘は焦らすのかと、竹本はいい加減腹が立ってきた。この笑った顔もどこか自分を弄んでいるように見えてきたのだ。

「どういう事だ。君もヴァンパイアだろう——」

「しっ。そんな大きな声出さないで。誰かが聞いてたらどうするのよ。馬鹿じゃないの」

大の大人が湖のほとりで年端もいかない小娘に怒られている、なんとも滑稽な光景である。

「いい？ ヴァンパイアの噂があなたのせいで広まったら私まで殺されちゃうの。気をつけなさいよ」

殺されるとは穏やかでない。竹本はヴァンパイアという存在の危うさを力欲しさに見失っていた。

確かにそんな連中が人間に紛れ込んでいるとしたらこんなに危険な物は無い。

いつ自分が昨日の少年の様に狩りの対象になるかも分からないのだ。

しかしである。自分がそっち側になればそんなものは関係ないと開き直れる竹本も彼の中に存在していた。

「悪かった。気をつけるよ。で、いつになったら血がもらえるんだ私は」

沙耶の表情は一変して険しいものになった。

「ちゃんと計画は動いてるわ。だからその時が来るのを我慢して待つて。くれぐれもヴァンパイアの事を他の所で口にしないで」

竹本はただ黙って沙耶に従うしかなかった。まだ待たされる事には納得できなかったが「殺される」という物騒な単語が出てきた事で、彼の中にもより慎重に動かなければという意識が芽生えたのだ。夏休みが終わり、新学期が始まって『その時』はやって来なかった。

休み明けに早速不良たちが竹本の事をおもちゃにしに来たが、竹本は耐え続けた。

そしてある日の放課後、やって来たのはあの男だった。

夕餉（ゆうげ）の支度 / 5

あの男は物音ひとつ立てずにいつの間にか生物準備室に入ってきた。

暗くて顔は見えなかったが、不気味な男が一瞬見せたあの目はまさしく沙耶が見せたあの同じ眼、およそ人間の物とは思えないあの眼だった。沙耶とは全く違う恐ろしさがその男は醸し出していた。

聞けば前日にあの大山をはじめとする学校のクズ達を病院送りにしたのは自分だ、と言う。

クズたちがやられたと聞いて竹本は飛び上がるほど嬉しかったそのニュースはこの不気味な男の仕業だった。それを聞いて竹本の歓喜は恐怖へと変わった。

そんな複数相手を相手にしても物ともしない男とこの狭い部屋に二人きりなのだ。

男はさらに言う。

「目立つな」

竹本の行った実践練習の事だった。

だがそれは沙耶の指示だった。力をくれるという条件があったからこそ、あんな危険な行為に及んだのだ。この男にそんな事言われる筋合いがあるものか。

男が去り際に行ったあの言葉、

「アイツにアレをやったのが俺だよ」

アイツとは沙耶、アレとはヴァンパイアの血。つまり沙耶をヴァンパイアにしたのはあの男の血だったのだ。

後日、竹本は沙耶に問い詰めた。あの男はやって来た事、そして「目立つな」という言葉を残していったこと。

それを聞いて沙耶の顔色は青くなった。沙耶が竹本にヴァンパイアの話をした事に、あの男はえらく憤慨したらしい。掟に逆らったのだ、と。

竹本は慌てた。

「じゃあ、力は手に入らないのか？」

「大丈夫。何とか説得して今回だけは許してくれたわ。でも次はない、と。もしあなたが誰かにヴァンパイアの事を話す様な事があつたら……」

沙耶は語尾を濁した。

「……あつたら？」

「……あなたを殺すって」

竹本は絶句した。昨日も直接あの男に言われた言葉だ。とんでもない事を知ってしまったのだ。力に目がくらんで踏み込んではない世界の一線を越えてしまったのだ。

そして沙耶はあの男の立てた計画を語りだした。竹本をヴァンパイアにさせる計画を。

聞けば沙耶の血ではヴァンパイアになれないらしい。なぜなら沙耶はまだヒトの血を飲んでいないかららしい。ヴァンパイアの血を飲み、ヴァンパイアとなってもヒトの血を飲まなければ力が目覚めないのだ。

なぜヒトの血を飲まないのか、と沙耶に尋ねると、「あの男がまだ許してくれない」そうだ。

竹本は、

「君はわざわざ晩飯を食うのもいちいち人に許可をもらうのか？」

と、からかう様にわざと笑いながら沙耶を見た。

そもそも許可だ、何だと言っているのは餓死してしまう。あの男にどれほどの権利があるというのだ。竹本はそう疑問に思ったのだ。

竹本の言葉に沙耶の顔色は真っ赤に変化した。

「いい？ あなたもヴァンパイアになりたいならあの人の事を軽々しく批判しない事ね。私がなんであの人の言いつけを守るか分かる？」

その表情は怒りとともに恐怖さえも含んでいるようにも見えた。

「あの人は——人を殺してる」

「え？」

竹本は聞きなれない、普通の会話ではまず聞く事の無い言葉を聞いて思わず面喰った。

「人を……殺してるだと？」

「そう。あの人にとつてヒトは食卓に並ぶ牛肉や鶏肉と一緒になの。何の感情も抱いていない。食材の中で生活している感覚なのよ。あなたにヴァンパイアの話をしたと聞いてあの人はあなたを殺すって言ったわ。でも私は必死に説得してなんとか思いとどまってくれた」

竹本は自分の知らない所でこの沙耶に命を救われていたようだ。だが、なぜそこまでして自分を庇うのか、竹本には分からなかった。

愛か？

そんなはずは無かった。十代の娘が四十過ぎの男に惚れるはずも無い。しかしそのまさかが――。

「勘違いしないでね。私先生の事なんかこれっぽっちも何とも思っていないから。いじめられていたのを同情した私が馬鹿だったわ。私のせいで人が殺されるのなんて気持ち悪いから」

竹本の妄想は一瞬にして崩れ去った。

心のどこかで、わずかだが沙耶が自分を好きで近づいてきたのではないかという下心が竹本の中に存在していたのかもしれない。

「そ、それは悪かったね」

「ふん。とにかくヴァンパイアにはヴァンパイアのルールがあるみたいなの。無闇に同族を増やしちゃいけないんだって」

「じゃあなんであいつは君を……」

「ふふ。あの人は恐いけどゴミみたいな私をに優しくしてくれた。あの人はすごいわ。あの人のおかげで私の人生は明るくなったの。あの人のおかげで……」

あの男を語る沙耶の目はまさに恋する乙女だった。

そう言う事か。竹本はあの男と沙耶の関係をその表情を見て悟った。何があつたか知らないが、つまりは二人はそういう事なのだろう。

う。自分に気があるのかもしれないなどと着た死した自分が恥ずかしい。

「彼があなたをヴァンパイアの仲間にする計画を立ててくれているの。いい？ あなたの為に」

殺すとまで言っていた男が急にどんな心変わりだと竹本は思った。多少不信に思ったが、沙耶の言うとおり次の連絡を待つことにした。

連絡を待つ事数日、竹本も沙耶も普通の学校生活を送った。まわりから怪しまれる事の無い用に学校では目も合わせなかった。例えば竹本の方から催促の視線を送ったところで、沙耶の反応はとても冷やかなものだった。

そして報せは届いた。

明日の夜八時に学校で

沙耶からのメールはいたってシンプルだった。

竹本の心は躍った。ようやく届いた報せにその時が来るのが待ち遠しかった。

準備室に一人息を潜めて籠もり、全教師が帰って行くのを早く早くと心の中で急かしていた。

約束の時間に現れた沙耶は薄い化粧を施し、いつもより大人びて見えた。

初めての食事を得られる喜びが、時折見せる頬笑みに竹本の目にはまるで魔女の様にも映った。

計画はこうだった。

まず沙耶がお相手、つまり餌を校舎内へおびき寄せる。場所は一年の教室。

竹本は隙を見て後ろからクロロホルムを嗅がせ、意識を無くさせる。くれぐれも慎重に、暴れられないよう、慎重にである。

そこからは沙耶の指示に従い、ディナーを無事に済ませる。

竹本の一族への転身はその後ということだった。

その計画を語る沙耶は嬉々としていて、不気味だった。

竹本は黙ってその話を聞いていたが、目的を成し遂げたならこの女とも関わりを断たねばならない、本能が彼女の危うさを感じ取っていた。

そしてあれから姿を現さないあの男。沙耶の裏にいるヴァンパイア。

こいつらから解放されて自由の身になってこそヴァンパイアの力なのだ、と竹本は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0484r/>

K N A V E ~ 青女月の少年

2012年1月4日15時48分発行